ので、眠られない。燈を挑げると秋蟲は燈を見て、飛んで入る。

曲檻

流水照朱欄。浮萍亂明鑑。
誰見檻上人。無言觀物泛。

【字解】【一】曲檻　題して曲檻といふも、兼ねて浮萍を詠ずる。

【詩意】流水が朱塗の欄干に映り、浮草が水鑑を亂して居る。檻上の人は佇んで、つくづくと眺めて居る。

雙池

汧流入城郭。亹亹渡千家。
不見雙池水。長漂十里花。

【字解】【一】雙池　東坡の爲つた池で、府治より水を通ずる。東坡の詩に、使君尙許分池綠の句がある。【二】汧流　汧山の南麓から出て渭水に入る、前に註す。東坡の詩に、北池近所鑿、中有汧水碧。汧流を一本に泝流に作るは誤である。【三】亹亹　水の流れ進む貌、左思の吳都賦に、清流亹亹。

【詩意】東坡の爲つた池で、府治から水を通はせる。水は亹亹として千家を渡り、雙池の水を見ない。それは、いつも十里にわたつて花を漂はして居るからである。

荷花

田田抗朝陽。節節臥春水。
平鋪亂萍葉。屢動報魚子。

【字解】【一】田田　荷葉が水に浮べる貌、古樂府に、江南可採蓮、蓮葉何田田。【二】節節　續博物志に、藕生應月、閏月益二一節。顧況の詩に、藕泥封二藕節一。晉俳歌に、節節爲レ雙。【三】魚子　謝朓の詩に、魚戲新荷動、丘遲の詩に、荇亂新魚戲。

【詩意】荷葉は水に浮んで、朝日を受けて居る。蓮の根は、節節生長して水に臥す。風なくて荷葉と浮草との折折動くのは、池中の魚が泳いで居るからである。

魚

湖上移魚子。初生不レ畏人。
自從識鈎餌。欲見更無因。

【字解】【一】更無レ因　列子狎鷗の事より化し出す。列子に、海上有レ好二鷗鳥一者、往二海上一從レ鷗遊、其父曰、汝取來、吾觀レ之、明日之二海上一、鷗舞而不レ下。

【詩意】湖上に魚を移す、最初は人を畏れなかつたが、鈎餌にかかつてからは、とんと見えなくなつ

た。（此種の細微な處、他人は意を留めないが、東坡は必ず觀察を怠らない。）

牡丹

花好長患稀。花多信佳否。
未有四十枝。枝枝大如斗。

【字解】【一】四十枝　東坡の自註に、牡丹花有二四十餘枝一。【二】枝枝　古樂府、焦仲卿妻の詩に、枝枝相覆蓋。

【詩意】花の富貴なるもの、大きいのが好い。花が多くて、四十枝にもなると、大さ斗の如しといふ佳なものは見られない。

桃花

爭開不待葉。密綴欲無條。
傍沼人窺鑑。驚魚水濺橋。

【字解】【一】人窺鑑　人面桃花の意、唐の崔護の詩に、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不知何處去、桃花依舊咲春風。

【詩意】花が枝に滿ちて、葉も條も見えない。沼に傍うて水に映る花の影を見ると、魚を驚かして跳ねる水が橋に濺ぐ。（人面桃花相映じて紅なりの句が思ひ浮ばれる。）

李

不及梨英軟。應慚梅蕚紅。
西園有千葉。淡佇更纖穠。

【字解】【一】千葉　東坡の自註に、城西有二千葉李一、如二茶蘼一。【二】纖穠　詩、召南に、何彼穠矣、華如二桃李一。

【詩意】李の花は梨の花の軟なるには及ばないし、梅の花の紅なるにも劣つて居る。併し城西の千葉李は、茶蘼のやうで、淡く佇んで居り、又、しげくたをやかである。（茶蘼は蔓生の灌木で、香氣が多い。）

杏

開花送餘寒。結子及新火。
關中幸無梅。汝彊充鼎和。

【字解】【一】及二新火一　周禮の註に、夏取二棗杏之火一。【二】關中幸無梅　東坡の自註に、關中地不レ生レ梅。宋中興四朝志に、潘岳以爲秦在二隴函二關之間一、是爲二關中一、然鳳州之散關、隴西之隴關、商州之武關、原州之蕭關、藍田之嶢關、其名、皆先レ秦而出、則凡地在二四關之内一、皆當二繫レ關以爲レ名也。【三】鼎和　宋書に、若升二之宰府一、必鼎味斯和。書經の說命に、若作二和羹一爾惟鹽梅。

【詩意】餘寒を送つて花が開き、初夏が來て實を結ぶ。鹽と梅とを以て鼎味を和するが、關中には、其の梅がないから、汝杏は梅に代つて鼎和に充てられるのである。

梨

霜降紅梨熟。柔柯已不勝。　霜降つて紅梨熟し、柔柯已に勝へず。
未嘗蠲夏渴。長見助春氷。　未だ嘗て夏渴を蠲かず、長く見る春氷を助くるを。

【字解】【一】紅梨　杜甫の詩、紅梨廻得霜。【二】助春氷　梨の性は冷利。陶弘景、之を快果といふ。蓋し助春氷の意。春氷、一本に、冬氷に作る。

【詩意】霜が降つて梨の實も熟する。梨の性は冷利である。陶弘景は之を快果と言つたが、夏過ぎて實を結ぶので夏渴を醫することが出來ない。長く春氷を助けるのみである。

棗

居人幾番老。棗樹未成槎。　居人幾番の老ぞ、棗樹は未だ槎を成さず。
汝長才堪軸。吾歸已及瓜。　汝長ずるも才に軸とするに堪ふ、吾歸る已に瓜に及ぶ。

【字解】【一】幾番　元、張翥の詩に、幾番山雨月中生。【二】槎　桴、杜甫の詩に、奉使虛隨八月槎。【三】才堪軸　東坡自註に、棗樹至難長。白樂天が杏園中棗樹の詩に、君求悅目豔、不敢爭桃李、君若作大車、輪軸材須此。【四】及瓜　左傳莊公八年に、齊侯使連稱、管至父戍葵邱、瓜時而往、曰、及瓜而代。

【詩意】居人は、どれ程、老いたであらう。棗樹は成長し難くて槎を成さない。美を桃李と爭はず、大車の輪軸には此材を用ゐると言つた所で、才に軸となるに留まる。我が歸る時が來たが、八月の槎がない。

櫻桃

獨遶櫻桃樹。酒醒喉肺乾。　獨櫻桃樹を遶る。酒醒めて喉肺乾くならん。
莫除枝上露。從向口中溥。　枝上の露を除くこと莫れ、口中に向つて溥たるに從せよ。

【字解】【一】向口中溥　溥は露多き貌。東坡が檄欖の詩に、待得餘甘回齒頰、已輸崖蜜十分甜。或はいふ、崖蜜は櫻桃と。

【詩意】獨、櫻桃の樹を遶る。酒も醒めて喉の乾くとき、枝上の露を除くなかれ、口中を濕ほすに任せよ。(東坡が檄欖樹の詩に、已輸崖蜜十分甜とあるが、崖蜜といふは櫻桃のことだといふ。)

石榴

風流意不盡。獨自送殘芳。　風流意盡きず、獨自ら殘芳を送る。
色作裙腰染。名隨酒盞狂。　色は裙腰の染むるを作し、名は酒盞の狂に隨ふ。

【字解】【一】獨自　一本に獨是に作る。【二】裙腰染　梁元帝の詩に、芙蓉爲帶石榴裙。【三】名隨酒盞狂　東坡の自註に、酒名有石榴。梁簡文帝の詩に、蠡杯石榴酒。

【詩意】風流未だ盡きないで、梅雨中にも深紅の花を開き、百花に殿する。色は裙腰の染物によく、名は酒盞の狂するに隨ふ。(酒の名に石榴といふがある。)

樗

自昔爲神樹。空聞蜩鵙鳴。
社公煩見輟。爲爾致羊羹。

昔より神樹と爲すも、空しく聞く蜩鵙の鳴くを。
社公輟めらるるを煩はす、爾の爲に美羹を致さん。

【字解】【一】神樹　魏志の邴原傳の註に、原嘗行得遺錢、以繫樹枝、而繫錢者愈多、謂之神樹、原乃辨之里中、遂斂其錢、以爲社供。【二】蜩鵙　蜩は青斑ある蟬、鵙は伯勞。【三】社公　地の神、禮記の註に、今人謂社神爲社公。後漢書、費長房傳に、鞭笞百鬼、及驅使社公。【四】致羊羹　東坡の自註に、樗、舊爲土地廟所蔽、余始遷廟牆北。戰國策に、中山君饗都士大夫、司馬子期在焉、羊羹不徧、司馬子期、怒而走於楚。

【詩意】古來神樹となすも、空しく蟬や伯勞が樹上に鳴くのみ。東坡の鳳翔府に居つた時、樗が廟牆に蔽はれたので、牆を北に遷した。社神が迷惑をしたから、祭りて羊羹を供する。（樗、和名あふち。）

槐

採擷殊未厭。忽然已成陰。
蟬鳴看不見。鶴立赴還深。

採擷殊に未だ厭はず、忽然として已に陰を成す。
蟬鳴いて看れども見えず、鶴立ちて赴くこと還深し。

【字解】【一】採擷　つまみとる、謝朓の詩に、遇君時採擷、玉座奉金巵。抱朴子に、槐子服之補腦、令人髮不白而長生。【二】成陰　左太沖の魏都賦に、槐以蔭塗。【三】鶴立　東坡の自註に、上有野鶴三四。

【詩意】君に遇うて、實をつまみとつた槐も、成長して陰を成し蟬も鳴く。上には野鶴が三四羽居る。

松

強致南山樹。來經渭水灘。
生成未有意。鴉鵲莫相干。

強ひて南山の樹を致し、來つて渭水の灘を經。
生成未だ意あらず、鴉鵲相干すこと莫れ。

【字解】【一】鴉鵲莫相干　柏葉松身を檜となす。東坡の石經院の詩に、天矯庭中檜、枯枝鵲蹈消。此詩意と正に同じ。

【詩意】南山の樹を拉し來つて渭水の灘を過ぎるので、生成を必とすることが出來ない。鴉も鵲も枝を蹈み消すな。

檜

依依古松子。鬱鬱綠毛身。
每長須成節。明年漸庇人。

依依たり古松子、鬱鬱たり綠毛の身。
長ずる每に須らく節を成すべし、明年漸く人を庇ふ。

【字解】【一】依依　枝の茂る貌、詩の小雅、楊柳依依。【二】綠毛身　列仙傳に、偓佺好食松實、體生毛。【三】成節　格物總論に、松樹碟柯多節。又、袁宏の松の詩に、森森千丈松、磊砢非一節。

【詩意】柏葉松身を檜とする。依依たり古松子、鬱鬱たり、綠毛の幹、生長するに隨つて節をなす。明年頃は人を庇ふ程に繁茂するであらう。

柳

今年手自栽。問我何年去。　今年手自ら栽る、我に問ふ何れの年か去ると。
他年我復來。搖落傷人思。　他年我復來らば、搖落して人思を傷ましめん。

【字解】【一】傷人思　世說に、桓溫北征經金城、見前爲琅琊時、種柳、皆已十圍、慨然歎曰、物猶如此、人何以堪、攀枝執條、泫然流涕。

【詩意】今年手植の柳、他年、我復此地に來らば、搖落して人の思を傷ましめるであらう。（昔、桓溫が北征して金城を經、先年種ゑた柳の十圍もあるやうになつたのを見て、泫然として涕を流したといふことがあるが、此詩も此意である。）

次韻子由除日見寄

子由が除日に寄せられしに次韻す

薄官驅我西。遠別不容惜。　薄官我を驅つて西せしむ、遠別は惜むを容さず。
方愁後會遠。未暇憂歲夕。　方に愁ふ後會の遠きを、未だ歲夕を憂ふるに暇あらず。
强歡雖有酒。冷酌不成席。　强ひて歡ぶは酒ありと雖も、冷酌席を成さず。
秦烹惟羊羹。隴饌有熊腊。　秦烹は惟れ羊羹、隴饌に熊腊あり。
念爲兒童歲。屈指已成昔。　念ふ兒童たりし歲を、指を屈すれば已に昔と成る。
往事今何追。忽若箭已釋。　往事は今何ぞ追はん、忽ち箭の已に釋くが若し。
感時嗟事變。所得不償失。　時に感じて事變を嗟く、得る所は失ふを償はず。
府卒來驅儺。矍鑠驚遠客。　府卒は來つて驅儺し、矍鑠遠客を驚かす。
愁來豈有魔。煩汝爲攘磔。　愁來るも豈魔あらんや、汝を煩す爲に攘磔せよ。
寒梅與凍杏。嫩蕚初似麥。　寒梅と凍杏と、嫩蕚初は麥に似たり。
攀條爲惆悵。玉蕊何時折。　條に攀ぢて爲に惆悵す、玉蕊何の時か折る。
不憂春豔晚。行見棄夏蘗。　春豔の晚きを憂へず、行くゆく夏蘗を棄てらる。
人生行樂耳。安用聲名籍。　人生は行樂のみ、安んぞ聲名の籍たるを用ひん。
胡爲獨多感。不見膏自炙。　胡爲れぞ獨多く感じて、膏の自ら炙るを見ざる。
詩來苦相寬。子意遠可射。　詩來つて苦だ相寬うす、子が意は遠くして射るべし。
依依見其面。疑子在咫尺。　依依として其の面を見る、疑ふらくは子咫尺に在り。
兄今雖小官。幸忝佐方伯。　兄は今小官と雖も、幸ひに忝なく方伯を佐く。
北池近所鑿。中有汧水碧。　北池は近ろ鑿つ所、中に汧水の碧なるあり。
臨池飲美酒。尙可消永日。　池に臨みて美酒を飲む、尙ほ永日を消すべし。

但恐詩力弱、鬬健未免(一八)馘。　但恐る詩の力弱くして、鬬健未だ馘を免れざるを。
詩成十日到。誰謂千(二〇)里隔。　詩成りて十日にして到る、誰か謂ふ千里を隔つと。
一月寄一篇。憂愁何足擲。　一月に一篇を寄せば、憂愁は何ぞ擲つに足らんや。

【字解】【一】薄宦驅レ我西　陶淵明の詩に、飢來驅レ我去。史記鄒富時傳に、年少官薄、然其同遊知交、皆其大父行、天下有名之士也。【二】強歡　新論に、強歡者、雖レ笑不レ樂。【三】羊羹　羊のあつもの、戰國策に、中山君饗二都士大夫一、羊羹不レ遍。前にも出づ。【四】隴　今の隴縣は、陝西關中道に屬す。【五】熊腊　腊は乾肉、淮南子に、熊當レ心有二白脂如レ玉、味甚美、俗呼二熊白一。周禮に、腊人、掌乾肉。【六】屈レ指　白樂天の詩に、請君屈二十指一、爲レ我數二交親一。【七】驅儺　歲暮に疫鬼を逐ひ拂ふ、月令に、季冬之月、命二有司一大儺旁磔。註にいふ、此月有二厲鬼一、將レ隨二强陰一、出害二人一、旁二磔於四方之門一、磔、攘也と。後漢禮儀志に、季冬先レ臘一日大儺、謂二之逐疫一、選二中黃門子弟年十歲以上、十二以下百二十人一爲二倀子一、皆赤幘早製、執二大鼓一以逐二惡鬼於禁中一。【八】鬖鑠　老健者をいふ、後漢書光武紀に、鬖鑠哉是翁也。【九】嫩蓼初似レ麥　關中には梅がない。今、嫩蓼似レ麥といふ、其の長じ難いことを言つたものである。嫩は媠の俗字、草木の若き芽。【一〇】攀レ條爲惆悵　文選、古詩に、攀レ條折二其榮一、惆悵は、うらみいたむ、白居易の題二慈恩寺一の詩に、惆悵春歸留不レ得、紫藤花下漸黃昏。【一一】夏蹇　蹇は通じて核に作る、李梅の屬をいふ。前漢書、陳平傳に、食二糠蹇一耳。【一二】人生行樂耳　漢書楊惲の傳に、人生行樂耳、須二富貴一何時。【一三】聲名籍　漢書、陸賈の傳に、名聲藉甚。【一四】膏自炙　漢書兩龔傳に、龔勝飲食せずして死す、父老來り弔するあり、哭する甚だ哀し、既にして曰く、嗟乎薰以レ香自燒、膏以レ明自銷、龔生竟夭二天年一、非二吾徒一也と。遂に趨りて出づ、其の誰なるを知らず。【一五】方伯　禮記王制に、千里之外、設二方伯一、州有レ伯。【一六】洊水碧　爾雅に、水決之澤爲二洊水一。水經の註に渭水過二陳倉縣西一、洊水入レ焉。【一七】永日　詩に、且以喜樂、且以永レ日。【一八】詩力鄭谷の詩に、暮年詩力在。【一九】馘　詩の魯頌に、矯矯虎臣、在レ泮獻レ馘。【二〇】千里隔　謝莊の月賦に、隔二千里一兮共二明月一。

【題義】子由が寄せた原詩は、辛丑卽ち仁宗の嘉祐六年（皇紀一七二一年、西暦一〇六一年）の除日の作であるから、東坡の此詩は、翌七年正月の十日に出來たことは言ふまでもない。詩中に詩成十日到の句、之を證するに足る。註家の子由が原題に由つて、辛丑の末に作つたとするのは宜しくない。

【詩意】我は小官となつて、西邊に遣された。遠く離れるのは別に惜まないが、復、何時會ふことかと愁へるのである。從つて除夜などの所感はない。强ひて歡ぶといふのでは、酒も發しない。我が故鄉の食膳をいふと、羊の羹、熊の乾肉、舌鼓が打たれる。兒童の時の樂も、指を數へれば、早や昔となつた。往事は弦を脫した箭の如く、迚も追ひ付くことは出來ない。世事轉轉、我が得た所は、失つた所を償はない。歲の暮に、疫鬼を逐ひ拂ふといふ驅儺がある。府卒が來つて之を行ふ。其の老健なのには魔物も消えてしまふ。汝に面倒をかけるが、四方を攘つて惡鬼を逐へ。蜀の地には梅が乏しい。寒梅と凍つた杏、若い芽は麥のやうで、生長し難い。何時花を折ることが出來ようかと、條に攀ぢていたむ。春色の晩きは憂へない。夏實の棄てられるを歎く。人生は行樂のみ、聲名の揚がるを求めない。薰は香を以て自ら燒き、膏は明を以て自ら銷するからである。子の詩が著いて心を寬うした。詩を誦して其の意を知り、其の面を見る心地がする。子の兄の我は、今小官で、地方の長官を佐けて居る。官宅に近く北池を鑿つたが、汧水を入れて、水が碧りである。此の池に臨んで美酒を飲むと、日を消することが出來る。ただ詩の力が弱くて健鬬しても耳を斬られるであらう。子の寄せた詩は十日目に著いた。かくお互に千里を隔てて居つても一月に詩一篇を寄せられると、世の憂ひ、心の愁ひなど、くよくよするには足らない。

壬寅二月。有詔。令郡吏分往屬縣。減決囚禁。自十三日受命出府。至寶鷄・虢・郿・盩厔四縣。既畢事。因朝謁太平宮。而宿於南谿谿堂。遂竝南山而西至樓觀・大秦寺・延生觀・仙游潭。十九日乃歸。作詩五百言。以記凡所經歷者。寄子由

壬寅二月、詔あり、郡吏をして分ちて屬縣に往いて囚禁を減決せしむ。十三日より命を受け府を出で、寶鷄・虢・郿・盩厔四縣に至る。既に事を畢へ、因て太平宮に朝謁し、南谿谿堂に宿し、遂に南山に竝びて、西のかた樓觀・大秦寺・延生觀・仙游潭に至り、十九日乃ち歸る、詩五百言を作り、以て凡そ經歷せし所のものを記して子由に寄す

遠人羅水旱。王命釋俘囚。
分縣傳明詔。尋山得勝遊。
蕭條初出郭。曠蕩實消憂。
薄暮來孤鎭。登臨憶武侯。

遠人水旱に罹り、王命俘囚を釋す。
縣を分つて明詔を傳へ、山を尋ねて勝遊を得。
蕭條初て郭を出で、曠蕩實に憂を消す。
薄暮孤鎭に來り、登臨して武侯を憶ふ。

峥嶸依絶壁。蒼茫瞰奔流。
半夜人呼急。横空火氣浮。
天遙殊不辨。風急已難收。
曉入陳倉縣。猶餘賣酒樓。
煙煤已狼藉。吏卒尚呀咻。
鷄嶺雲霞古。龍宮殿宇幽。
南山連大散。歸路走吾州。
欲往安能遂。將還爲少留。
回趨西虢道。却渡小河洲。
聞道磻溪石。猶存渭水頭。
蒼崖雖有跡。大釣本無鈎。
東去過郿塢。孤城象漢劉。
誰言董公健。竟復伍孚讎。
白刃俄生肘。黄金謾似丘。

峥嶸絶壁に依り、蒼茫奔流を瞰る。
半夜人呼ぶこと急なり、空に横はつて火氣浮ぶ。
天遙にして殊に辨せず、風急にして已に收り難し。
曉に陳倉縣に入れば、猶ほ餘す賣酒樓。
煙煤已に狼藉、吏卒尚ほ呀咻す。
鷄嶺雲霞古り、龍宮殿宇幽なり。
南山大散に連り、歸路吾が州に走る、
往かんと欲して安んぞ能く遂げん、將に還らんとして爲に少く留めらる。
回つて西虢の道に趨り、却つて小河洲を渡る。
聞道らく磻溪の石、猶ほ渭水の頭に存すと。
蒼崖跡ありと雖も、大釣本鈎なし。
東に去つて郿塢を過ぐれば、孤城漢劉に象る。
誰か言ふ董公健かなりと、竟に伍孚の讎を復す。
白刃俄に肘に生じ、黄金謾に丘に似たり。

平生聞太白(二七)一見駐行騶。
鼓角誰能試。風霈果致不。
巖崖已奇絶。氷雪更琱鎪。
春旱憂無麥。山靈喜有湫。
蛟龍懶方睡。缾罐小容偸。
二曲林泉勝。三川氣象侔。
近山麰麥早。臨水竹篁修。
先帝膺符命。行宮畫冕旒。
侍臣簪武弁。女樂抱箜篌。
祕殿開金鎖。神人控玉虯。
黑衣横巨劒。被髮凛雙眸。
邂逅逢佳士。相將弄綵舟。
投篙披綠荇。濯足亂清溝。
晚宿南谿上。森如水國秋。

平生太白を聞き、一見して行騶を駐む。
鼓角誰か能く試みん、風霈果して致さんや不や。
巖崖已に奇絶、氷雪更に琱鎪。
春は旱して麥なきを憂へ、山靈にして湫あるを喜ぶ。
蛟龍懶くして方に睡り、缾罐小しく偸むことを容す。
二曲林泉勝れ、三川氣象侔し。
山に近くして麰麥早く、水に臨んで竹篁修し。
先帝符命に膺り、行宮冕旒を畫く。
侍臣武弁を簪し、女樂箜篌を抱く。
祕殿金鎖を開き、神人玉虯を控く。
黑衣にして巨劒を横へ、被髮して雙眸凛たり。
邂逅佳士に逢ひ、相將ゐて綵舟を弄す。
篙を投じて綠荇を披き、足を濯うて清溝を亂す。
晚に南谿の上に宿すれば、森として水國の秋の如し。

遶湖栽翠密。(三四)終夜響颼飀。
冒曉窮幽邃。操戈畏炳彪。
尹生猶有宅。老氏舊停軿。
問道遺蹤在。登山往事悠。
馭風歸汗漫。(三八)閱世似蜉蝣。(三九)
羽客知人意。瑤琴繫馬鞦。(四〇)
不辭山寺遠。來作鹿鳴呦。(四一)
帝子傳聞李。(四二)嵓堂髣髴(四三)像緱。
輕風幃幔卷。落日髻鬟愁。
入谷驚蒙密。登坡費挽摟。
亂峯攙(四五)似槊。一水澹(四六)如油。
中使何年到。金龍自古投。
千重横翠石。百丈見游(四七)儵。
最愛泉鳴洞。初嘗雪入喉。

湖を遶つて翠密を栽ゑ、終夜響颼飀。
曉を冒して幽邃を窮め、戈を操つて炳彪を畏る。
尹生猶ほ宅あり、老氏舊軿を停む。
道を問ふに遺蹤在り、山に登る往事は悠し。
風に馭して汗漫に歸し、世を閲すること蜉蝣に似たり。
羽客人の意を知つて、瑤琴馬鞦に繫ぎ、
山寺の遠きを辭せず、來つて鹿鳴の呦を作す。
帝子は李なることを傳聞す、嵓堂髣髴を髣像す。
輕風幃幔卷き、落日髻鬟愁ふ。
谷に入つて蒙密に驚き、坡に登りて挽摟を費す。
亂峯は攙くして槊に似、一水澹として油の如し。
中使何れの年か到り、金龍古へより投ず。
千重翠石横はり、百丈游儵を見る。
最も愛す泉の洞に鳴るを、初めて嘗むれば雪喉に入る。

滿餅雖可致。洗耳歎無由。　滿餅致すべしと雖も、耳を洗ふに由なきを歎ず。
忽憶尋蟆培。方冬脫鹿裘。(四八)　忽ち憶ふ蟆培を尋ねしとき、冬に方つて鹿裘を脫せしを。
山川良甚似。水石亦堪儔。　山川良に甚だ似たり、水石亦儔するに堪へたり。
惟有泉傍飲。無人自獻酬。　惟泉傍に飲むに、人無くして自ら獻酬す。

【字解】【一】壬寅　仁宗の嘉祐七年（皇紀一七二二年、西暦一〇六二年）に當る。年譜を按ずるに、嘉祐七年、東坡年二十七在二鳳翔任一。【二】樓觀　崇聖觀。【三】俘囚　とりこ、韓退之の詩に、且待獻二俘囚一。【四】明詔　前漢書に、發二德音一下二明詔一。【五】尋山　一本、循レ山に作る。【六】勝遊　溫飛卿の詩に、承平事二勝遊一。韓退之の詩に、江山多二勝遊一。【七】蕭條　ものさびしい、杜子美の詩に、此意寬蕭條。又、出レ郭少二塵事一。【八】曠蕩　ひろびろした貌、漢書に、曠蕩之恩。文選、陳孔璋の書に、敍二王師曠蕩之德一。【九】消レ憂　陶淵明の歸去來の辭に、樂二琴書一以消レ憂。【一〇】鎮　武城鎮、九域志に、武城鎮屬二寶鷄縣一。【一一】崢嶸　山の峻き貌、文選吳都賦に、南北崢嶸。上林賦に、刻削崢嶸。【一二】蒼茫　あをあをとして廣い。或說に、蒼茫兩字、古人用レ之、皆是平聲、而東坡所レ用乃是仄聲云云。然れども莊子に、適二莽蒼一者三飡而反。莽蒼竝に仄聲。東坡の蒼茫の二字は此に本く。【一三】陳倉縣　鳳翔府。三秦記にいふ、陳倉以レ山得レ名、山有二石鷄一與二山鷄一不レ別、趙高燒レ山、山鷄飛去而石鷄不レ去、晨鳴二山頭一、聞二三十里一、蓋玉鷄也云云と。唐の至德二年（皇紀一四一七年、西暦七五七年）から、名を寶雞と更む。水經の註に、陳倉縣西有二陳倉山一、山上有二寶鷄祠一。【一四】狼藉　紛亂の意、狼、草を藉きて臥し、去れば其の跡、穢れ亂る。史記滑稽傳に、杯盤狼藉。【一五】吏卒尙呀咻　東坡の自註に、十三日宿二武城鎮一、卽俗所謂石鼻寨也、云孔明所レ築、是夜二鼓、寶雞火作、相去三十里而見二於武城一。呀咻は、かまびすしく呼ばはる。【一六】鷄嶺、龍宮　東坡の自註に、縣有二雞爪峰、龍宮寺一。陳師道いふ、鷄爪峰在二寶鷄之東一と。【一七】南山連二大散一　縣の南は大散關、秦蜀往來の要道。又、終南は長安の南山。長安志に、終南山在二長安縣南七十里一。【一八】歸路走二吾州一　蜀中を指す、韓退之の赴二江陵一詩に、胡爲首二歸路一走。漢書に、文帝指二新豐一、謂二愼夫人一曰、此走二邯鄲一道也。歸路、一本に歸客に作る。

【一九】欲レ往云云　易に、不レ能レ退、不レ能レ遂。楚辭に、曾何足二以少留一。【二〇】西虢　虢叔が封ぜられた處。平王、東遷して、虢、上陽に徙る。故に西虢といふ。【二一】磻谿　太平寰宇記に、虢縣有二磻溪一、其水淸泠神異、北流十二里注二於渭一。東坡自註に、十四日自二寶鷄一行至レ虢、聞下太公磻溪石在二縣東南十八里一、猶有中投レ竿跪餌兩膝所レ著之處上。【二二】孤城象二漢劉一　東坡の自註に、十五日至二郿縣一、縣有二董卓城一、象二長安一、俗謂二之小長安一。董卓、卒を發して郿塢を築く。高さは長安城と等し。太平寰宇記に、董卓塢在二郿縣東北十五里一。【二三】董公健　後漢の袁紹傳に、卓議二廢立一、紹勃然曰、天下健者豈惟董公。【二四】復二伍孚讎一　後漢書董卓傳に、越騎校尉汝南伍孚憤二卓兇毒一、懷二佩刀一刺レ之、不レ中、左右執二殺孚一、孚大言曰、恨不レ得レ磔二裂姦賊於都市一。【二五】白刃我生肘　後漢書董卓傳に、王允與二呂布一謀レ誅レ卓、李肅以レ戟刺レ之、衷甲不レ入、卓大呼、布何在、布曰、有レ詔討二賊臣一、持レ矛刺レ卓斬レ之。生レ肘は、所謂生二變於肘腋之下一の意で、布は嘗て卓と結んで父子となつた間柄であるが、卒に卓を殺した。【二六】黃金譏似レ丘　後漢書董卓傳に、塢中珍藏有二金二三萬斤、銀八九萬斤、錦綺玩積如二邱山一。【二七】太白　太白山は、武功縣に在り。諺にいふ、武功太白、去レ天三百と、其の高きをいふ。郿縣に往く道にある。水經の註に、地理志を引いて曰く、太一山、古文以爲二終南一、杜預以爲二中南一也、亦曰、太白冬夏積雪望レ之皓然。【二八】蛟龍懶方睡云云　莊子の列禦寇篇に、千金之珠、必在二九重之淵、而驪龍頷下一、能得レ珠者、必遭二其睡一也。東坡の自註に、是日晚自レ郿起至二淸秋鎭一宿、道過二太白山一、相傳云、運行鳴二鼓角一、過二山下一、輒致二雷雨一、山上有レ湫甚靈、以二今歲旱一方議レ取レ之。【二九】膺二符命一　膺は當る義、符は瑞徵をいふ、天、祥瑞の事を示して、王者命を受けるの徵とする。【三〇】晃旒　索に玉を貫きて前後に垂れた冠、禮記の玉藻に、天子之晃藻十有二旒。【三一】祕殿開二金鎖一　文選の魯靈光殿賦に、乃立二靈光之祕殿一。杜牧之の宮祠に、銀鑰卻收二金鎖一合。【三二】玉虯　楚辭に、駟二玉虯一以乘レ翳。司馬相如の賦に、乘二鏤象六玉虯一。【三三】終夜響颼飀　孟郊の詩に、颼飀臥二江汜一。廣雅に、小風曰レ颼、涼風曰レ飀。東坡自註に、是日與二鹽官張杲之一泛二舟南溪一、遂留二宿溪堂一。【三四】畏炳彪　東坡の自註に、十八日循二終南一而西、縣尉以二甲卒一見レ送、或云、近官竹園往往有レ虎。說文に、彪、虎文也。【三五】尹生猶有レ宅　樓觀は尹喜の舊宅。【三六】停レ轡　車をとめる。轡は車のながえ。沈約の詩に、西壑已停レ轡。【三七】汗漫　淮南子、俶眞訓に、徙二倚于汗漫之宇一。註にいふ、無二生形一、形生元氣之本心也と。【三八】蜉蝣　短命の小蟲、朝に生じて暮に死す。郭璞の詩に、借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年。白樂天の詩に、長生無レ得者、擧レ世如二蜉蝣一。【四〇】

古今體詩　壬寅二月有詔減決囚禁記所經歷寄子由

羽客知二人意一云云　李太白詩に、明朝有レ意抱レ琴來。【四一】鹿鳴呦　詩の小雅、鹿鳴篇に、呦呦鹿鳴、食二野之芩一、我有二嘉賓一、鼓レ琴和樂且湛。呦呦は聲の和げるのである。【四二】帝子　唐の玉眞公主。【四三】嵓室　女仙列傳に、西王母姓緱、其所レ居有二元碧之堂一。【四四】髣像　ほのかにす、文選の海賦に、仿二像其色一。【四五】攙似レ槊　唐の王建が詩に、曉入二溫門山一、羣峰亂如レ戟。一本、攙を巉に作る。【四六】澹如レ油　白樂天の詩に、噴時千點雨、澄處一泓油。【四七】游絛　莊子秋水篇に、絛魚出游。【四八】鹿裘　齊の晏子は布衣鹿裘以て朝す、景公曰く、夫子の家、此の若く貧しきか、奚ぞ衣の惡しきやと。

【題義】宋史に據るに、嘉祐七年二月、命レ官錄二被レ水諸州繫囚一と見えて居る。此の詔が同月の九日に鳳翔に至つた。鳳翔府では詔を奉じ、郡吏を屬縣に派遣して囚禁を減決せしめる。東坡も十三日に出張し、十九日に歸つたが、紀行の詩五百言を作つて子由に寄せたのである。鳳翔府に十縣ある。卽ち天興・岐山・扶風・盩厔・郿・寶雞・虢・麟遊・普潤・好時の諸縣である。郡吏をして屬縣に分往せしめたが、東坡は寶雞・虢・郿・盩厔の四縣に往くこととなつた。太平寰宇記によると、寶雞は、府の西南九十里に在る。虢縣は、府の南四十里に在る。郿縣は、府の東南一百里に在る。盩厔は、府の東南二百里にあるといふことである。

【詩意】鳳翔の住民が水旱に罹つたから、王命があつて其の地方の俘囚を釋すこととなつた。府では手分をしてお上の仰せを傳達する。東坡も十三日に出發したが、圖らずも江山勝遊の機會を得たのである。初、城郭を出たときは、物さびしかつたが、已にしてひろびろとした氣分に心の憂も消えた。夕暮に寶雞縣の武城鎭に著いた。昔、諸葛孔明が郝昭を陳倉に圍んだとき、此城で相攻拒したことが二十餘日、孔明の軍が退いたといふことである。登臨して諸葛武侯を憶ふ。其の形勝をいふと、峻しく高く絶壁に依り、青青として廣く遠く奔流を見下す。夜中に人が急に呼ぶので驚いて起きると、空に火氣が横はつたが、天が遙にして辨せず、風が急で收まり難い。夜が明けて陳倉縣に入ると、城內の賣酒樓、此樓は唐の時代からの建物で、幾度かの兵火を免れたものである。其の樓も煙煤已に漲れる有樣で、吏卒は聲を嗄らして呼び廻はる。さて、又寶鷄の東にある鷄爪峯や龍宮殿、峯には雲霞が古く、龍宮の殿宇も幽かである。縣の南は大散關で、秦・蜀往來の要道である。そして、終南山は關中の南面に横亙して居る。歸路は蜀中に走る。往かうとしても往くことが出來ない。還らうとしても留められる。(以上は寶雞に在ることを述べた。)回りて西虢の道に趨り、却て小河洲を渡る。昔、太公望の釣した遺跡と傳へる磻溪は、渭水の頭に在る。蒼崖に遺跡はあるものの、信ぜられない。太公は直鈎を以て釣る。又、其の意は魚にない。要するに自然の大釣には、人爲の鈎はない筈である。それから東に行いて郿塢を過ぎる。(塢は塢壁で、土を築いた營居である。)董卓は郿侯に封ぜられ、北阜に據つて塢を築き、以て長安の城形を寫した。俗に之を小長安と呼ぶ。董卓が廢立を議したとき、袁紹は勃然として天下に健なるものは、豈惟に董公のみならんやと言つたが、一體、誰が董公を健なりとい ふ、伍孚に狙擊され、幸に之は免れたが、遂に養子の呂布の爲に刺された。變が肘腋の下に生じた譯である。董卓の塢中には、黃金の珍藏、積んで丘山の如くであつたといふ。郿縣に往く途中の太白山は、平生耳にして居るので、步步に騎り馬を駐めて、之を一見した。傳へいふ、太白山は、軍行鼓角を鳴らして山下を過ぎると、忽ち雷雨を致すと、果して然るかどうか、誰か鼓角を試みる。巖崖は

奇絶、冰雪は彫刻したやうである。春旱して麥なきときも、山は靈にして湫あるを喜ぶ。蛟龍は惰けて睡つて居るから、釣瓶で偸むことを容す。昔、河上に家貧にして、嵩を織るを以て業とするものあり、其の子淵に沒して千金の珠を得しかば、父は其の子に謂つて曰く、玉は驪龍の頷下に在り、子の能く珠を得しは、必ず其の睡に遭へばなりと言つたさうである。二曲卽ち盩厔山には、林泉の勝がある。(盩厔を二曲といふのは、寰宇記や長安志に、山曲を盩といひ、水曲を厔といふからである。三川は、古は伊水、洛水、河水をいひ、唐以後は、劍南東西及び山南西道を三川とする。)三川の樣子は似て居る。山に近く、地美にして、大麥小麥を早く生ずる。水に臨んで、官竹園が十數里絶えない。十七日、寒食の日、盩厔より東南に行く二十餘里、朝に太平宮二聖の御容に謁す。此の宮は、太宗皇帝の時、建てたものである。太宗が晉邸に在り、靈應を聞き、近侍を遣はして醮を太祖皇帝に致す。醮とは酒を供へて神を祭るのである。帝王の興る、必ず符命がある。(符命とは、天が祥瑞を降して人君に與へ、天命を受けた符とする義である。)先帝が天命を受けて、行宮に、天子の玉冠を畫き、侍臣は武人の冠を戴き、女樂は箜篌を彈く。祕殿が開くと、神人は玉虯を控いて出る。黑い衣を著、大きな劍を佩び、髮をば亂して、兩目凛凛として居る。思ひがけもなく佳士に出會ひ、連れ立つて五色でる がいた舟を操る。篙を投じて綠の水草を披き、足を濯うて淸溝を亂す。南谿の下に宿すると、水國の秋のやうな感じがする。湖水の周圍は、松や竹やが茂つて林をなし、一晩中、小風、涼風が吹いて已まない。朝早くから出かけ、幽邃の處を窮めると、虎の出るのを畏れて戈でも操りたいと思はる。樓觀に到る。尹喜の舊宅である。昔、尹喜は函谷關の令となつて居たが、氣を候ひ、眞人西游して此を過ぎるを知つたのである。(老子は靑牛薄板車に乘つて、關を出る。喜曰く、子將に隱れんとす、我が爲に書を著せと。老子乃ち道德經を授けたといふことである。)遺跡はあるも、登仙の往事は遠く、風に御して、元氣の大本に歸し、世を閲する蜉游に似、朝に生じて暮には死す。羽客は人間の心を知つて、玉で飾つた琴を以て馬の鞦に繫ぎ、山寺の遠きを物ともしないで來て、鹿鳴の呦をする。呦呦たる鹿鳴、野の芩を食む、我に嘉賓あり、琴を鼓き和樂して且つ湛しむといふ詩の意味を行つたのである。

睿宗の女、はじめ崇昌縣主に封せらる。俄に號を進めた所、天寶三年に上書して、妾は高宗の孫、睿宗の女、陛下の女弟、身分が賤しくない。何ぞ必しも名號を係けて貴となさん。請ふ道士となり、數百家の產を入れ、十年の命を延べんと、帝は之を許した。これが玉眞公主である。嵓堂に西王母をほのかに見るやうである。輕風は幃幔を卷いて、落日髻鬟(總髮)何となく人をして愁へしむ。(玉眞が遺跡の光景を狀して之を追傷するのである。)それから谷に入つて其の茂つてこまかなるに驚き、坡に登つて挽摟(摟も引く意)の力を費す。亂峰は槊のやうであり、一水は靜にして油のやうである。朝廷では內官を遣はし、金龍を此の潭に投じて祈禱した。(それは道家に金龍玉簡といふことがある。金龍は銅で製し玉簡は階石で製する。每歲、朝廷から天下の名山洞府に金龍玉簡を投ずるのである。)翠石は千重に橫はり百丈の下に游魚を見る。最も愛するのは、泉の洞に鳴るのである。水を嘗めると、雪が喉に入るやうである。瓶に一杯となつても耳を洗ふに由なし。(昔、堯帝が天下を巢父に讓ると、巢父

は清冷の水を過ぎ、其の耳を洗ひ、向に貪言を聞いて吾耳を汚せりと言つた故事に據つたのである。東坡の自註に、是日游二崇聖觀一、俗所謂樓觀也、乃尹喜舊宅、山脚有二授經臺一、尚在、遂與二張杲之一同至二大秦寺一、早食而別、有二太平宮道士趙宗有一、抱レ琴見レ送、至レ寺作二鹿鳴之引一乃去、又西至二延生觀一、觀後上二小山一、有二唐玉眞公主修レ道之遺跡一、下レ山而西行十數里、南入二黑水谷一、谷中有レ潭、名二仙游潭一、上有二寺三一、倚二峻峰一面二清溪一、樹林深翠、怪石不レ可二勝數一、潭木以レ繩縋レ石數百尺、不レ得二其底一、以二瓦礫一投レ之、翔揚徐下、食頃乃不レ見、其清澈如レ此、遂宿二於中興寺一、寺中有二玉女洞一、洞中有二飛泉一、甚甘、明日以二泉一瓶一歸至レ郿、又明日乃至レ府とある。其の游跡の大要が分る。）忽ち思ひ浮べるのは、蝦蟇培に游んだ際に、洞中が溫いので、寒い冬の日に鹿裘を脫いだことである。（東坡の自註に、昔與二子由一遊二蟆培一、時方冬、洞中溫溫如二二三月一とある。）其時と今と山川も似て居り、水石も亦同じである。ただ泉傍で酒を飲み、盃のやりとりする人（卽ち子由）が居らないことが異つて居る。

太白山下早行。至横渠鎭。書二崇壽院壁一

太白山下早行、横渠鎭に至り、崇壽院の壁に書す

馬上續二殘夢一。不レ知二朝日昇一。
亂山横二翠幛一。落月澹二孤燈一。
奔走煩二郵吏一。安閒愧二老僧一。

馬上殘夢を續ぎ、朝日の昇るを知らず。
亂山翠幛横はり、落月孤燈澹し。
奔走郵吏を煩はし、安閒老僧に愧づ。

再遊應二眷眷一。聊亦記二吾曾一。

再遊應に眷眷たるべし、聊か亦、吾が曾てするを記せよ。

【字解】【一】太白山　陝西武功縣に在る、前に註せり。【二】崇壽院　郿縣の東五十里、横渠鎭の内に在る。横渠鎭は、鳳翔府郿縣の東方大振谷に在る。【三】翠幛　みどり色の屏風。幛は障の意で、界隔の名である、【四】郵吏　驛吏といふに同じ、方干の詩に、泊レ岸旅幡郵吏拜。【五】眷眷　慕ひて忘れることが出來ない。【六】吾曾　吾が曾て過ぎつたことある意。

【題義】壬寅卽ち嘉祐七年、（皇紀一七二二年、西曆一〇六二年）二月十六日の早旦、東坡が郿縣から盩厔に赴く時、太白山の麓を過ぎ、崇壽院に立ち寄る。壁上に題し、宿せずして去る。唐宋詩醇の評に、次聯是早行景色、妙從二首句殘夢一二字一生出、故日月字、不レ嫌二雜見一とある。さて、唐の劉駕（字は司南）が早行の詩に、馬上續二殘夢一、馬嘶時復驚、心孤多レ所レ虞、僮僕近レ我行、棲禽未二分散一、落月照二孤城一、莫レ羨居者閒、谿邊人已耕、とある。そこで、紀昀は、東坡の此詩を評して曰く、此昌黎所謂何好何惡之詩、首句直寫二劉方平之詩一、當レ由二偶合一、東坡非二盜レ句者一也と。

【詩意】公事で、日程も定まつて居るから余は早行する。馬上、前夜の殘夢をつづけ、朝日の昇るをも知らないで、うつらうつらとした。途の亂山は夜前、宿處にあつた翠幛と見なし、又、前の方に見える山の落月を昨晩の孤燈と見なす。（亂山の句は、殘夢より生じ出す。）余は官人であるから、横渠鎭の驛吏だちは、迎へ送りなど奔走される。まことに煩はして氣の毒に思ふ。之に反し崇壽院の老僧は安閑として居られるので、之に對すると愧かしく感ずる。我は名利の爲に奔走するを免かれない。それを愧かしく感ずるのである。今日此寺へ參つたが、他日、眷眷の情に堪へないで、再遊をなすこと

であらう。寺僧だちに記憶して置かれるやうに、お頼みする。

留題延生觀後山上小堂　延生觀後の山上小堂に留題す

溪山愈好意無厭。上到巉巉第幾尖。
深谷野禽毛羽怪。上方仙子鬢眉纖。
不慚弄玉騎丹鳳。應逐嫦娥駕老蟾。
溷草巖花自無主。晚來胡蝶入疎簾。

溪山愈好くして意厭くことなし、上つて巉巉たる第幾尖に到る。
深谷の野禽毛羽怪に、上方の仙子鬢眉纖なり。
弄王丹鳳に騎るに慚ぢず、應に逐ふなるべし嫦娥の老蟾に駕す。
溷草巖花自ら主なし、晚來胡蝶疎簾に入る。

【字解】【一】上方仙子　唐の玉眞公主。上方は山寺をいふ。杜子美の詩に、上方重閣晚、百里見纖毫。【二】弄玉騎丹鳳　列仙傳に、蕭史善吹簫、秦穆公以女弄玉妻之、遂教弄玉吹簫作鳳鳴、一旦弄玉乘鳳、蕭史乘龍昇天而去。【三】嫦娥　淮南子に、羿、不死の藥を西王母に請ふ。姮娥之を竊んで月に奔る。姮娥は羿の妻。【四】駕老蟾　韓退之の毛穎傳の戲言に、兎竊嫦娥騎蟾蜍。【五】溷草巖花　唐の崇徽公主の詩に、行路至今空歎息、巖花溷草自春秋。

【題義】前の東坡の自註に據るに、西至延生觀、觀の後の小山に、唐の玉眞公主修道の遺跡があると言つたが、ここの小堂が其れである。（卽ち玉眞の堂）唐睿宗の景雲元年（皇紀一三七〇年、西曆七一〇年）睿宗の第八女西城公主、第九女昌隆公主、竝に出家した。同二年に、西城は金仙に、昌隆は玉眞に改封された。

【詩意】溪山は漸く佳境に入つて、何時まで見ても厭きが來ない。嶮しい第幾峰といふに上つた。深谷の野禽も珍しく、山寺の仙子は美しく鬢眉が纖かである。かの弄玉といふ美人の丹鳳に騎つた姿にも劣らない。これでは嫦娥の老蟾に駕ると同じやうに月中に入つて月精となるであらう。谷間の草や巖上の花は、折節の移り變りを示して居り、胡蝶の疎簾に入るのが目に入つた。

留題仙遊潭。中興寺東有玉女洞。洞南有馬融讀書石室。過潭而南。山石益奇。潭上有橋。畏其嶮不敢渡

仙遊潭に留題す、中興寺の東に玉女洞あり、洞の南に馬融が讀書石室あり、潭を過ぎて南すれば山石益奇、潭上に橋あれども、其の嶮なるを畏れて敢て渡らず

清潭百尺皎無泥。山木陰陰谷鳥啼。
蜀客曾遊明月峽。秦人今在武陵溪。

清潭百尺皎として泥なし、山木陰陰として谷鳥啼く。
蜀客曾て遊ぶ明月峽、秦人は今武陵溪に在り。

【字解】【一】玉女洞　太平寰宇記に、寶雞縣有玉女洞、秦の穆公の女弄玉が鳳臺の地。【二】讀書石室　終南圖經に、讀書臺在縣城西一百步。元和郡縣志に、馬融讀書臺在

獨攀書室窺巖竇。
還訪仙姝款石閨。
猶有愛山心未至。
不將雙脚蹈飛梯。

獨書室を攀ぢて巖竇を窺ひ、
還仙姝を訪うて石閨を款く。
猶ほ山を愛する心の未だ至らざるあり
雙脚を將て飛梯を蹈まず。

【題義】玉女潭は、麟游縣（陝西關中道に屬す）の南二十里、魚塘峽内に在る。其水は永安宮前から流れて此の潭に入る。半山より飛下して、聲、巖谷に振ふといふ。山は愛するが危きを蹈まない。

【詩意】仙遊潭は深くて泥がない。山木が茂つて谷間の鳥も啼いて居る。蜀の旅人（東坡自らいふ）は曾て明月峽に遊んだ。（東坡が弟子由と舟行、京師に赴いた時に經由した所）武陵桃源の話ではないが、秦時代のやうな昔の人が今に存して居る。（武陵桃源といふのは、晉の陶淵明が假設の記事で、晉の太元中、武陵の漁人が溪に緣つて行いて見た別天地である。）中興寺の東に玉女洞があり、洞の南に馬融が京兆の摯恂といふ隱遁した學者に從つて讀書したといふ石室がある。其の石室を攀ぢて巖穴を窺ひ、又、仙女を訪うて玉女洞門を叩いた。險阻を畏れて自分の兩脚を飛梯の處まで運ばなんだのは、山を愛する心が足りないのであらう。

に武陵縣、桃花縣がある。桃花山は桃花縣の西南三十里に在り。山中に桃花洞といふのがある。陶淵明が桃源記を作つた處といふ。【六】仙姝　仙女と同じ、玉女を指す、吳の人は、美女を姝といふ。詩に靜女其姝。【七】石閨　玉女洞門。盩厔縣東北二十七里。【三】山木陰陰　杜詩に、山木陰陰落日曛、竹竿裊裊細泉分。【四】明月峽　古の巴郡枳縣に在る。峽首南峰の石壁に圓い孔が滿月のやうであるより明月峽といふ。【五】武陵溪　湖南常德府

石鼻城

平時戰國今無在。
陌上征夫自不閒。
北客初來試新險。
蜀人從此送殘山。
獨穿暗月朦朧裏。
愁渡奔河蒼茫間。
漸入西南風景變。
道邊修竹水潺潺。

平時戰國今あるなし、
陌上の征夫自ら閒ならず。
北客初めて來つて新險を試み、
蜀人此より殘山を送る。
獨穿つ暗月朦朧の裏、
愁へて渡る奔河蒼茫の間。
漸く西南に入れば風景變じ、
道邊は修竹水は潺潺。

【題義】魏の明帝が太原の郝昭をして陳倉城を營ましむ。諸葛孔明が之を圍んだが下らなかつた。潺水の亮城に對する所が亮と昭と相禦いだ處である。亮の城といふのが石鼻城。此詩は之を畫き出す。

【詩意】今の平時に、蜀と魏とが對壘したやうな戰國はない。それで路上の行人が來往に忙はしい。北から來つて蜀に入るものは、此に至つて、漸く山に入る。故に新險を試むといふ。（新險の字、甚だ新。蜀から來つて京・洛に趨くものは、此に至つて已に山を出る。故に殘山を送るといふ。おぼろ月

【字解】【一】石鼻城　汧水の北に在る。南のかた、陳倉を去る三十里。東坡の前註にある武城鎭は石鼻寨である。【二】戰國　蜀と魏とを指す。【三】征夫　旅人。陶淵明の歸去來の辭に、問二征夫一以二前路一。【四】朦朧　月が將に入らんとするを朦とし、日が將に出でんとするを朧とする。

夜に路を辿つて獨行き、蒼茫の間に奔流を渡るのも、うれはしげの心地する。（此地に於て渭河を見る）此地より寶雞に往くは、漸く西南に入る譯になり、風景も變はつて珍らしく、道のべには長い竹が生えて居り、水は潺潺として徐に流れて行く。

磻溪石

墨突不暇黔。孔席未嘗煖。
安知渭上叟。跪石留雙骭。
一朝嬰世故。辛苦平多難。
亦欲就安眠。旅人譏客懶。

磻溪石

墨突黔むるに暇あらず、孔席未だ嘗て煖らず。
安んぞ知らん渭上の叟、石に跪いて雙骭を留むるを。
一朝世故に嬰り、辛苦多難を平ぐ。
亦安眠に就かんと欲す、旅人客懶を譏る。

【字解】【一】磻溪　虢縣を距る十八里。【二】墨突不暇黔云云　墨氏の煙突は、黑くなる暇がない。孔子の席も、煖まらない。淮南子の修務訓に、孔子無黔突、墨子無煖席。班固の答賓戲に、孔席不煖、墨突不黔。【三】渭上叟　渭水の上に釣した太公望。【四】雙骭　爾雅の註に、骭、脚脛。

【題義】太公望が釣した磻溪を借りて仕宦の勞を寫し、而も渾然として跡のないやうにしたのが此詩である。史記、齊の世家に、武王已平商、而王天下、封師尚父於齊營丘、東就國、道宿行遲、逆旅之人曰、吾聞、時難得而易失、客寢甚安、殆非就國者也、太公聞之、夜衣而行、黎明至國と見えて居る。

【詩意】墨子の煙突は、轉居することが多いために、黑くならない。孔子の席は、奔走に暇がないために、煖くならない。太公望が石に跪いて動かないことを知らないのである。この太公望は、一朝世事に關係して、文王に從ひ、又、武王を輔けて紂王を伐つ。紂王を滅ぼした後、安眠を貪らうとしたが、旅人に譏られて再び起つたのである。

郿塢

衣中甲厚行何懼。
塢裏金多退足憑。
畢竟英雄誰得似。
臍脂自照不須燈。

郿塢

衣中の甲厚行く何ぞ懼れん。
塢裏金多くして退くも憑むに足る。
畢竟英雄誰か似るを得る。
臍脂自ら照して燈を須ゐず。

【題義】郿の塢より董卓の事に及び、一種の史論をなしたのである。

【詩意】董卓は塢を郿に築き、穀を積んで三十年の儲をなし、自ら言ふのに、事が成れば、天下に雄據し、事が成らなくても、此處を守れば、以て老を畢るに足ると。要するに之に似る英雄は至つて少ない。董卓の尸を市に暴した所、丁度熱い時分で、脂が澤山に地に流れ出した。守尸の吏が火を燒やして卓の臍中に置い所、幾日も光明が赫いたといふことである。

【字解】【一】郿塢　後漢書に、董卓築塢於郿、號萬歲塢。塢はとりでといふ。【二】臍脂自照　卓の屍を市に暴らす。卓は肥え太つて居る。大炷を爲り、之を臍中に置いて燃やした所、光明が曙に達す、かかること數日であつた。

樓觀(一)

門前古碣臥斜陽。
閱世如流事可傷。
長有幽人悲晉惠。
強修遺廟學秦皇。
丹砂久窖井水赤。
白朮誰燒廚竈香。
聞道神仙亦相過。
只疑田叟是庚桑。(四)

庚桑　莊子の庚桑楚に、老聃之役、有庚桑楚者、偏得老聃之道、以北居畏壘之山。役は弟子、師の爲に役を執るよりいふ。

【題義】樓觀は、もと周の康王の大夫尹喜が宅で、相承けて秦・漢に至り、皆、道士が之に居る。秦の始皇は、神仙を好まれ、尹先生の樓南に老君廟を立てた。

【詩意】樓觀の門前に在る古い石碑は、周の康王の大夫關令尹喜が立てた所、尹喜は老君に遇ひ、道を得た人である。門前の古い碑は、夕日に臥して居る。昔の言葉に、川は水を閲て以て川を成し、水は滔滔として日に度る、世は人を閲て世を爲し、人は冉冉として行き暮るとあるが、長へに幽人は晉

門前の古碣斜陽に臥す、
世を閲する流るるが如く事傷むべし。
長へに幽人あつて晉惠を悲しみ、
強ひて遺廟を修めて秦皇を學ぶ。
丹砂久窖井水赤しき、
白朮誰か燒いて廚竈香ばきし。
聞道らく神仙亦相過ぐと、
只疑ふ田叟是れ庚桑。

【字解】【一】樓觀　崇勝觀をいふ、東坡の自註に、秦始皇立老子廟於觀南、晉惠始修此廟。元和郡縣志に、樓觀在盩厔縣東三十七里。【二】古碣　古い竪石、均しくたて石であるが、其の形の角なるを碑といひ、圓なるを碣といふ。【三】丹砂久窖云云　抱朴子に臨沅縣有廖氏、家世世壽考、後徙去、子孫轉夭折、他人居其故宅、復如舊、後果世壽考、疑其井水殊赤、乃試掘井左右、得古人埋丹砂數十斛、丹汁因泉漸入井、是以飲其水而得壽。【四】

の惠帝を悲しむ。帝は性昏愚で、强ひて樓觀の遺廟を修め、秦の始皇が不老不死の神仙を學んだ。晩年麵を食ひ、毒に中りて崩じた。仙術によると、丹砂は化して黃金とすることが出來る。黃金が久しく窖にあつて其の丹汁が泉に因つて漸く井戸に入り、水が赤くなる。之を飲むと壽を得る。白朮といふ藥草は能く惡氣を除いて災沴を弭めるが、今は誰が之を燒いて廚の竈を香しからしめる。要するに神仙の術も亦過去となつた。只疑ふのは、此土の田翁は、或は是れ莊子に見える庚桑其人ではなからうか。

題寶鷄縣斯飛閣(一)

西南歸路遠蕭條。
倚(二)檻魂飛不可招。
野闊牛羊同雁鶩。
天長草樹接雲霄。
昏昏水氣浮山麓。
汎汎春風弄麥苗。
誰使愛官輕去國。
此身無計老漁樵。(四)

寶鷄縣の斯飛閣に題す

西南の歸路遠くして蕭條、
檻に倚る魂は飛んで招くべからず。
野闊うして牛羊は雁鶩に同じく、
天長うして草樹雲霄に接す。
昏昏として水氣山麓に浮び、
汎汎として春風麥苗を弄す。
誰か官を愛して輕しく國を去り、「む。
此身を漁樵に老ゆるを計るなからし」

【字解】【一】斯飛閣　詩經の如翬斯飛より取る。翬は雉の屬。寶鷄縣志に、斯飛閣在縣治西南。【二】蕭條　極めてさびしい、淮南子の註に、蕭條は深靜なりと見ゆ。【三】倚檻　陸龜蒙の詩に、久雨倚檻冷。【四】漁樵　何遜の詩に、予念返漁樵。

【題義】此詩は、寶鷄の斯飛閣を過ぎ、宋選といふ人の鳳翔の任を罷めて去るを懷ひ、人が官を愛して輕しく國を去り、其の身を漁樵の安きに返らしめることが出來ないのを感じて作つたものである。

【詩意】西南の歸路は、遠くして寂しい。宋玉の言葉に、魂よ來り歸れ（魂兮來歸）などあるが、魂は飛んで招くことが出來ない。見渡せば、野原は廣廣として、青天に連り、地に居る牛羊は、空に翔ける雁や、鶩と同じ處に居るやうである。又、天は長くして、地上の草樹は、雲霄に接するやうである。水氣が山の麓に浮んで昏昏である。春風が麥苗を弄して汎汎（廣く流れる）である。仕宦を愛して漁樵の安きに返ることの出來ないのは、情ないのである。

壬寅重九不預會。獨遊普門寺僧閣。有懷子由

壬寅重九、會に預らず、獨普門寺の僧閣に遊び、子由を懷ふあり

花開酒美盍不歸。　花開き酒は美なり盍ぞ歸らざる、
來看南山冷翠微。　來り看る南山翠微冷なるを。
憶弟淚如雲不散。　弟を憶ふ淚は雲の散せざるが如く、
望鄉心與雁南飛。　鄉を望む心は雁と南に飛ぶ。
明年縱健人應老。　明年縱健かなるも人應に老ゆべし、
昨日追歡意正違。　昨日追歡意正に違ふ。
不問秋風强吹帽。　秋風强ひて帽を吹くを問はず、
秦人不笑楚人譏。　秦人は笑はず楚人は譏る。

【字解】【一】壬寅重九　仁宗の嘉祐七年九月九日。鞏下歲時記に、都城重九、後一日宴賞、號小重陽。重陽は重九に同じ。【二】普門寺　鳳翔府志に、普門寺在東門外、唐建、金大定六年重修。【三】翠微　山の八合目位の處、爾雅に未及上曰翠微。【四】憶弟　杜子美の詩に、憶弟看雲白日眠。【五】明年縱健　云云　杜子美の詩に、明年此會知誰健。【六】追歡　樂しみを尋ねる、尋歡といふに同じ。韓退之の詩に、追歡罄縹缾。【七】吹帽　杜子美の詩に、羞將短髮還吹帽。晉書に、孟嘉爲桓溫參軍、九日、溫宴龍山僚佐畢集、有風至吹嘉帽墮落、嘉不之覺、溫使左右勿言、欲觀其擧止。

【題義】仁宗の嘉祐七年、東坡は大理事評事、簽書鳳翔の節度判官であつたが、九月九日の節句に府會に與らなかつたので、獨遊んで此に至つた。舍弟を懷うて已まないから此詩を寄せたのである。

【詩意】花も笑ひ、酒も美い。いざ歸らうと、出でて南山の八合目邊の涼しいのを看る。弟を憶ふ淚は曇りがちであるし、鄉里を思ふ心は、雁の南に飛ぶやうで、早く歸りたくて堪らない。明年たとひ此身は健であつたとしても、此の人は老ゆるであらう。實は、昨日は樂を尋ねたが樂を得なかつた。併し、昔、桓溫が僚佐を招宴した時、孟嘉は風の爲に帽を吹き落された。其を少しも心付かなかつた。其の擧止に性格が見はれる、秦人は笑はない、秋風が帽を吹き落すなどは問題でないから、どうでもよい。楚人は譏るのである。

客位假寐

謁入不得去。兀坐如枯株。

謁入りて去るを得ず、兀坐枯株の如し。

豈惟主忘客。今我亦忘吾。
同僚不解事。慍色見髯鬚。
雖無性命憂。且復忍須臾。

【字解】【一】客位假寐　客位は客次に同じ、來客に應接する所、五代史に、進奏官至客次通名。假寐はうたたね、詩、小雅の小弁に心之憂、不遑假寐。【二】兀坐　肩をそびやかして坐する。【三】忘吾　莊子の齊物論に、今者吾喪我。同じく田子方に、雖忘乎故吾。【四】同僚不解事　杜子美の詩に、小兒强解事。時に王彭監府諸軍、於公弼未嘗降色辭。【五】雖無性命憂　云云　晉書の郗超傳に、遷中書侍郎、謝安與王文度共詣超、日旰未得前、文度便欲去、安曰、不能爲性命忍俄頃邪。

【題義】此詩は東坡の自註に據ると、鳳翔府の守陳公弼に謁するに因つて作つたのである。陳公弼は鄉里の長老を以て自ら居り、東坡は少年氣剛に少しも下らない。東坡と陳公弼とは相叶はなかつたので、謁入の時も見ゆることが出來なかつた。此詩を作つた所以である。此詩は解嘲の意、同僚に慍色のものがあつたから、戲をなしたまでである。

【詩意】東坡は陳公弼に謁したが、應接間に待たされて、肩を聳かし、枯木のやうに坐して居つた。主人が客を忘れたばかりではなく、我も亦吾自身を忘れたのである。同僚の王彭は事を解しないで、陳公弼の態度を憤慨し、顏色を變へた。そこで我は性命の憂がなくても、まあ暫く忍びたまへと注意した。これは昔、謝安が王文度と共に郗超の許に詣つたとき、日が旰けても前むことが出來なかつたので、文度は去らうとすると、謝安は性命の爲に俄頃を忍ぶこと能はざらんやと言つた故事に據つたものである。

九月二十日微雪懷子由弟　二首

岐陽九月天微雪。
已作蕭條歲暮心。
短日送寒砧杵急。
冷官無事屋廬深。
愁腸別後能消酒。
白髮秋來已上簪。
近買貂裘堪出塞。
忽思乘傳問西琛。

岐陽九月天微雪し、
已に蕭條たる歲暮の心を作す。
短日寒を送りて砧杵急なり、
冷官事無くして屋廬深し。
愁腸別後能く酒に消し、
白髮秋來已に簪に上る。
近ろ貂裘を買へば出塞するに堪へたり
忽ち思ふ傳に乘じ西琛を問はんことを。

九月二十日微雪子由弟を懷ふ　二首

【字解】【一】岐陽　鳳翔府である。元和郡縣志に、岐陽縣、漢杜陽地。岐山の南にあるから岐陽といふ。【二】短日　韓退之の詩に、陰風攪短日。【三】砧杵　きぬたのきね、儲光羲の詩に、秋山響砧杵。【四】冷官　杜子美の詩に、廣文先生官獨冷とあるが、詩に冷官を用ゐるのは、必しも廣文には定まつて居ない。【五】白髮、上簪　杜子美の詩に、白髮不勝簪。【六】貂裘　貂の皮で作つた裘。輕くて暖かい。蘇季子の裘であることは、史記に見ゆ。【七】琛　寶である。詩の魯頌に、憬彼淮夷、來獻其琛。憬は遠行の貌。

【題義】陳公弼が東坡に命じて府學教授を兼ねしめたから、詩中に、冷官無事云云と言つて居ると論ずるものがある。これは、治平甲辰八月、東坡が和園中草木詩の自註に、夜宿府學の語あるより

附會したものである。欒城集の和詩に、離思隔レ年の句があるのに據ると、確に壬寅の作である。紀昀は、居二下僚一而不レ得レ志、憤激而爲下立二功邊外一之思上、鬱抑時實有二此想一、驟看若レ不二相屬一也、と說いて居る。

【詩意】頃は九月の二十日、岐陽に微雪が降つたので、何とはなしに物寂びしい歲の暮氣分となつた。日が短く、子夜に打つ砧の音も寒を送つて急である。官も薄く事もなくて、茅屋に引込んで居る。相別れて居るといふ愁も酒の力で少しく消して居るが、白髮は已に長く簪に上つた、近頃、輕くて暖な貂裘を買つたから、北方の塞を出ることが出來る。すると忽ち驛傳に乘つて西の寶を問ひたいと思ふのである。

江上同レ舟詩滿レ篋。
鄭西分レ馬涕垂レ膺。
未レ成レ報レ國慚書劍。
豈不レ懷レ歸畏友朋。
官舍度レ秋驚二歲晚一。
寺樓見レ雪與誰登。

江上舟を同うして詩篋に滿つ、
鄭西に馬を分ちて涕膺に垂る。
未だ國に報ゆるを成さず書劍を慚づ、
豈歸るを懷はざらんや友朋を畏る。
官舍を度りて歲晚に驚く、
寺樓雪を見る誰と與にか登らん。

【字解】【一】鄭西　鄭州の西門。鄭州は今は鄭縣、河南省開封道に屬す。【二】慚二書劍一　昔、鄭生は書を攻め劍を學びしも、兩つながら成らなかつた。【三】豈不レ懷レ歸云云　詩に、豈不レ懷レ歸、畏二此簡書一。左傳莊公二十二年に、詩云、豈不レ懷レ歸畏二此友朋一。【四】讀レ易　東坡と子由と、易に於ける、家學である。子由いふ、先君晩歲讀レ易玩二其爻象一、以觀二其辭一、皆逆レ刃而解。又いふ、遙に知る易を東窗の下に讀み、車馬門を敲くも定ず膺へざるを。

遙知讀二易東窗下一。
車馬敲レ門定不レ膺。

作二易傳一未レ完、命二二子一述二其志一。【五】膺　說文に、以レ言對也。類篇に答言也。

【詩意】昔、子由と舟を泛べて京師に趨いたが、遊草が篋に一杯となつた。南行集といふのが、其時の詩を集めたものである。鄭州の西門外で分れ、離別の涕は膺に垂れた。國に報ゆること出來なく、書も劍も成就しなかつた。自分は鄉里に歸りたいは山山であるが、朋友の手前を畏れる。官舍も秋を經て、やがて歲晚となつた。寺の二階から雪景色を眺める。一體誰と共にか登らう。遙に知る易を東窗の下で讀んで、心を專にし、車馬が門を叩いても膺へないであらうことを。

病中聞二子由得レ告不レ赴二商州一　三首

病中に子由が告を得て商州に赴かざるを聞く　三首

病中聞汝免レ來商。
旅雁何時更著レ行。
遠別不レ知二官爵好一。
思レ歸苦覺歲年長。

病中聞く汝が商に來るを免るると、
旅雁何れの時か更に行を著けん。
遠く別れて官爵の好きを知らず、
歸るを思うて苦に覺ゆ歲年の長きを。

【字解】【一】商州　今の商縣、陝西關中道に屬す。輿地廣記に、商州、商契始封二於此一。張儀が楚に賂うたといふ商於の地六百里は此地である。【二】更著レ行　子由若し商州

著書多暇眞良計。　著書暇多きは眞に良計、
從官無功漫去鄉。　從官功なく漫に鄉を去る。
惟有王城最堪隱。　惟王城の最も隱るるに堪へたるあり、
萬人如海一身藏。　萬人海の如く一身藏る。

【題義】子由は商州の推官に除せられたが、知制誥王介甫が其の辭令を下さなかつた。東坡は是より先に鳳翔に赴いて居る。已にして子由は告（賜暇）を得、親を養ふ三年を乞うて許されたから、商州に赴かないで、遙に詩を東坡に寄せ、東坡は病中に之を聞いて此の三首を作つたのである。

【詩意】商州は山南西道に屬しては居るが、鳳翔の東南に在る。子由が若し商州に赴くなら、鳳翔にも至るべきであるのに、今は其事が叶はない。是れ旅雁の翔けることを得ないと同じである。遠く別れては、官爵の好きを知らず。歸るを思うては、一日が千秋である。書を著すものの暇の多いのは、眞に良計であるが、官遊功なくして漫に鄉を去るは殘念である。ただ弟子由が商州に赴かないで、尙ほ京師に居るから、隱れることが出來る。併し、萬人は海の如く、容るる所があるから、一身は藏れるのである。

近從章子聞渠說。　近ろ章子に從つて渠の說を聞く、
苦道商人望汝來。　苦に道ふ商人は汝の來るを望むと。

【字解】【一】章子、章子惇を指す、宋史に、章惇、字子厚、浦城人。東坡が鳳翔節度判官に任じたとき、

に赴かば、以て鳳翔に至るべし。今然らず、これ羈旅之雁不レ著レ行となす。【三】王城最堪レ隱　子由尙ほ京師に在るをいふ。王城は京師を指す。

說客有レ靈慚直道。　說客靈あらば直道に慚ぢん、
逋翁久歿厭凡才。　逋翁久しく歿して凡才を厭ふ。
夷音僅可レ通名姓。　夷音は僅に名姓を通ずべし、
瘦俗無由辨頸顒。　瘦俗は頸顒を辨ずるに由なし。
答案不堪宜落此。　答案堪へざれば宜しく此に落つべし、
上書求免亦何哉。　上書して免るるを求むる亦何ぞや。

張儀詐、謀身綺季長。【四】夷音　商山の人は、語如夷人。無レ由レ辨二肩頸一。【六】答案云云　欒城集の策略に、今疲民呰嗟、不レ安二其生一、而宮中無益之用、不レ爲二限極一云云、陛下外有二北狄西戎一而又內自爲二一阱一、以耗二其所一遺餘一。恐以レ此獲レ謗而民心不レ歸也。

【詩意】近頃、章子と面會して其の話を聞くに、商州の人民は汝の赴任を切望して居るさうである。昔、張儀は楚を欺いたが、其の行爲の卑劣であることは言ふまでもない。もし靈あらば直道を行ふ子由に對して慚づべきであらう。商山の四皓歿して久しく、凡才は厭ふべきである。商山の人は言葉が夷人の如くであるから、僅に名姓を通ずべし。商の人には頸瘤が多いので、頸と顒とが分らない。子由が對策納れられなければ宜しく之と運命を共にすべく、上書して免るるを求めるなどはよろしくない。（子由は年二十三で、直言に擧げらる。仁宗は之を親策した。答案が時政の得失を極言したので、章子厚は商の令となる。二人相得て甚だ歡ぶ。【二】說客　張儀を指す、戰國策に、張儀說レ楚絕レ齊、願獻二商於之地六百里一、楚果絕レ齊求レ地、儀曰、止聞二六里一未レ聞二六百里一。【三】逋翁　商山の四皓（東園公、綺里季、夏黃公、角里先生）秦を避けて商山に隱る。白樂天の詩に、漢容二黃綺一爲二逋客一。李商隱が商於の詩に、割レ地

考官中には、色色議論もあつたが、仁宗は以二直言一召レ人而以レ直棄レ之、天下謂二我何一と言はれたから、宰相は已むを得ず、商州の推官に除した。）

辭レ官不レ出意誰知。　官を辭して出でず意誰か知らん、
敢向清時怨位卑。　敢て清時に向つて位の卑きを怨む。
萬事悠悠付杯酒。　萬事悠悠杯酒に付し、
流年冉冉入霜髭。　流年冉冉霜髭に入る。
策曾忤世人嫌汝。　策曾て世に忤ひ人汝を嫌ふ、
易可忘憂家有師。　易は憂を忘るべく家に師あり。
此外知心更誰是。　此外に心を知る更に誰か是なる、
夢魂相覓苦參差。　夢魂相覓めて苦だ參差。

【詩意】官を辭して出でない本意を誰が知らうぞ、治まれる世に位の卑きを怨むのは陋である。萬事は悠悠杯酒に付して心に置かない。歳月は冉冉として進み行き髭も白くなる。對策して極言し、世に忤うたので、人は汝を嫌ふ。併し、易經を讀むと煩悶を忘れるが、幸に易は家學で、父蘇老泉には易傳といふ立派な著書がある。此外に心を知るは誰である。（我より外にはない。）夢魂は相覓めて迷うて路が分らない。

【字解】【一】清時　治まれる世、李陵が蘇武に答ふる書に、策二名清時一。【二】流年　王筠の詩に、握レ髓駐二流年一。【三】家有レ師　老蘇に易傳の著がある。【四】知レ心　韓退之の賦に、惟知レ心而難レ得。禪月師貫休の詩に、此心能有二幾人知一。【五】夢魂云云　韓非子に、六國時、張敏與二高惠一、二人爲レ友、每相思不レ能レ得レ見、敏便於二夢中一往尋、但行至二半道一卽迷不レ知レ路、遂同。劉禹錫の詩に、夢尋二歸路一多二參差一。

病中大雪數日。未嘗起觀。號令趙薦。以詩相屬。

戲用其韻答之。

病中、大に雪ふる數日、未だ嘗て起つて觀ず、號の令趙薦、詩を以て相屬す、戲れに其の韻を用ひて之に答ふ

經旬臥齋閣。終日親劑和。
不知雪已深。但覺寒無奈。
飄蕭窗紙鳴。堆壓簷板墮。
風飈助凝冽。幃幔困掀簸。
惟思近醇醲。未敢窺璨瑳。
何時反炎赫。却欲躬臼磨。
誰云坐無氈。尚有裘充貨。
西鄰歌吹發。促席寒威挫。

旬を經て齋閣に臥し、終日劑和に親しむ。
知らず雪の已に深きを、但覺ゆ寒の奈んともするなきを。
飄蕭として窗紙鳴り、堆壓して簷板墮つ。
風飈凝冽を助け、幃幔掀簸に困しむ。
惟思ふ醇醲に近く、未だ敢て璨瑳を窺はざるを。
何れの時か炎赫を反し、却つて臼磨を躬らせんと欲す。
誰か云ふ坐に氈なしと、尚ほ裘の貨に充つるあり。
西鄰歌吹發り、席を促して寒威挫く。

崩騰踏成逕。(一四)繚繞飛入座。
人歡瓦(一五)先融。飲雋餅屢(一六)臥。
嗟予獨愁寂(一七)。空室自困(一八)坷。
欲爲後日賞。恐被(一九)遊塵涴。
寒更報新霽。皎月懸半(二〇)破。
有客獨苦吟。清夜默自課。
詩人例窮蹇。秀句出寒餓。
何當暴霜雪。庶以躡(二一)郊賀。

【字解】【一】虢令　元和郡縣志に、虢縣在鳳翔府北三十里、古虢國、周文王弟虢叔所封。【二】趙薦　字は賓興、臨邛の人。【三】經旬　韓愈の詩に、玆遊苦不多、再到逢經旬。【四】劑和　まぜ合せた製藥、漢書藝文志に、醫經者、調百藥齊和之所宜。【五】飄蕭　杜詩に、飄蕭覺素髮。【六】簷板　東坡の自註に、關中皆以板爲簷。【七】風飈　あらきつむじ風、爾雅に、暴風從下上、曰飈風。【八】醇醲　厚酒、魏都賦に、著馴風之醇醲。註にいふ、以酒之醲喻政厚。【九】璨瑳　玉を以て雪の明に比する。【一〇】反炎赫　韓退之の詩に、卻願天日恒炎曦。東坡の詩に、皇天何時反炎燠。【一一】躬臼磨　後漢書馮衍妻、常自操井臼、勞則體中生熱。【一二】坐無氈　杜子美が鄭虔に贈る詩に、才名三十年、坐客寒無氈。【一三】裘充貨　西京雜記に、司馬相如、初與卓文君還成都居貧、愁懣、以所著鶡鷸裘、就市人楊昌貰酒、與文君爲歡。【一四】繚繞　まつはりめぐる、潘岳の射雉の賦に、周環廻復、繚繞盤辟。【一五】瓦先融　韓退之の詩に、坐暖銷那怪。章孝標の雪の詩に、朱門到曉難盈尺、盡是三軍喜氣銷。

崩騰踏みて逕を成す、繚繞飛んで座に入る。
人歡びて瓦先づ融け、飲雋餅屢臥す。
嗟予獨愁寂、空室自ら困坷。
後日の賞を爲さんと欲するも、恐くは遊塵に涴されん。
寒更に新霽を報じ、皎月懸りて半ば破る。
客ありて獨苦吟、清夜默して自ら課す。
詩人は窮蹇を例とす、秀句は寒餓に出づ。
何か當に霜雪を暴かすべき、庶くは以て郊賀を躡まん。

【題義】十一月に大に雪降る數日、東坡は病を抱いて未だ起きない。虢の令趙薦は詩を寄せたので、和詩を作つたのである。和韻の詩、彈丸の手を脫するが如く峻拔であるのは、東坡の長所である。

【詩意】十日も病室に臥して藥餌に親しんで居り、雪の降り積つたのも知らなかつた。但寒氣の嚴しくて、どうすることも出來ないことを覺ゆ。風は飄蕭として紙窓に鳴り、雪は堆壓して簷の板も墜ちた。風雪交り到りて凝冽を助け、幃幔も卷き揚げられる。ただ厚酒の如き善い政に近づいて、璨瑳たる氷雪を窺はないやうにと思ふ。何れの時か炎赫を反し、馮衍の妻のやうに臼磨を躬らして、體を暖めたいものである。誰か坐客寒うして氈なしといふ、尙ほ錢に代ふべき裘を有つて居る。已にして西鄰に音樂が起つたので、席を促して寒威も挫ける。舞ひ蹈みて逕が出來、まつはりめぐつて座に入る。人の歡喜で瓦の雪が先づ融ける。酒も飲み盡して空餅が橫はる。皆人は樂んで居るのに、ああ予は獨り寂しく愁へて、空室に困しみ難んで居る。後日の遊賞をなさうと思ふが、塵泥に涴されることを恐れる。寒さが加はつて更に新霽を報じ、皎月半ば破れて中天に懸る。客が獨り苦吟し、清夜にも默して自ら作つて居る。詩人は不遇を常とする、從つて秀逸の句は寒餓の中から出るやうである。何か霜雪を乾かすであらう。すると、孟郊や李賀の後を躡むことが出來ようと思ふ。

歐陽永叔の詩に、喜氣銷殘雪。【一六】餅屢臥　張籍の詩に、酒盡臥空餅。歐陽永叔の詩に、不覺長瓶臥牆曲。【一七】愁寂　杜子美の詩に、愁寂故山薇。【一八】困坷　坷は坎坷、行きなやむ。【一九】被遊塵涴　韓退之の詩に、勿使塵泥涴。【二〇】半破　韓退之の詩に、新月憐半破。【二一】郊賀　孟郊と李賀、並に唐の詩人。孟郊字は東野、韓愈と忘年の交をなす。李賀字は長吉、盡宗の朝に、協律郎となる。

歲晚相與饋問爲饋歲。酒食相邀呼爲別歲。至除夜達旦不眠。爲守歲。蜀之風俗如是。余官於岐下。歲暮思歸。而不可得。故爲此三詩。寄子由

歲晚相與に饋問するを饋歲と爲す、酒食相邀呼するを別歲と爲す、除夜に至り旦に達して眠らざるを守歲となす、蜀の風俗是の如し、余岐下に官し、歲暮歸を思ひ、而も得べからず、故に此の三詩を爲り、子由に寄す

饋歲

農功各已收。歲事得相佐。
爲歡恐無及。假物不論貨。
山川隨出產。貧富稱小大。
寘盤巨鯉橫。發籠雙兎臥。
富人事華靡。綵繡光翻座。
貧者愧不能。微摯出春磨。
官居故人少。里巷佳節過。

農功各已に收め、歲事相佐くるを得。
歡を爲す及ぶなきを恐る、物を假り貨を論せず。
山川出產に隨ひ、貧富小大に稱ふ。
盤に寘いて巨鯉橫はり、籠を發して雙兎臥す。
富人は華靡を事とし、綵繡光座に翻へる。
貧者は能はざるを愧ぢ、微摯春磨より出だす。
官居故人少く、里巷佳節過ぐ。

亦欲舉鄉風。獨唱無人和。

亦た鄉風を擧げんと欲す、獨唱へて人和するなし。

【字解】【一】饋歲　歲の暮に、親族　舊の間に於て、物の贈答を爲すをいふ。饋は餽に同じ。【二】邀呼　むかへて招く。邀は招なり、晉書陶潛傳に、王弘令ㇾ潛故人齎ㇾ酒於ニ半道一邀ㇾ之。【三】岐下　岐山の下、東坡の奉職地、鳳翔府。【四】農功各已收　農家の收穫も終る、左傳襄公十七年に、妨ニ於農收一。【五】綵繡　小袖や袋物などをいふ。【六】貧者愧不ㇾ能　王符の潛夫論、浮侈篇に、富貴競欲ニ相過一、貧者恥ㇾ不ニ逮及一。【七】微摯　摯は贄と通ず、僅かばかりのみやげ物。【八】出ニ春磨一　うすつき、うすひきなどして得た賃錢でととのへる意。【九】鄉風　故鄉の風俗、何遜の詩に、鄉鄉自風俗、處處皆城市。

【題義】紀昀いふ、三首俱謹嚴有ㇾ法、第一首、歸思自在ニ言外一、第二首。氣息特古。第三首、用ニ古韻一と。皆、壬寅の作である。壬寅は、仁宗の嘉祐七年（皇紀一七二二年、西曆一〇六二年）である。此の時、老泉は五十四歲で、京師に在つて禮書を修め、子由は二十四歲で、老蘇に侍して京師に在る。東坡は奉職して鳳翔府にあるから、歲末になつても、故鄉蜀の風俗に從ひ、饋歲、別歲、守歲の三事を爲すことが出來ない。歸りたくても仕官の身で、ままにならない。そこで此の三詩を作つて弟に寄せたのである。

【詩意】農家の收穫も終つて、歲事とて正月の用意をなしては、互に佐け合ふ。歡びを盡すこと及ばざるを恐れるので、市中に買物に出かけ、代價を後にして借りて來る。思ふ品があれば代價の高下は問はない。そこで贈り物はといふに、其の土地の產出に隨ふから、必しも同じでない。大きな鯉もあれば、兎もある。又、家の貧富に應じて多い少いの別がある。金持の人は、小袖や袋物の綵繡に念を入れ、貧しいものは勞働して得た賃錢で買ひととのへる。今、我は官居で、知人も少い。佳節は空し

く過ぎてしまふ。故郷蜀の風俗を行ひたいと思つても、自分獨で唱へるだけで、誰も和してはくれない。

別歳

故人適千里。臨別尚遲遲。
人行猶可復。歳行那可追。
問歳安所之。遠在天一涯。
已逐東流水。赴海歸無時。
東鄰酒初熟。西舍彘亦肥。
且爲一日歡。慰此窮年悲。
勿嗟舊歳別。行與新歳辭。
去去勿回顧。還君老與衰。

故人千里に適く、別に臨みて尚ほ遲遲。
人行くは猶ほ復るべし、歳行くは那ぞ追ふべけん。
歳に問ふ安くに之く所、遠く天の一涯に在り。
已に東流の水を逐ひ、海に赴いて歸る時なし。
東鄰酒初めて熟し、西舍彘亦肥ゆ。
且つ一日の歡を爲し、此の窮年の悲みを慰む。
嗟する勿れ舊歳の別、行くゆく新歳と辭せん。
去去回顧する勿れ、君に老と衰とを還さん。

【字解】【一】別歳　忘年の意。【二】臨別尚遲遲　莊子逍遙遊に、適千里者、三月聚糧。遲遲は徐行する貌、詩の邶風谷風に、行道遲遲。【三】天一涯　古詩に、各在天一涯。【四】東流水赴海　白居易の詩に、去復去兮如長河、東流赴海無回波。古樂府に、百川東到海、何時復西歸。李太白の詩に、黄河之水天上來、東流到海不復回。又、東流不作西歸水。【五】東鄰、西舍　李白の江夏行に、東家西舍同時發。【六】且爲一日歡　列子楊朱篇に、舜禹周孔、彼四聖者、生無一日之歡、死有萬世之名。謝靈運の詩に、且盡一日娛。韓退之の詩に、無念百年、聊樂一日。【七】窮年悲　淮南子に、木葉落長年悲。莊子、寓言に、所以窮年。【八】去去勿回顧　曹植の詩に、去去莫復道。

【詩意】故人が遠遊すると、別れが惜まれる。併し、人の行くのは、復復る。歳の行くのは追ふことが出來ない。歳よ君は何れの處へ行かれるぞ。歳は答へていふ、遠く天の一涯に去るのである。そして、東流の水を逐ひて海に赴けば再び歸り來る時はないのであると。歳に別れを惜みて、酒や肴を供へて相邀へて呼ぶ。一日の歡樂をなして此の歳終の悲みを慰めて年を忘れる。窮年は、一年のをはりをいふ。されど、舊年の別は歎くには足らない。來るべき新年とも、何れ別れを告げねばならない。かく觀じ來れば、別れは少しも惜しむに足らない。歳よ、爾は速に去れ去れ、後を顧みることなかれ。我身の老と衰といふ厄介ものまでも御返し申さう程に、とくとく連れて行かれよ。

守歳

欲知垂盡歳。有似赴壑虵。
脩鱗半已沒。去意誰能遮。
況欲繫其尾。雖勤知奈何。
兒童强不睡。相守夜讙譁。

盡るに垂んたる歳を知らんと欲せば、壑に赴く虵に似たるあり。
脩鱗半ば已に沒す、去意誰か能く遮らん。
況んや其の尾を繫がんと欲す、勤むと雖も知る奈何せん。
兒童强ひて睡らず、相守りて夜讙譁す。

晨雞且勿唱。更鼓畏添樞。
坐久燈燼落。起見北斗斜。
明年豈無年。心事恐蹉跎。
努力盡今夕。少年猶可誇。

【字解】【一】赴壑　李商隱の樊南甲集に、赴壑而一去無返。【二】繫其尾　晉書の賈后傳に、后曰、繫狗、當繫頸、今反繫其尾。【三】更鼓長添樞　更鼓は、夜中、時刻を知らせる爲の太鼓。樞は鼓を擊つ棒。【四】燈燼落　鄭谷の詩に、靜燈微落燼。【五】少年猶可誇　白樂天の詩に、猶有誇張少年處、笑呼張丈喚殷兄。

晨雞且つ唱ふる勿れ、更鼓樞を添うるを畏る。
坐久しくして燈燼し落つ、起ちて見る北斗の斜なるを。
明年豈年なからんや、心事恐くは蹉跎。
努力して今夕を盡くせ、少年猶ほ誇るべし。

【詩意】大晦日が來た、歳の盡くるは、譬へば蛇の壑に赴くやうなもので、之を引き止めようとするは、蛇の尾を繫ぐと同じで、勤めても無益である。除夜の實況をいふと、兒童は强ひて睡らない。喧すしく一夜を過ごす。晨雞時を告ぐるなかれ、夜の時を知らせる太鼓の數が加はるのも、氣が氣でない。坐久しうして燈も燼し、北斗星の斜なるを見る。努力して行樂し、今年の今夕を惜しむべし。明朝にならない間は、なほ少年を以て誇るべきである。

【餘論】全幅矯健、三首の冠である。結句猶可誇者、非幸詞、正以見去日之苦多而盛年之不再也と古人は評して居る。

讀開元天寶遺事三首

姚宋亡來事事生。
一官銖重萬人輕。
朔方老將風流在。
不取西蕃石堡城。

姚宋亡して來事事生ず、
一官は銖も重く萬人は輕し。
朔方の老將風流在り、
取らず西蕃の石堡城。

【題義】此詩は宋、神宗の熙寧六、七年頃の作なるべく、神宗が西夏を伐つたことを諷し、王韶等を譏つたものである。紀昀いふ、三詩、皆有姿致、詠史小詩、宜如此作と。

【詩意】唐は開元以後は、姚崇も沒し、宋璟も亡くなつた。それ以來は、天下の事、失策ばかりである。諸將はただ己の官爵を重んずるのみで、萬人の生命を輕んずる。然るに王忠嗣は官爵を輕んじ、人命を重んずる。王忠嗣の傳に、忠嗣、豈數萬の人命を以て、一官に易へんやと見えて居る。天寶六年(皇紀一四〇七年、西暦七四七年)玄宗は王忠嗣をして吐蕃の石堡城を攻めしめた。忠嗣奏す。石堡城は要害が險固である上に、吐蕃は其の國を擧げて之を守つて居る。今、兵を此の堅城の下に屯する。恐らくは、得る所が失ふ所に如かないであらうと。上は悅ばれなかつた。哥舒翰に命じて之を攻

【字解】【一】開元天寶遺事　唐、大原の王仁裕撰す。一百五十九條あつて、一卷を成し、前史に載せてない事を記してある。【二】姚宋　姚崇と宋璟。姚崇は唐の開元九年に歿し、宋璟は同じく二十九年に歿す。姚宋亡して　元微之の連昌宮詞に、開元之末姚宋死、朝廷漸漸由妃子。【三】銖重　銖も重しと訓み、官はたとひ錙銖の如きものでも之を重んずる意。【四】朔方老將　王忠嗣を指す。王忠嗣は、天寶四年に、朔方の節度使となつた。朔方は今の內蒙古の鄂爾多斯。【五】石堡城　唐書、王忠嗣の傳に據ると、天寶六載、上、王忠嗣をして、吐蕃の石堡城を攻めしむ。

取せしむ。大擧して之を拔いたが、戰死したものが大半で、竟に忠嗣の言の如くであつた。

潭裏舟船百倍多。　潭裏の舟船百倍多し、
廣陵銅器越溪羅。　廣陵の銅器越溪の羅。
三郎官爵如泥土。　三郎の官爵泥土の如し、
爭唱弘農得寶歌。　爭うて唱ふ弘農得寶の歌。

【詩意】天寶元年。韋堅は陝郡の太守、水陸轉運使に擢でられた。潭裏の舟が百倍にもなる。同じく二年の三月、玄宗は望春樓に幸して新潭を觀る。韋堅は新船數百艘を以て郡名を扁榜し、各郡中の珍貨を船背に陳ねる。廣陵郡船の如きは、廣陵から出る錦鏡、銅器、海味等、會稽郡船の如きは、銅器、羅、吳綾絳紗等。かくて、船を取る約三百、所在の方物を置き、倡人をして艫前に立つて、弘農得寶の歌を唱へしめ、鼓笛之に應ず。玄宗は悅びたまひ、官爵をば惜氣もなく賜はつた。

【字解】【一】三郎　玄宗兄弟六人、其の一は早く亡す、寧王、薛王は兄、申王、岐王は弟、故に三郎と稱す。【二】弘農得寶歌　潭裏舟船闐、揚州銅器多、三郎當レ殿坐、看唱得体歌。

琵琶絃急衮(一)梁州。
羯鼓聲高舞臂韝。

【詩意】琵琶絃急にして梁州を衮す。羯鼓聲高うして臂韝を舞はす。

【字解】【一】衮ニ梁州一　明皇雜錄に、上歸レ自レ蜀、乘レ月登レ樓、命歌ニ涼州、卽貴妃所レ製。涼州は今は轉じて梁州となる。天寶中の樂府は、皆、邊地を以て名となす、涼州甘州の如き是なり。【二】破ニ費八姨三百萬一

破(二)費八姨三百萬。
大唐天子要ニ纏(三)頭一。

八姨の三百萬を破費して、大唐の天子纏頭を要す。

太眞外傳に、八姨爲ニ秦國夫人一、上ニ羯鼓一、曲罷、上戲請ニ一纏頭一、遂出ニ三百萬一。【三】纏頭　舊俗、歌舞の人を賞する、錦綵を以て之を頭上に置き、之を纏頭といふ。

【詩意】晉が播遷してから、內地の古樂は、遂に分散した。苻堅が涼を滅ぼし、始めて漢魏淸商の樂を得。宋の武帝が關中を定めて、之を收め、樂は江南に入る。隋が陳を平げて之を獲。文帝曰く、此れ華夏の正聲であると、煬帝は淸樂西涼等九部を立つ。涼州は今梁州となつた。要するに唐の樂は邊聲が混じ、其の音節の雄繁を取る。絲聲を以て起して、竹聲之に次ぐ。琵琶は、もと胡地から出で、馬上で之を鼓したさうである。絃聲が急であつて、遂に梁州の音を衮じた。又、羯鼓は其の狀漆桶の如く、羯の地から來たから羯鼓と名く。雄壯の聲、ひぢあてを付けて舞ふ。八姨の秦國夫人が羯鼓の曲を上る。曲が罷んで、玄宗は戲むれて祝儀の事に及ぶと、秦國夫人は、豈、大唐天子の阿姨、錢なからんやと言ひ、遂に三百萬を破費して一局をなしたといふことである。

蘇東坡詩集　卷四

古今體詩　三十八首

和子由踏青

東風陌上驚微塵。
遊人初樂歲華新。
人閒正好路傍飲。
麥短未怕遊車輪。
城中居人厭城郭。
喧闐曉出空四鄰。
歌鼓驚山草木動。
簞瓢散野鳥鳶馴。
何人聚衆稱道人。

子由の踏青に和す

東風陌上微塵を驚かし、
遊人初めて樂しむ歲華の新なるを。
人閒にして正に好し路傍の飲、
麥短くして未だ怕れず遊車の輪。
城中の居人城郭に厭き、
喧闐曉に出でて四鄰を空しうす。
歌鼓山を驚かして草木動き、
簞瓢野に散じて烏鳶馴る。
何人か衆を聚めて道人と稱し、

【字解】【一】踏青　李綽の歲時記に、上巳日、都人於曲江、禊飲踏青草、曰踏青。
【二】東風　一本、春風に作る。
【三】歲華　年月をいふ、華は日月の光。
【四】喧闐　やかましく人が一杯になる、闐は滿つる意。新國史補に、郡邑爲之喧闐。
【五】道人　道家の說を修める人、智度論に、得道者、名曰道人。

遮道賣符色怒嗔。
宜蠶使汝繭如罌。(六)
宜蓄使汝羊如麕。(七)
路人未必信此語。
強爲買服禳新春。
道人得錢徑沽酒。
醉倒自謂吾符神。

道を遮り符を賣つて色怒嗔す。
蠶に宜しく汝の繭をして罌の如からしむ、
蓄に宜しく汝の羊をして麕の如からしむと。
路人は未だ必しも此語を信ぜざるも、
強ひて爲に買服して新春を禳ふ。
道人は錢を得て徑に酒を沽ひ、
醉倒して自ら謂ふ吾が符は神なりと。

【六】罌　甕に同じ。
【七】麕　麞の類の總稱。爾雅に、麕、大羊。

【題義】子由が踏青の詩敍に、眉之東門十數里有山、曰墓頤、山上有亭樹松竹、山下臨大江、毎正月人日、士女相與遊嬉、飲酒於其上、謂之踏青也、とある。陸放翁の詩に、只怪今朝空巷出、使君人日宴墓頤とは、眉州の故事を言つたものであらうが、劉禹錫の詩に、昭君坊中多女伴、永安宮外踏青來、とあるなど、踏青の俗は、所在皆然り、獨眉州のみではない。子由の東坡に寄せた二首は、一を蠶市といひ、一を蠶市といふ。

【詩意】春風が街上を吹いて塵が少し起つた。遊びの人は、年光の新になつたのを樂しむ。どことなく世間が靜かで、酒を郊外に攜へるによろしく、麥もまだ短いから、遊車の過ぎるを怕れない。城中の人人は城郭を空うして、朝からどしどし出かける。歌ひ囃して草木も動き出し、酒肴の筵も野に敷かれて鳥も馴れ近づく、此時羣衆を聚めて道人と稱するは何人ぞ。道を遮り神符を賣つて顏色怒れるやうである。曰く、此符を戴けば蠶に宜しい、繭は罌のやうに大きな物が出來る。(太平廣記に、園客者、濟陰人、嘗種五色香草、積數十年、服食其實、忽有五色蛾、集香草上、客收而薦之以布、生華蠶焉、至蠶出時、有一女、自來助客養蠶、亦以香草飼之、得繭百二十頭、繭大如罌、毎一繭繰六七日乃盡、繰訖俱去。)曰く、此符を戴けば家畜に宜しい、羊は麕の如くになる。道路の人は、必しも此の言葉を信じないが、強ひて買つて新春の禳をする。道人は得た錢で直ぐに酒を沽ひ、醉ひ倒れて自ら謂ふ吾が符は神であると。

和子由蠶市

蜀人衣食常苦艱。
蜀人遊樂不知還。
千人耕種萬人食。
一年辛苦一春閒。
閒時尚以蠶爲市。

子由が蠶市に和す

蜀人は衣食常に艱きを苦しむ、
蜀人は遊樂して還るを知らず。
千人耕種して萬人食ふ、
一年辛苦し一春閒なり。
閒時なるも尚ほ蠶を以て市を爲す、

【字解】【一】蠶市　眉州城内官市に在る、毎歲二月望日に相聚まりて、蠶器を此に鬻ぐ。併しここの蠶市は、歲首に行ふ鄉俗である。【二】千人耕種萬人食　前漢賈誼傳に、一人耕之、十人聚而食之、欲天下亡飢、不可得也。また、後漢王符潛夫論の浮侈篇に、一人耕、百人

恐忘辛苦逐欣歡。
去年霜降斫秋荻。
今年箔積如連山。
破瓢爲輪土爲釜。
爭買不啻金與紈。
憶昔與子皆童丱。
年年廢書走市觀。
市人爭誇鬬巧智。
野人喑啞遭欺謾。
詩來使我感舊事。
不悲去國悲流年。

恐くは辛苦を忘れて欣歡を逐はん。
去年霜降りて秋荻を斫り、
今年箔積むこと連山の如し。
破瓢を輪となし土を釜となし、
爭ひ買ふこと啻に金と紈とのみ
ならず。
憶ふ昔は子と皆童丱、
年年書を廢てて市に走つて觀る。
市人は爭ひ誇つて巧智を鬬はす、
野人は喑啞欺謾に遭ふ。
詩來つて我をして舊事を感せしめ、
國を去るを悲まずして流年を悲しむ。

流年　流光といふに同じ。過ぎ行く年月、杜甫の詩に、鬱鬱流年度。

【題義】蜀に蠶市といふがある。毎年正月より三月に至る間に、州城及び屬縣で行ふ。相傳ふ、古、蠶叢氏が蜀の主となつて、民に定居がない。蠶叢の在る所に隨つて市居を致したさうで、其の遺風である。毎年、養蠶の時節に先ち、蠶農の具及び果藥雜物を商ふのである。子由の原題に、記歲首鄉俗寄子瞻二首、一曰踏青、二曰蠶市とあるから、ここの蠶市も亦正月人日（七日）の事である。

【詩意】蜀人は、兎角、生産的に働くものが少いので、衣食が足らざるを苦しむ。千人が耕作して萬人が之を食ふ。それで勞働する人は一年中、辛苦して、僅に一春閑である。其の閑な時でも、蠶の市をする。これは其の辛苦を忘れて欣歡する。去年霜の降る時分に刈つた荻で蠶簾を造り、今春の市に積むこと連山のやうである。又、破瓢で輪を爲り、土で釜を爲る。狄箔は蠶に薦く具、瓢輪と土釜とは、絲を繰るもの、此の三者は養蠶時の必要品で、之を爭ひ買ふことは、金や紈（白いねり絹）よりも甚だしい。昔、お互に幼かつた時、いつも正月は書を廢めて市に走つて觀たものである。市人は巧智を鬬はすも、野人は、口言ふこと能はずして、常に欺かれる。今、汝の寄せた詩で舊い記憶が新に浮び、感慨に堪へない。我は國を去るを悲しまないで、寧ろ過ぎ行く年月を悲しむのである。

次韻子由論書

吾雖不善書。曉書莫如我。
苟能通其意。常謂不學可。
貌妍容有瞶。璧美何妨橢。

子由が書を論ずるに次韻す

吾書を善くせずと雖も、書を曉るは我に如くなし。
苟も能く其意に通せば、常に謂らく學ばずして可なりと。
貌妍なれば瞶するあるべく、璧美なれば何ぞ橢なるこ
とを妨げん。

食之、一婦桑、百人衣之、一以奉百、執能供之。【三】箔　蠶簾、養蠶に用ふる具。韓愈の詩に、春蠶看滿箔。高啓の詩に、葦箔夏分蠶。

【四】紈　白い熟絹、同じねり絹でも、粗厚のものを練といひ、輕細のものを紈といふ。【五】童丱　をさなき小供、丱は束髮の貌、詩に總角丱兮。【六】廢書　史記に、未嘗不廢書而泣也。【七】喑啞　口をつぐむ、管子に、聾盲喑啞。東坡の詩に、撫掌笑先生、年來效喑啞。【八】欺謾　あざむき侮る、漢書の宣帝紀に、務爲欺謾以避其課。韓退之の詩に、厥罪在欺謾。【九】悲去國　杜子美の詩に、去國悲王粲。【一〇】

端(三)莊雜流麗。剛健含(四)婀娜。
好之每自譏。不(五)獨子亦頗。
書成輒棄去。繆被旁人裹。
體勢本闊落。結束入細(六)麽。
子詩亦見推。語重未敢荷。
爾來又學射。力薄愁官(七)笴。
多好竟無成。不(八)精安用夥。
何當盡屏去。萬事付懶惰。
吾聞古書法。守駿莫如跛。
世俗筆苦驕。衆中强嵬(九)騞。
鍾(一〇)張忽已遠。此語與時左。

【字解】【一】有賾　賾は蹟に同じ、顏をしかめる。莊子天運篇に、西施病レ心而矉二其里一。【二】橢　長圓形をいふ、爾雅に、蠙小而橢。註にいふ　卽小貝橢、謂二狹而長一と。【三】端莊　正しくおごそか、朱熹が詩に、退息常端莊。【四】婀娜　美女のしなやかなる貌、曹植の洛神賦に、華容婀娜、令二我忘レ餐。【五】不獨　一本に不謂に作る。【六】細麽　班彪の王命論に、么麽不レ及二數子一。註にいふ、細小曰レ麽と。【七】官笴　笴は箭幹、東坡の自註に、官箭十二把、吾能二十一把箭一耳。周禮の考工記に、妢胡之笴。註にいふ、妢胡、胡子之國、在二楚旁一。笴、矢幹也と。【八】不精安用レ夥　前漢書の陳涉傳に、夥頤涉之爲レ王、沈沈者。註にいふ、楚人謂レ多爲レ夥と。後漢書の馬融傳に、鄭君博而不レ精。【九】嵬騞　安帖ならざる貌、說文に、謂二馬搖レ頭曰レ騞。【一〇】鍾張　鍾繇（字は元常）と張芝（字は伯英）【一一】與レ時左　時の字、一本に詩に作る。韓退之の書に、身動而事左、非二計之得一也。事宜に逆はないのを左計といふ。

【題義】東坡が子由と書を論じた詩である、子由の原作は、堂上岐陽碑、吾兄所レ與レ我、吾兄自善レ書、魏華自磨淬、峻秀不二包裹一、九成列　賢俊一、磊落雜二么麽一、英公與二褒鄂一、戈戟聞自荷、何年學レ操筆、終歲惟箭笴、書成亦可レ愛、藝業嗟二獨夥一、余雖二謬學一文、書レ字每慵惰、車前駕二騏驥一、車後繫二羸跛一、逾レ年學レ擧レ足、漸亦成二駑騞一、古人有二遺蹟一、筐短不レ及レ鎖、願從レ兄發レ之、洗レ硯處二兄左一で、本詩は、此の次韻である。

【詩意】書を學ぶものは、須らく書外の意を得べきである。我は字を書くことが拙いけれども、書の意を曉つて居ると信ずる。（魯直常に謂ふ、東坡心通二於翰墨之外一）其の意に通ぜば、其の事は學ばないでも可いと思ふ。西施のやうな美人であれば、顰しても亦美しい、立派な璧であれば形は橢圓でも宜しい。書の風は、正しくおごそかな處に、流麗を雜へ、剛健な處に、しなやかな點を含むべきである。余は書を好むも、每に自ら譏る。子だけが頗つて居ると言はない。それで時に字を書いても、直ぐ棄ててしまふ。繆つて傍人に拾ひ取られることもある。字の體勢は快闊磊落であらねばならないが、結束の處は、細心に書かなければならない。子が此度の詩も、亦余（東坡）の書を推して居らるる

が、敢て當らない。又、其の後、射術を學んだが、力が薄いので迚も官箭は引けない。すべて多く好めば成功しない。精しくなければ多くても役に立たない。何の時か書も弓も一切棄て去つてしまひたい。吾聞く、古の書法は、馬でいふと、千里の駿馬を守るよりは、あしなへ馬を守る方がよいと。これは愚を守る意であらう。世俗の運筆は、甚だ驕つて居る、衆中、無理に形づくつて安らかでない。孫過庭の書譜に、子敬之不レ及二逸少一、猶二逸少之不レ及二鍾張一、とあるが、實際、子敬（王獻之）の逸少（王羲之）に及ばないことは、王羲之の鍾繇や張芝に及ばないやうなもので、いよいよ遠ければ、いよいよ氣韻が高い。此の語は、今時の考へとは違つて居る。

記二所レ見開元寺吳道子畫佛滅度一以答二子由一

見る所の開元寺吳道子畫佛滅度を記して以て子由に答ふ

西方眞人誰所レ見。
衣被二七寶一從二雙狻一。
當時修道頗辛苦。
柏生二兩肘一烏巢レ肩。
初如二濛濛隱レ山玉一。
漸如二濯濯出レ水蓮一。
道成一旦就二空滅一。
奔會四海悲二人天一。
翔禽哀響動二林谷一。
獸鬼躑躅淚迸レ泉。
龐眉深目彼誰子。
繞レ牀彈レ指性自圓。
隱如二寒月墮清晝一。
空有二孤光留二故躔一。
春遊二古寺一拂二塵壁一。
遺像久此霾二香煙一。
畫師不二復寫名姓一。
皆云二道子一口所レ傳。
縱橫固已蔑二孫鄧一。

【字解】【一】吳道子　名畫記に、唐の吳道元は陽翟の人、畫に工みなり。初名は道子、玄宗召して禁中に入れ、名を道元と改む。【二】佛滅度　釋迦牟尼佛の涅槃に入りしをいふ。法華經に、衆見二我滅度一、廣供二養舍利一。【三】西方眞人　列子の仲尼篇に、西方之人有二聖者一焉。【四】七寶　二種ある、一は金・銀・琉璃・玻瓈・珊瑚・瑪瑙・硨磲。一は金輪寶、象寶、紺馬寶、神珠寶、主藏臣寶、玉女寶、兵主臣寶。【五】雙狻　穆天子傳に、狻猊、日走五百里。狻猊は獅子、一名虓、獸中の王。【六】柏生二兩肘一　莊子の至樂篇に、支離叔與二滑介叔一觀二於冥伯之丘、崑崙之虛一、黃帝之所レ休、俄而柳生二其左肘一。王維、能禪師碑銘に、蓮花承レ足、楊枝生レ肘。【七】濛濛　雨霧などのをぐらい貌、王昌齡の詩に、玉清壇上雨濛濛。【八】濯濯　美しく光潔なる貌。世說に、濯濯如二春月柳一。【九】悲二人天一　劉孝綽の詩に、辨論悅二人天一。【一〇】躑躅　足蹈みする、荀子禮論の註に、躑躅、以レ足擊レ地也。【一一】龐眉　大なる眉。【一二】彈指　蘇軾の詩に、三過門前老病死、

有レ如二巨鰐呑一小鮮一。　巨鰐の小鮮を呑む如きあり。
來詩所誇孰與此。　來詩誇る所は此に孰與ぞ、
安得攜挂其旁一觀。　安んぞ其の旁に攜挂して觀るを得ん。

【題義】紀昀いふ、題不二了了一、當レ云下子由以二畫文殊・普賢詩一見レ寄、因記二所レ見開元寺吳道子畫佛滅度一以答之、不レ然末二句不レ知レ爲二何語一と。鳳翔開元寺の大殿九間の後壁吳道元の畫は、釋迦の始生より修行、說法、滅度に至るまでが畫いてある。其の滅度の如きは、諸比丘（比丘は梵語僧の稱）は悲慟自ら勝へざるものの如く、飛鳥走獸までも號頓の狀を作して居る。獨、菩薩は淡然として傍に在つて平時の如く、略ぼ哀戚の容がない。其の能く生死の致を盡して居るからである。

【詩意】西方の眞人は、七寶を著け、二匹の獅子を從へて居る。當時の修道は、餘程骨の折れたもので、深く禪定に入り、柏が兩肘に生じ、烏が肩に巢うたといふことである。釋迦が道を修して居られたときは、濛濛として光無く山に隱れたる玉の如くであつたが、後に道が成就すると、濯濯として光潔に水を出づる蓮花のやうであつた。成道の後、衆生を敎化せられたが、一朝、涅槃に入られた。すると四海人天悲しみ、翔る鳥も、走る獸も皆哭す。是時大眉深目の羅漢あり、北首せる佛の牀を繞り、指を彈いて淡然として居る。隱として寒月の淸晝に墮ちるやうである。（月墮二淸晝一は、佛の滅度に譬ふ。）孤光の故躔に留まるありといふのは、佛は寂滅はしても、猶ほ存在して居るに譬ふ。春、古寺に遊んで塵壁を拂ひ、釋迦の遺像も香煙に籠められて霾い。畫師は姓名を書かない。道子の畫であるといふのは、世人の口牌に傳へる所である。筆力が縱橫で、孫知微や鄧隱などの畫伯を蔑んじ、大きな鰐が小魚を呑むやうである。子由が寄せられた詩中にある文殊、普賢の像は、此と比較して如何で御座る。どうか攜へて其の傍に挂げて見たいものである。（子由の詩に、吾兄子瞻苦好レ異、敗繒破紙收明鮮、自二從西行一止得レ此、試與記錄一代觀、とある。）

和二子由寒食一

子由の寒食に和す

寒食今年二月晦。　寒食今年二月の晦、
樹林深翠已生レ煙。　樹林深翠已に煙を生ず。
遶レ城駿馬誰能借。　城を遶る駿馬誰か能く借さん、
到處名園意盡便。　到る處名園意盡く便す。
但挂二酒壺一那計レ盞。　但酒壺を挂く那ぞ盞を計らん、
偶題二詩句一不レ須レ編。　偶ま詩句を題して編むことを須ひず。
忽聞二啼鵑一驚二羈旅一。　忽ち啼鵑を聞いて羈旅に驚く、
江上何人治二廢田一。　江上何人か廢田を治めん。

【字解】【一】寒食　荆楚歲時記に據るに、冬至の後、一百五日にして疾風甚雨あり、之を寒食といふ。鄴中記には、并州の俗、冬至の後百五日、介子推の爲に、火を斷じ冷食す、之を寒食といふとある。【二】深翠　濃き綠、王昌齡の詩に、江明深翠引二諸峰一。【三】啼鵑　詩、豳風に、七月鳴鵙。註にいふ、鵙、伯勞也と。【四】故躔　日月の行る所を躔といふ。【四】孫鄧　孫知微と鄧隱、圖畫見聞志に、孫知微字太古、通義彭山人。鄧隱、梓州人、工畫佛像鬼神。【一五】小鮮　小さき生魚、老子に治二大國一若レ烹二小鮮一。【一六】來詩所レ誇　子由題畫文殊、普賢を指す。

【題義】子由は寒食前一日、東坡に詩を寄せていふ、寒食明朝一百五、誰家冉冉尚廚煙、桃花開盡葉初綠、燕子飛來體自便、愛レ客漸能陪二痛飲一、讀レ書無レ思懶二閒編一、秦川雪盡南山出、思下共二肩輿一看中麥田上、と。本詩は是に和したのである。

【詩意】今年の寒食は、二月の晦に當つて居るが、濃き綠の森には已に春煙を生じた。誰でも駿馬を借してくれれば、之に乘つて、到處の名園で、くつろいで休まう。ただ酒壺を掛けて、酒杯を傾けることをば考へない。たまたま詩句を題しても、之を編まうともしない。忽ち鵑の鳴くを聞く、耕すことを催ほす聲がする。此の聲を聞くにつけても、人は廢田を治むべきである。一體、此の鳥は、三月に入つてから、當に鳴くべきを、二月の晦に之を聞いたので、羈旅の驚きは知るべきである。江上廢田を治めるは何人であらう。

【餘論】後漢書の周舉傳に、太原一郡、舊俗以二介子推焚レ骸、有二龍忌之禁一、（龍忌とは火を焚くことを禁ずるのである）至二其六月一、咸言、神靈不レ樂レ舉レ火、由レ是士民每冬中、輒一月寒食、莫二敢煙爨一、舉既到レ州、乃作二弔書一置二子推之廟一、言、盛冬去レ火殘二損民命一、非二賢者之意一、以宣二示愚民一、使レ還二溫食一云云。是に據ると、漢以前の寒食は、冬中に在つて二三月にはないやうに見える。

次韻和子由欲得二驪山澄泥硯一

次韻して子由が驪山の澄泥硯を得んと欲するに和す

舉世爭稱鄴瓦堅。
一枚不レ換百金頒。
豈知好事王夫子。
自採臨潼繡嶺山。
經レ火尚含泉脈暖。
弔レ秦應レ有二淚痕潸一。
封題寄去吾無レ用。
近日從レ戎擬レ學レ班。

【字解】【一】澄泥硯　硯譜に、虢州澄泥硯、唐人品レ硯、以爲二第一一。澄泥硯は、細絹二重を以て泥を淘して、之を澄ましめ、極めて細なるものを取り、燔いて硯としたものである。【二】鄴瓦　魏は鄴都に銅雀臺を建つ、後世、其の瓦を以て硯を作り、世に貴重さる。【三】臨潼　古の驪邑、今は縣、陝西關中道に屬す。驪山は南に在る。【四】繡嶺　山海經に、驪山左右皆峻嶺、雲霞繡錯、因有二繡嶺之名一。【五】泉脈　鮑照の詩に、金澗測二泉脈一。ここは臨潼の溫泉をいふ。【六】淚痕潸　史記に、葬二始皇酈山一。【七】學レ班　後漢の班超傳に、常爲レ官傭書、輟レ業投レ筆歎曰、大丈夫無二他志略一、猶當下效二傅介子・張騫一立二功異域一以取中封侯上、安能久事二筆硯間一乎。

【題義】驪山の澄泥硯は、第一品で、綠色春波の如く、子由が欲しがつて之を詩に述べたのを次韻したのである。子由の詩の末句に報レ君湘竹筆身斑とある。今、東坡は班の字を押したので原唱と同じからずと難ずるものがあるが、班、斑は便に隨つて押したもので、必しも論じない。

【詩意】世人は爭うて鄴瓦の青色硯を稱する。其の內、平瑩で厚さ寸許に及ぶものには、多く工人の姓氏を印してあり、文字は皆、八分もしくは隸書である。此の硯は、一枚百金以上である。好事の王

夫子（王頤字は正父、時に武功縣を爲む）は自ら臨潼驪山から採り、之を燔いて硯を製する、久しきを經ても溫かである。古を懷ふと、驪山は秦の始皇を葬つた地で、之を憑弔して涙下る。封題寄せ去る、我には用なし。我は近日、昔の班超を學んで筆を投じて戎軒を事としよう。（時に夏人が大舉入寇し、聲三輔を搖かす。朝廷方に王素を遣はし師を平涼に視る、因つて此句がある。）

次韻和子由聞予善射

中朝鸞鷺自振振[一]　　豈信邊隅事執鼓[二]。
共怪書生能破的[四]　　也如驍將解論文。
穿楊自笑非猿臂[六]　　射隼長思逐馬軍[八]。
觀汝長身最堪學　　定如髯羽便超羣。

次韻して子由予が射を善くすと聞くに和す

中朝の鸞鷺自ら振振たり、豈信せんや邊隅に鼓を執るを事とするを。
共に怪む書生の能く的を破るを、也驍將の解く文を論ずるが如し。
楊を穿ちて自ら笑ふ猿臂にあらず、隼を射て長く思ふ馬軍を逐ふを。
觀る汝長身最も學ぶに堪ふるを、定ず髯羽の如く便ち羣を超えん。

爲レ人長二髮臂一、其善射亦天性。【七】射レ隼　易に、公用射二隼于高墉之上一。【八】馬軍　杜子美の詩に、洗レ盞開嘗對二馬軍一。

【字解】【一】中朝鸞鷺　中朝は中國をいふ。鸞鷺は、貴顯の威儀にいふ。鸞は神鳥、鳳凰の屬。鷺は白さぎ。【二】振振　詩の魯頌に、振振鷺。振振は羣り飛ぶ貌、鷺は潔白な鳥。【三】鼓　爾雅の釋樂に、大鼓謂二之鼓一。【四】破レ的　晉書王濟傳に、一發破レ的。【五】穿レ楊　養由基は楊葉を去ること百步にして之を射、百發百中す。【六】猿臂　猿の臂は肩に通ず、前漢書李廣傳に、

【題義】豈信邊隅事レ執レ鼓の句あるより見るも、此詩は邊を犯すに因つて發したのである。

【詩意】中朝の威儀ある、鸞鷺の羣り飛ぶがやうである。それで、國境に戰があるとは信ぜられない。共に怪しむのは、書生が射を善くすることである。それは恰も驍將の文事を論ずるのと同じである。昔の養由基は楊葉を百步の外に射て百發百中といふことであるが、自ら笑ふ、射術が工でも臂の長いのではない。隼（鷹の一種）を高墉（小城）の上に射、馬軍を逐はうとする。就いては汝は長身にして最も學ぶに堪へる。必ず髯羽の如く拔羣の士となるであらう。（三國蜀志、關羽傳の諸葛亮が羽に答へる書に、孟起（馬超の字）一世之傑、黥・彭（黥布、彭越）之徒、當下與二益德一（張飛の字）竝驅爭ち先、未レ若二髯之絕倫逸羣一也とある。羽は鬚髯が美であるから、亮は之を髯と謂つたのである。）

次韻子由彈琴

琴上遺聲久不レ彈[一]　　琴中古義本長存。
苦心欲レ記常迷舊　　信指如レ歸自著痕。
應有仙人依樹聽[二]。

子由が彈琴に次韻す

琴上の遺聲久しく彈せず、琴中の古義本長へに存す。
苦心記せんと欲して常に舊に迷ひ、指に信せて歸るが如く自ら痕を著く。
應に仙人樹に依つて聽くあるべく、

【字解】【一】琴　伏羲の作つた樂器、古は五絃、後、七絃を用ふ。【二】仙人依レ樹聽　昔、王質が山に入り木を伐り、童子の琴を彈くを見る。質因つて留まり斧柯に趺して之を聽く、俄頃にして起つ、坐せし所の斧柯爛れ盡くす。【三】鶴舞　韓非

空敎瘦鶴舞風騫。　空しく瘦鶴をして風に舞つて騫ばしむ。
誰知千里溪堂夜。　誰か知らん千里溪堂の夜、
時引驚猿撼竹軒。　時に驚猿を引いて竹軒を撼かす。

臒琴を援りて鼓す、一たび之を奏すれば、玄鶴二八あり、南方より來る。再び之を奏すれば列なり、三たび之を奏すれば、頸を延べて鳴き、翼を舒べて舞ひ、音は宮商の聲に中る。【四】溪堂　東坡の自註に、過終南一日、令道士趙宗有彈琴溪堂。

【題義】東坡の父、蘇老泉が久しく彈琴を廢したのを、たまたま人から雷琴を借りて舊曲を記した。そこで子由が詩を作つて父に呈した。東坡の此詩は、之に次韻したものである。

【詩意】琴上の遺聲は久しく彈じないが、琴中の古義は長も心に存する。苦心して記せんと欲して、いつも舊に迷ひしも、指に信せて歸るが如く、自ら痕を著けて迷はない。應に王質のやうな仙人が樹に依つて聽くであらう。空しく瘦せた鶴をして舞はしめる。誰か知らん千里終南を過ぐる日、一夜、溪堂で琴を彈き、驚猿をして聲に感せしめ、之を引き付けて竹軒を撼かしたことを。

子の十過に、衞靈公晉に之く、平公之を觴す。靈公起ち、師涓を召し、琴を援りて之を撫せしむ。師曠曰く、此れ清商なり、清徵に如かずと。師曠琴を援りて之を撫せしむ。

中隱堂詩　五首

岐山宰王君紳。其祖故蜀人也。避亂來長安而遂家焉。其居第園圃有名。長安城中號中隱堂者是也。予之長安。王君以書戒其子弟邀予遊。且乞詩甚勤。因爲作此五篇。

【訓讀】岐山の宰王君紳、其の祖は故蜀人なり。亂を避けて長安に來つて遂に家す。其の居第園圃名あり。長安城中に中隱堂と號くるもの是なり。予長安に之く。王君書を以て其の子弟を戒め、予を邀へて遊び、且つ詩を乞ふこと甚だ勤む。因りて爲に此の五篇を作る。

【字解】【一】園圃　園は菜菓を種うる處であるが、山池ある遊山所をもいふ。圃は種レ菜處。

【題義】王紳は岐山の宰であつた。其の居第園圃亭が長安城中に在る。東坡が長安に至つたとき、紳は書を以て其の子弟を戒め、東坡の臨存を乞ひ、因て以て詩を乞うたのである。本詩の第三首に、二月驚二梅晩一、幽香此地無、依依慰二遠客一、皎皎似二吳姝一云云と、關中には梅がなく、公廨宇池亭に、樹を植うる三十餘本もあつて、獨、梅の樹が無い。茲に二月に、長安王紳の家に在つて之を見る。覺えず驚喜して此を賦し、依依慰二遠客一と言つた譯である。

去レ蜀初逃レ難。遊レ秦遂不レ歸。　蜀を去りて初て難を逃れ、秦に遊びて遂に歸らず。
園荒喬木老。堂在昔人非。　園は荒れて喬木老い、堂在るも昔人は非なり。
鑿レ石清泉激。開レ門野鶴飛。　石を鑿ちて清泉激し、門を開いて野鶴飛ぶ。
退居吾久念。長恐此心違。　退居吾久しく念ふ、長へに恐る此心の違ふを。

【字解】【二】喬木　年を經た高い木。詩小雅伐木篇に、出レ自二幽谷一、遷二于喬木一。【三】野鶴飛　杜子美の詩に、野鶴清晨飛。

【三】心違　杜子美の詩に、翻用寸心違。

【詩意】王君の祖は蜀人であるが、亂を避けて、蜀を逃れ、長安に遊んでまた歸らない。其の住はれた宅の園は荒れて、年を經た高い木が昔を語る。中隱堂は今も在るが、昔の人は居ない。石を鑿ちて清泉が湧き出で、門を開いて野鶴が飛ぶ。王君のやうに退居することは余の宿志であるが、いつも其の遂げないことを恐れて居る。

徑轉如修蟒。坡垂似伏鼇。
樹從何代有。人與此堂高。
好古嗟生晚。偸閒厭久勞。
王孫早歸隱。塵土汙君袍。

【字解】【一】修蟒　長いうはばみ、巨蟒、王蛇などいふに同じ。【二】伏鼇　鼇は大きな海がめ。【三】嗟生晚　韓退之の石鼓の詩に、嗟予好古生苦晚。【四】久勞　久しい間、骨を折る、史、魯の世家に、久勞于外。詩、豳風の我徂東山の註に、我往之東山、既久勞矣。【五】王孫早歸隱　劉安の招隱士に、王孫遊兮不歸。【六】塵土汙君袍　晉書に、王導嘗て西風の起るに遇ひ、扇を擧げ自ら蔽うて曰く、元規塵汙人と。韓退之の詩に、勿使塵土汙。白樂天の詩に、青袍塵土涴。

【詩意】路は轉じて長い蟒の如く、坡は伏した海龜のやうである。樹木は何れの時代からのものか、人は此の堂とともに高い。古を好んで、世に出たことの後れたのを嗟き、閒を偸んで久しく外に勞するを厭ふ。昔の言葉に、王孫遊兮不歸とあるが、どうか早く歸つて隱退せよ、塵土が君の著物を汚すであらう。

二月驚梅晚。幽香此地無。
依依慰遠客。皎皎似吳姝。
不恨故園隔。空嗟芳歲徂。
春深桃杏亂。笑汝益羇孤。

【字解】【一】二月驚梅晚　韓退之の詩に、二月初驚見草芽。【二】此地無　杜子美の詩に、丹橘黃柑此地無。【三】依依　枝のしなやかな貌、詩、小雅に、楊柳依依。【四】吳姝　姝は美好の人、陳後主の詩に、淇上待吳姝。【五】芳歲徂　鮑照の詩に、節徙芳歲殘。【六】笑汝　杜子美の決明花の詩に、涼風蕭蕭吹汝急。【七】羇孤　旅客孤子、謝希逸の月賦に、羇孤遞進。

【詩意】長安には、梅花が最も少い。そして開くことも、太だ晩い。氣候がやや晩いから、凡そ開くものが、皆、晩いのである。獨、梅花ばかりではない。兎に角、奥床しい香がないのに、王紳の家に入つて、圖らずも梅花を見たのは喜ばしい。依依として遠客（東坡自らを指す）を慰める。花の色が眞白で、美しいことは吳の美人に似て居る。之に對すれば、故郷を離れて居ることを恨みないで、空しく花の季節の過ぎ行くを嗟くのである。既に此地には梅が少く、開くことも晩い。桃や杏の咲き亂れる時分に當つて、梅の羇孤であることを知るべく、他の花に笑はれるであらうよ。（此篇は專ら梅花を詠じたもので、落句の汝の字は、梅花を指す。）

(一)翠石如鸚鵡。何(二)年別海壖。
貢隨南使遠。載壓渭舟偏。
已伴喬松老。那知故國遷。
(四)金人解辭漢。汝獨不濟然。

【字解】【一】翠石　皮日休の詩に、翠石數百歩。【二】何年別海壖　杜子美の詩に、萬里戎王子、何年別月支。壖は江河の邊地。【三】喬松　高大な松樹。一說に、喬は王子喬、松は赤松子、共に不死の仙人。【四】金人辭漢　李賀の金洞仙人辭漢歌の序に、宮官既拆盤、仙人臨載乃潸然泣下云云。

【詩意】石も奇である。綠色の石は鸚鵡のやうに美しく、海邊に別れて來たのは何れの年であつたらう。翠石の貢は南使に隨つて遠く、渭水を渡る舟に滿載して來る。已に喬松に伴ふのである。故國の遷るなどは、知つたことでない。(此の石は、漢唐故苑中のものであるから、斯やうに言つたのである。)昔、漢の武帝は、金洞仙人を鑄た。其の仙人は盤を捧げ露を承けて居る。魏の明帝の時、取りて洛に歸つたが、其の漢を辭するとき、宮宦が既に盤を拆き、仙人は載に臨んで、潸然として泣いたといふことである。金人は漢を辭することを解するに、汝、翠石は獨潸然たらざらんや。

翠石鸚鵡の如く、何れの年か海壖に別るる。
貢は南使に隨つて遠く、載は渭舟を壓して偏し。
已に喬松に伴つて老ゆ、那ぞ故國の遷るを知らん。
金人は漢を辭するを解す、汝獨潸然たらざらんや。

(一)都城更幾姓。到處有殘碑。
古隧埋蝌蚪。崩崖露伏龜。

都城幾姓を更ふる、到る處に殘碑あり。
古隧蝌蚪を埋め、崩崖伏龜を露す。

(四)安排壯亭樹。收拾費金貲。
(五)岣嶁何須到。韓公浪自悲。

【字解】【一】都城　左傳隱公元年に、都城過百雉、國之害也。都は都鄙の都、都城といへば、其の都の周圍を周して城を築き、市街も其内にあり、商工も其の内に住せり。【二】蝌蚪　古文をいふ、蒼頡の制した文字は、水蟲の蝌蚪に似て居る。【三】伏龜碑を載する所以、隋書に、三品以上立碑螭首龜趺。【四】安排壯亭樹　安排は程よくならべる、莊子大宗師に、安排而去化、乃入於寥天一。亭樹は、うてな、樹は屋宇ある臺。【五】岣嶁　山の名、名勝志に、岣嶁峰在衡州城北五十二里。湘水記に、衡山南有岣嶁峰、禹登此得金簡玉牒治水之書云云。

【詩意】班固の西都賦に、三成帝畿とある。其の註にいふ、周・秦・漢也と。周の姓は姬、秦の姓は嬴、前漢之に都し、姓は劉、前秦之に據り、姓は姚、そして唐之に都し、姓は李。故に都城更幾姓と言つたのである。現に到る處に殘碑がある。(起二句は、故らに開筆を作し、實は乃ち挽いて王氏の園を得るに到るのである。)其の殘碑に就いていふと、古い隧道に蝌蚪の書即ち古文の碑がある。崩れた崖に伏龜を露はして居る。之を安排して亭樹を壯にし、之を收拾して金貲を費す。神禹碑のある岣嶁山は何ぞ到るを須ゐん。韓退之は、岣嶁山尖神禹碑、字青石赤形摹奇、云云の詩を作つたが、それは浪りに自ら悲しむものと謂ふべきである。

安排壯亭樹を壯にし、收拾金貲を費す。
岣嶁何ぞ到るを須ゐん、韓公浪に自ら悲む。

鳳翔八觀　幷に序

(一)鳳翔八觀詩。記可觀者八也。昔司馬子長登會稽探禹穴。不遠千里而

李太白亦以七澤之觀至荊州。二子蓋悲世悼俗。自傷不見古人。而欲一觀其遺跡。故其勤如此。鳳翔當秦蜀之交。士大夫之所朝夕往來。此八觀者。又皆跬步可至。而好事者。有不能徧觀焉。故作詩以告欲觀而不知者。

【訓讀】鳳翔八觀の詩、觀るべきもの八を記す。昔、司馬子長、會稽に登り、禹穴を探り、千里を遠しとせず、而して李太白も、亦七澤の觀を以て荊州に至る。二子蓋し世を悲しみ俗を悼み、自ら古人を見ざるを傷んで、一たび其の遺跡を觀んと欲す、故に其の勤むること此の如し。鳳翔は秦蜀の交に當り、士大夫の朝夕往來する所、此の八觀は、又皆跬步して至るべし。而して好事のもの、徧く觀る能はざるあり。故に詩を作り、以て觀んと欲して知らざるものに告ぐ。

【字解】【一】鳳翔　今の陝西、鳳翔縣。元和郡縣志に、鳳翔項羽封二章邯一爲二雍王一、卽此地、漢爲二右扶風一云云。【二】跬步　頤步と同じ、半步をいふ。禮記の祭義に、故君子跬步而不忘孝也。

石鼓

冬十二月歲辛丑。
我初從政見魯叟。

石鼓

冬十二月歲の辛丑、
我初て政に從つて魯叟に見ゆ。

【字解】【一】石鼓　周の宣王の時、史籀が頌を作りて功を紀し、石に刻して鼓形となしたもの、凡そ十あつて、文を其上に鐫る。今尙ほ北京國子監に存す。其の文見るべきもの四百六十有五、磨滅して識るべからざるもの過半。文の內容は周宣王遊獵の事を記したものである。【二】歲辛丑　宋仁宗の嘉祐六年。起句に歲の干支を用ゐること唐詩に間〻ある。杜甫の北征詩、盧仝の月蝕の詩、白樂天の賀雨詩等。【三】從政　論語、雍也篇に、仲由可使從政也云云。【四】魯叟　孔子を指す、孔子は魯の人、叟は長老の稱。李白の贈裴十七仲堪詩に、魯叟悲匏瓜。陶淵明の詩に、汲汲魯中叟。東坡の渡海詩に、空餘魯叟乘桴意。【五】鬱律　文選の西京賦に、隱轔鬱律。註にいふ、皆、險曲の貌と。揚雄の甘泉賦に、霜鬱鬱律於巖突。【六】以指畫肚　虞世南は書を學び、常に被下に於て指を以て肚に畫す。【七】箝在口　讀むこと難きを

舊聞石鼓今見之。
文字鬱律蛟蛇走。
細觀初以指畫肚。
欲讀嗟如箝在口。
韓公好古生已遲。
我今況又百年後。
强尋偏旁推點畫。
時得一二遺八九。
我車既攻馬亦同。
其魚維鱮貫之柳。
古器縱橫猶識鼎。
衆星錯落僅名斗。
模糊半已隱瘢胝。
詰曲猶能辨跟肘。

舊石鼓を聞いて今之を見る、
文字鬱律として蛟蛇走る。
細に觀初指を以て肚に畫し、「を嗟す。
讀まんと欲し箝の口に在る如くなる」
韓公は古を好むも生已に遲し、
我今況んや又百年の後なるをや。
强ひて偏旁を尋ねて點畫を推し、
時に一二を得るも八九を遺す。
我が車既に攻く馬も亦同し、
其の魚維れ鱮之を柳に貫く。
古器縱橫なるも猶ほ鼎を識り、
衆星錯落たるも僅に斗を名ざす。
模糊半は已に瘢胝に隱れ、
詰曲猶ほ能く跟肘を辨ず。

(一五)娟娟缺月隱雲霧。
(一六)濯濯嘉禾秀稂莠。
漂流百戰偶然存。
獨立千載誰與友。
上追(一八)軒頡相唯諾。
下挹(二〇)冰斯同(二一)轂毂。
憶昔周宣歌(二二)鴻雁。
當時籀史變(二三)蝌蚪。
厭亂人方思聖賢。
中興天爲生(二四)耆耇。
東征(二五)徐虜闞(二六)虓虎。
北伐(二七)犬戎隨(二八)指嗾。
象胥雜沓貢(二九)狼鹿。
(三〇)方召聯翩賜(三一)圭卣。

娟娟たる缺月は雲霧に隱れ、
濯濯たる嘉禾は稂莠に秀づ。
百戰に漂流して偶然に存し、
千載に獨立して誰か與に友とする。
上は軒頡を追うて相唯諾し、
下は冰斯を挹して轂毂に同じ。
憶ふ昔周宣鴻雁を歌ひしとき、
當時籀史蝌蚪を變ず。
亂に厭いて人方に聖賢を思ひ、
中興天爲に耆耇を生ず。
東のかた徐虜を征して虓虎闞たり、
北のかた犬戎を伐ち指嗾に隨はしむ。
象胥雜沓して狼鹿を貢し、
方召聯翩として圭卣を賜ふ。

いふ、韓退之苦寒の詩に、濁醪沸入レ喉、口角如レ銜レ箝。歐陽永叔の詩に、有レ口欲レ說嗟如レ箝。【八】韓公好レ古　韓退之の石鼓歌に、嗟予好レ古生苦晚、對レ此涕淚雙滂沱。【九】我車既攻云云　東坡の自註に、石鼓文之辭云、我車既攻、我馬亦同。又曰、其魚維何、維鱮維鯉、何以貫レ之、維楊與レ柳、惟此六句可レ讀、餘多不レ可レ通。鱮、魴に似た魚。【一〇】錯落　間り厠る。唐の崔顥が詩に、錯落金鑠甲、蒙茸紹鼠衣。【一一】模糊　分明ならざる貌、模糊とも書く、模は模の俗字。杜子美が詩に、駝背錦模糊。【一二】皴胝　皴は痍の處が已に愈えて痕あるをいふ。胝は跰。文字が漫滅して、半ば已に瘡痍の痕の如く、又、手足の胝、凍裂したるに似る。【一三】詰曲　字體結構の怪しく勁きこと。【一四】跟肘　くびす

遂因(三三)鼓鼙思將帥。
豈爲(三四)考擊煩矇瞍。
何人作頌比嵩高。
萬古斯文齊岣嶁。
勳勞至大不矜伐。
文武未遠猶忠厚。
欲尋年歲無甲乙。
豈有名字記誰某。
自從周衰更(三六)七國。
竟使秦人有(三七)九有。
掃除詩書誦法律。
投棄俎豆陳(三八)鞭杻。
當年何人佐祖龍。
(四〇)上蔡公子牽黃狗。

遂に鼓鼙に因つて將帥を思ふ、
豈考擊の爲に矇瞍を煩はさんや。
何人か頌を作つて嵩高に比する、
萬古斯の文岣嶁に齊し。
勳勞至つて大なれども矜伐せず、
文武未だ遠からず猶ほ忠厚。
年歲を尋ねんと欲するに甲乙なし、
豈名字の誰某を記するあらんや。
周衰へてより七國を更て、
竟に秦人をして九有を有たしむ。
詩書を掃除して法律を誦し、
俎豆を投棄して鞭杻を陳ず。
當年何人か祖龍を佐くる、
上蔡の公子黃狗を牽く。

とひぢ、說文に、跟、足踵也、肘、臂節也。【一五】娟娟　美好の貌。【一六】濯濯　肥澤の貌、詩の大雅に、麀鹿濯濯。【一七】稂莠　稂は禾粟の穗が生じて成らないもの、莠は穉に似て實がない。詩の小雅に、不レ稂不レ莠。【一八】軒頡　軒は軒轅卽ち黃帝、黃帝の時、文字を以て結繩に代ふ。頡は蒼頡、鳥跡を見て文字を製す。【一九】唯諾　曲禮上に、必愼唯諾。註にいふ、唯諾、皆應辭、當レ愼於應對也。【二〇】挹冰斯　挹、一に揖に作る、同じ意である。氷は唐の李陽氷、小篆を善くす。斯は秦の李斯、大篆の繁きものを刪略して、其の合體を取り、參へて小篆を爲る。【二一】轂毂　鳥の子、母鳥の之を食ふを須つもの、之を轂といふ、燕や雀の類である。爾雅に、生れて哺するは轂なりと見ゆ。轂は乳なり、楚人乳を

(四一)登山刻石頌功烈。
後者無繼前無偶。
皆云皇帝巡四國。
烹滅强暴救黔首。(四二)
(四三)六經既已委灰塵。
此鼓亦當遭擊掊。
傳聞九鼎淪泗上。
欲使萬夫沈水取。
暴君縱欲窮人力。
(四四)神物義不汚秦垢。
是時石鼓何處避。
無乃天工令鬼守。
興亡百變物自閒。
富貴一朝名不朽。

山に登り石に刻して功烈を頌す、
後なる者繼ぐことなく前にも偶なし。
皆いふ皇帝四國を巡り、
强暴を烹滅して黔首を救ふと。
六經既に已に灰塵に委す、
此鼓も亦當に擊掊に遭ふべし。
九鼎泗上に淪むと傳聞して、「欲す。」
萬夫をして水に沈んで取らしめんと
暴君欲を縱にして人力を窮むるも、
神物は義として秦垢に汚されず。
是時石鼓は何れの處にか避けん、
乃ち天工鬼をして守らしむる無らんや
興亡百變すれども物自ら閒なり、
富貴は一朝なれども名は朽ちず。

細思物理坐嘆息。
人生安得如汝壽。

細に物理を思うて坐に嘆息す、「得ん。」
人生安んぞ汝の如く壽なることを

【題義】韓退之が既に石鼓の歌を作つたから、之を後石鼓歌といふ。東坡が二十六歳の時、即ち仁宗の嘉祐六年(皇紀一七二一年、西暦一〇六一年)に制科に應じて鳳翔に在つたが、是年、鳳翔八觀の詩を作つた。此は其の一つである。歐陽永叔いふ、石鼓有レ十、其一無レ文、其九有レ文、可レ見者四百一十七字、可レ識者二百七十二字と。

【詩意】仁宗の嘉祐六年に、我(東坡)は試驗に及第し、冬、鳳翔に赴任した。初て孔子の廟で、豫一聞いた石鼓を見る。(石鼓は周宣王の時のもので、孔子廟に在る。)其の文字は險曲で、蛟蛇の競ひ走るやうである。一覽して讀み得べきでないから、仔細に觀て、心に擬議し、指で肚の上に畫し、それかこれかと尋ね索めて今の字に譯して見る。試に讀まうとするも、箝(竹で作り、口に挿ませて、言ふことを得ざらしめる具。)が挿んで口中に在るやうで一句も讀み得られない。ただ口をつぐんで居る。韓

思ニ將帥一　禮記に、聽ニ鼓鼙之聲一、則思ニ將帥之臣一。鼙は騎上の鼓。【三三】崦嵫　山名、ここは神禹の碑をいふ。【三四】七國　秦・楚・齊・燕・韓・魏・趙。【三五】九有　天下といふ義、詩の商頌玄鳥篇に方命ニ厥后一、奄有ニ九有一。【三六】鞭柱　柱は手械。【三七】祖龍　始皇のこと、祖は始、龍は人君の象。【三八】鞭　鞭は人君の象。【三九】貢ニ狼鹿一　穆王犬戎を伐ち、四の白狼、四の白鹿を得て歸る。宣王の時の事ではないが、此に借り用ひて、犬戎に克つて功あるをいふ。【三〇】方召聯翩　方叔と召虎。翩は疾飛なり。方叔、召虎、共に賞ル勞ニ

謂つて毅といふ。【三一】歌ニ鴻雁一　詩小雅の篇名。周室中頃衰へて、萬民離散す。然るに宣王能く之を勞來し、安集する。故に流民之を喜んで此詩を作る。【三二】蝌蚪　蝦蟇の子、古文の形之に似る。【三四】耆　耆は曲禮上に、六十曰レ耆、耆は人老いて面黎うして垢くが如し。【三五】闞ニ虓虎一　詩の大雅に、闞如ニ虓虎一。闞は虎の怒る貌。【三六】伐ニ犬戎一　伐、一本に伏に作る。【三七】指嗾　嗾、使レ犬聲。【三八】象胥　通事をいふ、周禮、秋官に、象胥掌ニ蠻夷閩貉戎狄之國使一掌傳ニ王之言一而譯說上。【三九】貢ニ狼鹿一　穆王犬戎を伐ち、四の白狼、四の白鹿を得て歸る。宣王の時の事ではないが、此に借り用ひて、犬戎に克つて功あるをいふ。【三〇】方召聯翩　方叔と召虎。翩は疾飛なり。方叔、召虎、共に賞ル勞ニ

退之も、嘗て歎じて我古を好むも、生るること已に遲くて、上古の文字に通じない。僅に缺畫の餘を見て完好なるを見るに及ばずと言つた。まして韓公よりは百年も後に生れた我の時、缺畫がますます多く、文字いよいよ曉り難い。缺滅の餘を認め、强ひて偏旁を尋ね思うて、それの字かこれの字かと點畫を推し索める。時に或は一二某の字なるを知り得るも、十に八九は讀み得ない。我車既攻云云の六句のみ讀み得て、其の餘は通じ難い。（韓愈の石鼓の歌に、辭嚴義密讀難レ曉、字體不レ類隷與レ科とある。）石鼓の文數百言の中、僅に六句を識り得、これ古器縱横に弃散して多い中で、僅に鼎を識りて怪まないと同じく、又、天上衆星の錯落と雜り布いて多い中に、只、北斗の七星を識りて名指しいふやうである。模糊として文理なく、半は瘡痍の痕の如く、又、手足の胝凍裂したるに似て居る。既に文字漫滅して完全でなく、僅に殘つて詰曲たる所を認めて偏旁の餘畫を視る。人體の全きを見ないで、僅に一跟一肘を見るやうなものである。殘畫の僅に見えたるは娟娟と光のうるはしい缺月が半ば雲霧に隱れて少し見えたるを望むに似て居る。又、濯濯たる嘉禾の稂莠の間から秀で抽いたるがやうである。周より唐に至るまで百戰を經て漂流すれども、遂に毀壞もしないで、偶然として今に存在する。千載の久しきを經て獨立する石鼓の壽に均しきものはない。其れ誰と與にか友たらん、天下に之と均しきものはない。石鼓の文、上は文字の祖黄帝や蒼頡と相並んで互に唯諾して讓ることはない。又、史籀が文よりして、下、李陽氷や李斯の書を視れば、二子は、未だ獨りで啄飲し得ざる鳥雛の如く微小である。（起句より此に至る、見る所の石鼓と其の詞とを敍す。）憶ふ昔、周の宣王は、亂を治めて民を安んず、故に民は鴻雁の詩を歌つて之を喜ぶ。此時、史籀は蝌蚪を變じて大篆の體となした。凡そ亂が極まると、人、必ず治を思ふ。周は厲王の時亂れたが、宣王が立つて天子となり、其の亂を撥め民を拯うて、中興の周を定む。天帝之が爲に、耆耇の老臣を生じて聖治を輔けしめらる。（生二耆耇一とは、史籀を始め、方叔・召穆公・申伯・仲山甫・尹吉甫等をいふ。）夷王厲王の世より、周室衰弱となつたのを、宣王中興の主となつて、自ら徐虜を征し、虓虎の闞たる如き兵を進めると、徐虜も震驚して遂に來庭し、犬戎を伐つと犬戎も王命に從ふ。（指嗾は、指し使ふ聲に隨つて役せらる。嗾の字は、犬の字より出で來る。）かくて通事に憑つて狠鹿を貢し、衆賓が集る。方叔も召虎も、共に賞を得て、威儀揚揚。王は召虎に命じて圭（古、諸侯を封ずるしるしに用ふ）の玉と秬鬯（黑きびと香草とを合せて造つた酒）一卣とを錫ふ。かく宣王は亂を撥め、戎を伐ちて、四海平治したが、治に居て亂を忘れない。鼓を見て將帥の臣を思ふの義により、石鼓を作る。與に天下を守らんことを欲するからである。考擊して樂をなし、矇瞍の樂師を煩はして音を奏せしめるのではない。何人か此の石鼓の文を作つて宣王を頌する詞を刻んで嵩高の詩に比したるや。（嵩高は詩の大雅の篇名、宣王の時の詩。）石鼓の文は、萬古、岣嶁山上の神禹の碑に齊しいので天下の寶である。宣王は文・武・成・康の遺風に法つて德敎を布き、海內治まつて、天下周を宗とした。中興の勳勞は至つて大であるが、其の文を按ずるに、矜り伐るの辭がない。文・武の世を去ることが遠くなく、風俗猶ほ忠厚であるからであらう。石鼓の文を作つた年代は、甲乙の紀年もないから尋ねやうがない。又、文を作つたものの名字は、誰某と記すこともな

い。年紀でさへ記さないから、作者の名字は、猶ほ以て知り難い。周は幽王より漸く衰へ、威烈王に至つて極まる。七國相爭ひ、秦人をして天下を一統せしむ。秦天下を有つて、詩書を燒き去つて悉く之を掃除し、只法律を誦して、禁を避け、令に從はしむ。秦は先王の禮樂を投げ棄てて用ひない。(俎豆は、論語衞靈公篇に、孔子曰、俎豆之事、則嘗聞レ之矣、軍旅之事、未二之學一也とある。東坡は之に本づいたのであらう。)そして鞭杖の具を陳ねて、刑法を峻にした。當時何人が始皇を佐けて此の如き政をなしたか、卽ち彼の上蔡の公子、死に臨んで黃狗を牽ゐて兎を逐はんことを思ふと言つて哭した李斯其の人が爲である。(李斯を謂ふに、刑に臨む時の語を引いたのは之を惡んだからである。)石に刻むの文は、皆秦の天下を幷せ有つの功烈を誇り頌して居る。秦の世、無窮に傳はつて、後、繼ぐものもなく、秦が一統和平の治、前代の聖王も能く偶をなすなしといふのであらう。皇帝、四方の國を巡つて、强暴を熹滅し、黔首を救ふといふのは、石に刻んだ文辭である。石鼓は秦の暴を歷て恙なく今に存する。六經の書、皆、燒かれて灰塵に委ねたれば、石鼓も共に擊掊されて、毀壞すべきである。傳へ聞く、虞夏以來の九鼎は、周の顯王の時、淪んで泗水に入る。始皇、萬夫をして泗水に沈み、鼎を求めしめたが、終に得なかつた。始皇が欲を縱にし、人力を窮めて無道をなすに因つて、鼎は神物であるから、秦の垢に汚されないやうにと隱れて出でなかつたのであらう。神鼎已に淪んで自ら隱るれども、暴君始皇は猶ほ探り求めて之を得んと欲す。是時、此の石鼓は、何れの處に避け隱れて、秦の宮に入らないで、暴朝の垢に汚されなかつたか。これは天工より鬼神を役して衞護せしめたのではなからうか、もし然らずば、燒き滅されるか、徙し納められた筈である。周より宋に至るまで、興亡百變するが、此物は、依然として閒である。因つて思ふ、人生の富貴は一朝にして休す。ただ名譽のみは、長く傳はつて朽ちない。細に事物の道理を思うて坐に歎息する、人生の聲名は、安んぞ石鼓の壽にして不朽なるが如くなるを得んや。

詛楚文

峥嶸開元寺。髣髴祈年觀。
舊築掃成空。古碑埋不爛。
詛書雖可讀。字法嗟久換。
詞云秦嗣王。敢使祝用瓚。
先君穆公世。與楚約相捍。
質之於巫咸。萬葉期不叛。
今其後嗣王。乃敢構多難。
刳胎殺無罪。親族遭囹絆。
計其所稱訴。何啻桀紂亂。

詛楚文

峥嶸開元寺、髣髴祈年觀。
舊築は掃うて空となるも、古碑は埋もれて爛れず。
詛書讀むべしと雖も、字法久換を嗟く。
詞にいふ秦の嗣王、敢て祝をして瓚を用ひしむ。
先君穆公の世、楚と約して相捍ぐ。
之を巫咸に質し、萬葉叛かざるを期す。
今其の後の嗣王、乃ち敢て多難を構へ、
胎を刳き罪なきを殺し、親族囹絆に遭ふ。
其の稱訴する所を計るに、何ぞ啻に桀紂の亂のみならん。

吾聞古秦俗。面詐背不ㇾ汗。　吾聞く古の秦俗、面のあたり詐りて背に汗せず。
豈惟公子卯。社鬼亦遭ㇾ謾。　豈惟に公子卯のみならんや、社鬼亦謾に遭ふ。
遼哉千載後。發ㇾ我一笑粲。(九)　遼なるかな千載の後、我が一笑粲を發す。

【字解】【一】 詛楚　詛は呪ふ意、楚王熊相の盟に倍き詛を犯したことを數め、諸を名章に著はし、以て大神の威神に盟ふ。【二】 峥嶸　山の峻しき貌。【三】 髣髴　彷彿に同じ、明かならざる貌。【四】 祈年觀　雍縣の中牢井に在る秦の惠公の故居。【五】 用ㇾ瓚　周禮、冬官に、侯用ㇾ瓚、伯用ㇾ將。瓚も亦圭である。瓚の言は贊進なり、以て神に進むる意である。【六】 巫咸　莊子の應帝王篇に、鄭有ニ神巫一曰ニ季咸一、知ニ人之死生存亡禍福壽夭一、期以ニ歲月旬日一若ㇾ神。【七】 萬葉　萬代に同じ、葉は世。顏延年の曲水詩序に、固萬葉而爲ㇾ量。【八】 囹絆　囚はれつながる。【九】 笑粲　郭璞詩に、靈妃顧ㇾ我笑、粲然啓ニ玉齒一。穀梁傳の昭公四年に、軍人粲然皆笑。

【題義】 秦祀巫咸神は、今、流俗之を詛楚文といふ。首として秦穆公と楚の成王との事を述べ、遂に楚王熊相の罪に及ぶ。巫咸は、古の神巫で、殷の中宗の世に降下したといふことである。詛楚文の石碣に三つある。(一)渭水より得たもの、(二)祈年觀下のもの、(三)洛水出す所のもの。東坡の自註に、碑獲ニ於開元寺土下一、今在ニ太守便廳一、秦穆公葬ニ於雍槖泉祈年觀下一、今墓在ニ開元寺之東南數十步一、則寺豈祈年之故基耶、淮南王遷ニ於蜀一、至ニ雍道一病卒、則雍非ニ長安一、此乃古雍也、とある。

【詩意】 開元寺は峻く聳え、祈年觀は髣髴として見ゆ。觀は秦孝公の時代に起したもの、秦より宋の嘉祐に至る千餘年の久しきであるから、舊日の版築は地を掃うて盡く。ただ古碑は埋れて爛れない。(竊戚の歌に、南山粲、白石爛)詛書は讀めるけれども、字法が久しく時代を經た爲に換つて居る。其の詞にいふ、秦の嗣王敢て祝(神官)をして瓚を用ゐて神前に進めしめる。先君穆公の世に、楚と約して相捍ぎ、之を巫咸に質し、萬代叛かないことを期した。然るに其の嗣王が、敢て多難を構へ、孕婦を刳いたり、罪のないものを殺したりして、親族は囚はれて繫がる。其の稱訴する所を計るに、何ぞ啻に夏の桀王や殷の紂王の亂暴のみではない。(秦の嗣王より此に至るまで、皆、詛楚文中の語である)吾聞く、古の秦の風俗は變詐で、面と向つて詐り、而も少しも愧ぢることを知らない。欺かれるものは、ただ彼の公子卯ばかりではない。(史記の商鞅傳に、孝公使ニ衞鞅將而伐ㇾ魏、魏使ニ公子卯將而擊ㇾ之、軍既相距、鞅遺ニ魏將公子卯書一曰、吾始與ニ公子一驩、今俱爲ニ兩國將一、不ㇾ忍ニ相攻一、可下與ニ公子一面相見、盟樂飲而罷ㇾ兵、以安中秦魏上、公子卯以爲ㇾ然、會盟已飲、而衞鞅伏ニ甲士一而襲虜ニ公子卯一、因攻ニ其軍一、盡破ㇾ之以歸ㇾ秦。)社鬼も謾かれる。昔、周の雍門周(琴を鼓して孟嘗君之を悲しむ。)は孟嘗君に謂つて曰く、千秋萬歲の後、高臺は已に傾き、曲池は已に平かなりと謂つたが、遼なるかな千載の後、我が一笑粲を發するのである。

王維吳道子畫(一)

何處訪ニ吳畫。普門(二)與ニ開元一。　何れの處に吳畫を訪はん、普門と開元と。
開元有ニ東塔。摩詰留ニ手痕一。　開元に東塔あり、摩詰手痕を留む。
吾觀ニ畫品中一。莫ㇾ如ニ二子尊一。　吾畫品中を觀るに、二子の尊きに如くはなし。

道子實雄放。浩如海波翻。
當其下手風雨快。
筆所未到氣已呑。
亭亭雙林間。彩暈扶桑暾。
中有至人談寂滅。
悟者悲涕迷者手自捫。
蠻君鬼伯千萬萬。
相排競進頭如黿。
摩詰本詩老。佩芷襲芳蓀。
今觀此壁畫。
亦若其詩清且敦。
祇園弟子盡鶴骨。
心如死灰不復溫。
門前兩叢竹。雪節貫霜根。

道子は實に雄放、浩として海波翻へるが如し。
其の手を下すに當り風雨快し、
筆未だ到らざる所氣已に呑む。
亭亭雙林の間、彩暈扶桑の暾。
中に至人の寂滅を談ずるあり、
悟るものは悲涕し、迷ふものは手自ら捫す。
蠻君鬼伯千萬萬、
相排し競ひ進み頭は黿の如し。
摩詰は本詩老、芷を佩び芳蓀を襲ぬ。
今此の壁畫を觀るに、
亦其の詩の清且つ敦なるが若し。
祇園の弟子盡く鶴骨、
心は死灰の復溫かならざるが如し。
門前兩叢竹、雪節霜根を貫く。

交柯亂葉動無數。
一一皆可尋其源。
吳生雖妙絕。猶以畫工論。
摩詰得之象外。
有如仙翮謝籠樊。
吾觀二子皆神俊。
又於維也斂衽無間言。

交柯亂葉動いて數なし、
一一皆其の源を尋ぬべし。
吳生妙絕と雖も、猶ほ畫工を以て論ず。
摩詰は之を象外に得、
仙翮の籠樊を謝するが如きあり。
吾二子を觀るに皆神俊、
又維也に於て衽を斂めて間言なし。

【字解】【一】王維　名畫記に、王維字は摩詰、太原の人、開元の初、年十九にして進士となり、第に擢んでられ、詞學を以て名を知られ、又、畫に工である。官は尚書右丞に至る。【二】吳道子　圖畫寶鑑に、吳道玄、字は道子、陽翟の人。其の筆法超妙にして、百代の畫聖となす。【三】普門、開元　二寺の名、俱に鳳翔府に在り。鳳翔府志に、開元寺在城北街、唐開元元年建、內有詔楚文及吳道子畫佛、王維畫竹。【四】雄放　輟耕錄に、賈誼之俊健、司馬之雄放。【五】海波翻　韓退之の詩に助叫波翻海。【六】風雨快　杜子美の詩に、筆落驚風雨。【七】亭亭雙林間　亭亭は聳えたるさま、釋迦、法を雙林樹下に說き、二月十五日、大涅槃に入る。譯して滅度といふ。【八】彩暈扶桑暾　彩暈は五色のくもり、扶桑暾は朝日をいふ。扶桑は日所出之處、暾は日光。杜子美の詩に、絕壁上朝暾。【九】鬼伯　古蒿里曲に、鬼伯一何相催促。【一〇】頭如黿　黿はおほ龜、晏子春秋に、古冶子得黿頭、鶴躍而出。【一一】詩老　王維の詩に、宿世謬詞客、前身應畫師。【一二】芷　水に生ずる一種の香草。【一三】芳蓀　香草。謝靈運の詩に、浥露馥芳蓀。【一四】祇園　祇樹給孤獨園の略。釋迦、法を祇樹園に說く。【一五】鶴骨　齊已の詩に、瘦應成鶴骨。【一六】死灰　莊子齊物論に、形固可使如槁木、心固可使如死灰乎。【一七】交柯　水經の註に、交柯雲蔚。【一八】亂葉　李

洞の詩に、亂葉落二寒墟一。【一九】仙翮　列仙傳に、王次仲變レ篆爲レ隸、始皇召レ之不レ至、次仲化爲二大鳥一振レ翼而起、以二三大翮一墮與二使者一、始皇因名爲二落翮仙一。【二〇】問言　辭を加へること、張顚傳に、至二張顚一、曾無二問言一。

【題義】此篇は、東坡が鳳翔府の簽判となつた時作つたもの、前の鳳翔八觀の詩の一つである。唐の米景元の畫斷に、道子を以て神品上上となし、摩詰を以て、妙品上上となす。

【詩意】何れの處にか吳道子の畫を訪はん。吳生の畫佛は、此の開元寺に在り、又、其の東塔には摩詰の畫もある。吾、畫品中を觀るに、二子の尊きに如くものはない。（前の四句を一括して、王と吳との畫品が最も尊きを說く。此れ以下は、吳生の筆力の雄放奇拔なるを敍す。）道子の畫は雄放で、海波の翻へるが如し。其の手を下す、風雨快く、筆未だ到らない內に、氣既に呑む。其の畫は彼の跋提河邊の娑羅雙樹の下に於て、佛が涅槃に入るときの相を寫したものである。其の有樣をいふと、娑羅雙樹の間に、佛の頂の後に圓光を放つて居る。それは恰も朝日のまはりに、五色の曇がかかつて居るやうである。（佛の圓相を說く）中に至人（佛をいふ）が入滅の時に、涅槃經を說いて、寂滅の理を談ずるとき、悟るもの、卽ち菩薩の輩は、感泣して居る。迷ふもの、卽ち聲聞の輩は、捫覔し、唯手を以てあがいて居る。又、異形不思議な野蠻の頭ども、鬼の頭どもが、佛の涅槃に入るのを見たいと、競ひ進み來る、其の有樣は、黿が水中から頭を出して狂ひまはつて居るやうである。（以上吳生の畫を敍す。）以下は摩詰が畫ける所の、開元寺の東塔の畫を敍す。）さて王維は詩に老いたもので、其の韻度の淸絕超高なことは、譬へば香のよい芷を佩びたものが、芳蕙を襲ねたやうなものである。今、此の東塔の壁畫を觀るに、亦其の詩のやうに淸絕な中に、敦厚の旨趣がある。（禮記に、溫柔敦厚は、詩の敎とある）又、其の畫いた釋迦の十大弟子のさまをいふと、何れも瘦せて骨高く、鶴のやうである。又、無心であつて、死灰の再び溫かならざるやうである。更に王維の畫ける門前にある兩叢の竹は、雪霜の中に、凜然たる氣節を見ることが出來る。殊に交はりたる枝、亂れた葉は、動いて居るやうに見える。其の數は、數へきれぬ程であるが、盡く法があつて、其の原理を尋ねることが出來る。吳生の伎倆は妙絕であるが、畫工といふまでである。摩詰の畫に至つては、形象の外に、絕妙の趣を加へる。仙禽が籠から出て自由に飛び舞つて居るやうである。此二人の畫を觀るに、皆神俊の絕藝である。そして王維の畫は、尋常畫工の出來ない象外の妙趣があるから、之に對しては敬意を表し、袵をかいつくろひて一言の批難のしやうがない。（道子と摩詰とを合論して、重きを摩詰に歸する。）

維摩像。唐楊惠之塑。在二天柱寺一

維摩の像、唐の楊惠之の塑、天柱寺に在り

昔者子輿病且死。
其友子祀往問之。
跰躚鑒井自嘆息。
造物將安以我爲。

昔子輿病みて且に死なんとす、
其の友子祀往いて之を問ふ。
跰躚として井に鑒みて自ら嘆息す、
造物將に安に我を以て爲さんとする。

【字解】【一】維摩　維摩詰は、釋尊と時代と同うし、家に在りて菩薩の道を行ぜり。【二】塑　塑像、土で作つた像。【三】子輿病且死云云　莊子の大宗師に、子輿有レ病、

今觀古塑維摩像。
病骨磊嵬如枯龜。(五)
乃知至人外生死。
此身變化浮雲隨。(六)
世人豈不碩且好。
身雖未病心已疲。
此叟神完中有恃。(七)
談笑可却千熊羆。(八)
當其在時或問法。
俛首無言心自知。(九)
至今遺像兀不語。
與昔未死無增虧。
田翁里婦那肯顧。
時有野鼠銜其髭。

今、古塑維摩の像を觀るに、
病骨磊嵬枯龜の如し。
乃ち知る至人は生死を外にし、
此身の變化浮雲に隨ふを。
世人豈碩に且つ好からざらんや、
身未だ病まずと雖も心已に疲る。
此の叟神完く中恃むあり、
談笑して千熊羆を却くべし。
其の在しし時に當り或ひと法を問ふ、
首を俛して言なく心自ら知る。
今に至るまで遺像兀として語らず、
昔未だ死せざると增虧なし。
田翁里婦那ぞ肯て顧みん、
時に野鼠あつて其の髭を銜む。

子祀往問之、曰偉哉夫造物者、將以予爲此拘拘也、曲僂發背、上有五管、頤隱於齊、肩高於頂、句贅指天、陰陽之氣有沴、其心閒而無事、跰躠而鑑于井、曰、嗟乎夫造物、又將以予爲此拘拘也。【四】跰躠　ひよろひよろと歩む貌。莊子の註に、病而不能行貌とある。

【五】枯龜　論衡に、枯龜之骨といふ語がある。【六】浮雲隨　維摩經に、是身如浮雲、須臾變滅。【七】神完　韓退之の詩に、神完骨蹋脚不掉。【八】談笑云云　文選左太沖の詩に、談笑卻秦軍。熊羆は、猛き士。【九】俛首無言　維摩經に、文殊師利、維摩詰に問ふ、維摩詰、默然として言なし。文殊師利歎じて曰く、善いかな善いかなと。【一〇】自失　莊子應帝王篇に、神巫見壺子、自失而走。

見之使人每自失。(一〇)
誰能與詰無言師。

之を見て人をして毎に自失せしむ、
誰か能く詰と無言の師たらん。

【題義】唐の楊惠之は吳道子と同じく張僧繇（唐の人、丹青絶代と稱さる）の筆蹟を師とし、畫友となつて工藝竝に著はれたが、道子の聲光獨顯はれたので、遂に筆硯を焚き棄て、憤を發して思を塑作に專らにした。能く僧繇の畫相を奪ひ、道子と衡を爭うた。名勝志に、維摩詰像在鳳翔縣天柱寺とある。此詩は楊惠之の手に成つた維摩詰の塑像を直寫したのである。

【詩意】昔、子輿が病むと、其の友子祀は見舞つた。子輿は、ひよろひよろとして井水に其の影を寫し、歎じて曰く、ああ造物者我をして此病をなさしむ。一體、我をどうする考へであらうかと。今、維摩の古い塑像を觀るに、磊嵬として、枯れた龜骨のやうである。して見ると、至人は、生死を外にし、此身の變化は浮雲に隨ふことが解る。世の人には、身體も大きく、又立派なものがある。身未だ病まないが心は已に疲る。然るに此叟は神完くして、中恃むものがある。談笑の間に、猛き武夫を却ける剛勇がある。其の在世の時に、或人が法を問ふと、首を俛して言なきも、心の中では之を知る。今に至るまで遺像は兀として居つて語らない。昔、まだ死なない時と增しもしないし虧けもしない。田翁も里婦も顧みない。時に野鼠があつて、其の髭を銜んだので、人をして自失せしめた。誰か能く維摩詰と無言の師となるであらう。

東湖

吾家蜀江上。江水清如藍。
爾來走塵土。意思殊不堪。
況當岐山下。風物尤可慚。
有山禿如赭。有水濁如泔。
不謂郡城東。數步見湖潭。
入門便清奧。恍如夢西南。
泉源從高來。隨波走涵涵。
東去觸重阜。盡爲湖所貪。
但見蒼石螭。開口吐清甘。
借汝腹中過。胡爲目耽耽。
新荷弄晚涼。輕棹極幽探。
飄颻忘遠近。偃息遺珮簪。
深有龜與魚。淺有螺與蚶。

東湖

吾蜀江の上に家す、江水は清うして藍の如し。
爾來塵土に走り、意思殊に堪へず。
況んや岐山の下に當り、風物尤も慚づべきをや。
山あれども禿にして赭の如し、水あれども濁りて泔の如し。
謂はず郡城の東、數歩に湖潭を見んとは。
門に入れば便ち清奧、恍として西南を夢るが如し。
泉源高きより來り、波に隨ひ走つて涵涵。
東に去つて重阜に觸れ、盡く湖の貪る所となる。
但見る蒼石螭、口を開いて清甘を吐く。
汝が腹中を借りて過ぐ、胡爲れぞ目耽耽たる。
新荷晚涼を弄し、輕棹幽探を極む。
飄颻として遠近を忘れ、偃息珮簪を遺る。
深きに龜と魚とあり、淺きに螺と蚶とあり。

曝晴復戲雨。戢戢多於蠶。
浮沈無停餌。倏忽遽滿籃。
絲緡雖强致。瑣細安足戡。
聞昔周道興。翠鳳棲孤嵐。
飛鳴飲此水。照影弄毿毿。
至今多梧桐。合抱如彭聃。
彩羽無復見。上有鸇搏鷐。
嗟予生雖晚。好古意所耽。
圖書已漫漶。猶復訪僑郯。
卷阿詩可繼。此意久已含。
扶風古三輔。政事豈汝諳。
聊爲湖上飲。一縱醉後談。
門前遠行客。劫劫無留驂。
問胡不回首。毋乃趁朝參。

曝晴復戲雨、戢戢として蠶より多し。
浮沈して停餌なく、倏忽遽に籃に滿つ。
絲緡强ひて致すと雖も、瑣細安んぞ戡つに足らんや。
聞く昔周道興り、翠鳳孤嵐に棲む。
飛鳴して此水を飲み、照影毿毿を弄す。
今に至るまで梧桐多く、合抱彭聃の如し。
彩羽復見るなく、上に鸇の鷐を搏つあり。
嗟予生るること晚しと雖も、古を好む意耽む所。
圖書已に漫漶、猶ほ復僑郯を訪ふ。
卷阿の詩繼ぐべし、此意久しく已に含む。
扶風は古の三輔、政事は豈汝諳んぜんや。
聊か湖上の飲を爲し、一縱醉後に談ぜん。
門前遠行の客、劫劫驂を留むるなし。
問ふ胡ぞ首を回さざる、乃ち朝參に趁くなからんや。

予今正疎懶。官長幸見函。　予今正に疎懶、官長幸に函れらる。
不辭日遊再。行恐歲滿三。　辭せずして日に遊ぶ再び、行くゆく恐くは歳三に滿たん。
暮歸還倒載。鐘鼓已(二六)(二七)(二八)。　暮に歸り還倒載、鐘鼓已に(二九)(三〇)。

【字解】【一】東湖　鳳翔志に、東湖在二縣東門外一、鳳泉自レ北繞レ城南流。【二】如レ藍　藍は染草、李太白の詩に、山光水色青二於藍一。白樂天の詩に、春來江水綠如レ藍。李商隱の詩に、千里嘉陵江水色、含レ煙帶レ月碧如レ藍。【三】岐下　岐山の下、岐山は陝西鳳翔府に屬す。【四】秃如レ赭　韓退之の南山詩に、或赤若二秃鬚一。赭は草木なきをいふ。史記に、始皇大怒伐二湘山樹一赭二其山一。【五】泔　米汁。【六】怳　怳に通ず、うつとりとして自失する貌。【七】涵涵　韓退之が王公碑銘に、涵涵而停。【八】蒼石螭　螭は、龍の角がないもの。【九】耽耽　易に、虎視耽耽。【一〇】飄颻　ひるがへり動く、曹植の詩に、轉蓬離二本根一、飄颻隨二長風一。【一一】偃息　孟浩然の詩に、偃息西山下、門庭罕二人迹一。【一二】佩蓼　蓼はかんざし、簪と同じ。【一三】螺蚶　螺は貝類、蚶は螺の小さいもの。【一四】絲緡　詩に、其釣維何、維絲伊緡。【一五】戡　勝つこと。【一六】翠鳳　李斯が諫二逐客一書に、建二翠鳳之旗一。【一七】毳毳　毛の長い貌、皮日休が詩に、毳毳被二其體一。【一八】梧桐　莊子秋水篇に、鵷雛非二梧桐一不レ止。【一九】彩羽　東觀漢記に、鳳凰毛羽五彩。【一〇】鷁捋レ鷁　鷁は鷹の屬。鷁は鶉の屬。【一一】漫漫　分別しない貌。【一二】僑鄭　僑は鄭子產、鄭は鄭子。鄭は國の名、子は爵の名。左傳昭公元年及び十七年に見ゆ。【一三】三輔　京兆尹、左馮翊、右扶風、共に長安城中を治む、是を三輔とす。【一四】劫劫　盧仝の詩に、日車劫劫西向沒。【一五】歲滿レ三　宋史選擧志に、守レ官及二三年一、例得二磨勘一。磨勘といふは、宋の中世、磨勘院を置いて、內外官吏の能否淸濁を考ふ。【一六】倒載　晉書山簡傳に、日夕倒載歸、酩酊無レ所知。【一七】鏘鏘　鐘鼓の聲微なるをいふ、周禮に、凡聲有二十二一而其一曰二微聲鶴一云云。

【題義】名勝志に、東湖は鳳翔城治の東に在り、雍・渭二水の溢るる所、今の城は、東西二湖の間に介して居る。東湖は卽ち古の飮鳳池、鳳翔府が名を得た來歷である。東坡は天柱寺に遊び、楊惠之が維摩の塑像を觀、遂に東湖に泛び、此の詩が出來たのである。鳳翔を流れる汧水は甚だ濁り、此湖は淸んで居る。之をいふのが作詩の本意であつて、寓憤の詞はない。

【詩意】吾が家は蜀江の上に在る。江の水は淸くして藍のやうである。其の後、世の塵に走つて、思ひが殊に堪へられない。まして岐山の下、鳳翔府の風物は、話にならない。山はあつても、草木はなく、水はあつても米汁のやうである。然るに、圖らずも郡城の東、數步に湖潭を見る。門に入ると共に淸奧で、うつとりとして西南の故土を夢みるやうである。泉源は高きより來り、波のまにまに走つて涵涵水澤多く、東に去つて重なつた岡に觸れて、盡く湖に入る。但見る蒼石の龍が口を開いて淸甘を出すを。汝が腹中を借りて過ぐ。なんすれぞ視ることの耽耽たる。新しい蓮は、晩涼を覺え、輕い棹を以て幽探を極める。道の遠近を忘れて飄颻として行く。偃息して佩べる簪を遺れる。水の深きには龜や魚があり、淺きには螺も蚶もある。(韓退之が溪堂詩に、淺有二蒲蓮一、深有二葭葦一。)忽ち晴れ忽ち雨降り、水中の魚や貝は鷁よりも多い。浮きつ沈みつして餌を停むるなく、忽ちにして籃(筐)に一杯となつた。絲緡で釣するのでは、間に合はない。昔、周の興るや、鸑鷟(鳳凰の族)が岐山に鳴いたといふことである。飛鳴して此水を飮み、照影が毳毳たり。(東坡の自註に、此古飮酒池。)今日に至るまで梧桐が多く、一抱へもある大木は、彭祖(堯の時の人)や老聃のやうな壽を保つて居る。併し鳳凰は復、見られないで、上に鷹の鶉を搏つあるのみ。(聞昔周道興の句より此一節に至るまでは、題の正面を完うす)ああ我は時代晩く此世に生れたが、古を好むは、我の樂しむ所である。圖書旣に分明

でないが、猶ほ博物の君子鄭の子産や郯子を訪うて古を知ることが出來る。又、かの詩經大雅の卷阿の詩（鳳凰鳴矣、于二彼高岡一、梧桐生矣、于二彼朝陽一）も繼ぐことが出來よう。此の意は以前から含んで居る。政事は汝には解るまい。聊か湖上の飲をなし、醉後に談ずることとしよう。門前遠行の客、劫劫として進み、驂馬を留めない。何んで首を回さないのか、朝參に趁く爲めでもあらうか。予は今正に疎懶、自分ながら愛想が盡きる。然るに官長が幸に寛容されて、辭職もしないで日に遊ぶこと二年。（此の二句は、太守宋選の厚遇を指す）行くゆく恐らくは三年にならうとする。官を守つて三年に及ぶと考績される例である。之を賴みとして居る。暮に歸り、また倒載して知る所がない。鐘鼓は既に齷齪として微かである。

眞興寺閣

山川與城郭。漠漠同一形。
市人與鴉鵲。浩浩同一聲。
此閣幾何高。何人之所營。
側身送落日。引手攀飛星。
當年王中令。斫木南山頳。

眞興寺閣

山川と城郭と、漠漠同一形。
市人と鴉鵲と、浩浩同一聲。
此閣は幾何高き、何人の營む所。
身を側てて落日を送り、手を引いて飛星を攀づ。
當年王中令、木を斫り南山頳し。

【字解】【一】眞興寺閣　鳳翔志に、眞興寺閣、宋節度使王彥超建、在二城中一、高十餘丈。【二】側レ身　楚辭に、顧側レ身而無レ所。【三】攀二飛星一　楊文公の詩に、危樓高百尺、手可レ摘二星辰一、不二敢高聲語一、恐驚二天上人一。【四】王中令　名は彥超、周の末、宋の初に、中書令鳳翔の節度使となる。【五】頳　赤色、猶ほ赭山といふが如し。【六】身長　杜子美の詩に、張公一生江海客、身長九尺鬚眉蒼。一本に身强に作る。【七】呀喘　息が急に出て、あへぎ苦しむ。

【題義】此詩も、鳳翔八觀の一である。體裁をいふと、古人の意を用ひて、其の字を取らない。卽ち杜子美が登二慈恩寺塔一詩に、秦山忽破碎、涇渭不レ可レ求、俯視但一氣、焉能辨二皇州一、とある。

【詩意】高閣の上から下觀すると、山川も、城郭も、平遠漠漠として、同じやうに見える。又、人語鳥聲も同じやうに聞える。（四句、此閣の高きを狀す。）此の閣の高さはどれだけ、何人が營める。日の落ちるも目前に在れば、我のみ日を送るが如く、天上の星をも、手でつまみ取ることが出來るやうである。（此閣云云の二句は自ら問を發し、側レ身云云の二句は、第一句を承けて、其の高きを狀す。そして側レ身は遠望をいひ、引レ手は其の高きをいふ。）當年の王彥超は、此閣を造る爲に、南山の木を斫寫レ眞留二閣下一。鐵面眼有レ稜。
身長八九尺。與レ閣兩崢嶸。
古人雖暴恣。作レ事今世驚。
登者尙呀喘。作者何以勝。
曷不レ觀二此閣一。其人勇且英。

眞を寫し閣下に留む、鐵面眼に稜あり。
身長八九尺、閣と兩ながら崢嶸。
古人暴恣と雖も、事を作す今世驚く。
登る者尙ほ呀喘、作る者何を以て勝へむ。
曷ぞ此閣を觀ざる、其の人勇且つ英。

り盡くし、それが爲に、南山は禿げて赤くなつたといふことである。（此二句は、前の第二句、何人所レ營の句を承く）王彥超は、自分の眞影を此閣の下に留めた。此を觀るに、面は黑くて鐵のやうであり、其の眼には稜がある。（晉書の桓溫傳に、劉惔嘗て之を稱して曰く、溫眼如二紫石稜一と。）其の身の長も非常なもので、此閣と兩つながら峥嶸（高く聳える）である。王彥超は暴恣（てあらくほしいまま）おごつて無益なものを造つたなどと言ふものもあるが、其の氣宇は大で、今人は迚も及ばない。ただ驚くばかりである。此閣に登るだけでも、其の高さに勝へないで、喘ぎ苦しむのである。此閣を作つた人人の苦辛は、いかばかりであつたらう。（嘸、勝へ難かりしならん）よく建築を見られよ、大なる志、膽力のあるものでなければ、かかる大構造は、出來ない。之を作つた人は、千萬人にすぐれたもので、殊に勇氣に富んだ人である。（李太白の詩に、張子勇且英とある。末句は此の字面を用ゐたものである。）

李氏園

朝遊北城東。回レ首見二修竹一。
下有二朱門家一。破牆圍二古屋一。
擧レ鞭叩二其戶一。幽響答二空谷一。
入レ門所レ見夥。十步九移レ目。

李氏の園

朝に遊ぶ北城の東、首を回せば修竹を見る。
下に朱門の家あり、破牆古屋を圍む。
鞭を擧げて其戶を叩けば、幽響空谷に答ふ。
門に入れば見る所夥し、十步に九たび目を移す。

異花兼二四方一。野鳥喧二百族一。
其西引二溪水一。活活轉二牆曲一。
東注入二深林一。林深窗戶綠。
水光兼レ竹淨。時有二獨立鵠一。
林中百尺松。歲久蒼鱗蹙。
豈惟此地少。意恐關中獨。
小橋過二南浦一。夾レ道多二喬木一。
隱如二城百雉一。挺若二舟千斛一。
陰陰日光淡。黯黯秋氣蓄。
盡レ東爲二方池一。野雁雜二家鶩一。
紅梨驚二合抱一。映レ島孤雲馥。
春光水溶漾。雪陣風翻撲。
其北臨二長溪一。波聲卷二平陸一。
北山臥可レ見。蒼翠間二磽禿一。

異花四方を兼ね、野鳥百族を喧しくす。
其の西は溪水を引き、活活として牆曲に轉ず。
東に注いで深林に入り、林深くして窗戶綠なり。
水光竹と淨く、時に獨立の鵠あり。
林中百尺の松、歲久うして蒼鱗蹙る。
豈惟に此地に少きのみならんや、意ふに恐くは關中に獨ならん。
小橋南浦を過ぐ、道を夾んで喬木多し。
隱として城百雉の如く、挺として舟千斛の若し。
陰陰日光淡く、黯黯秋氣蓄ふ。
東を盡くして方池を爲り、野雁に家鶩を雜ふ。
紅梨合抱に驚き、島に映じて孤雲馥し。
春光水溶漾、雪陣風翻撲。
其の北は長溪に臨み、波聲平陸を卷く。
北山は臥して見るべく、蒼翠磽禿に間はる。

我時來周覽。問此誰所築。
云昔李將軍。負險乘衰叔。
抽錢算間口。但未榷羹粥。
當時奪民田。失業安敢哭。
誰家美園囿。籍沒不容贖。
此亭破千家。鬱鬱城之麓。
將軍竟何事。蟣蝨生刀鞨。
何嘗載美酒。來此駐車轂。
空使後世人。聞名頸猶縮。
我今官正閑。屢至因休沐。
人生營居止。竟爲何人卜。
何當辦一身。永與清景逐。

我時に來つて周覽す、問ふ此れ誰が築きし所ぞ。
云ふ昔李將軍、險を負みて衰叔に乘じ、
錢を抽いて間口を算し、但未だ羹粥を榷せず。
當時民の田を奪ふ、業を失ふ安んぞ敢て哭せん。
誰が家の美園囿、籍沒して贖ふべからず。
此亭は千家を破る、鬱鬱城の麓。
將軍竟に何事、蟣蝨刀鞨に生ず。
何ぞ嘗て美酒を載せ、此に來りて車轂を駐むる。
空しく後世の人をして、名を聞くも頸猶は縮ましむ。
我今官正に閑、屢〻至るは休沐に因る。
人生居止を營む、竟に何人の爲に卜する。
何か當に一身を辦じて、永く清景と逐ふべき。

【字解】【一】修竹　長く延びた竹、北史、柳弘傳に、修竹夾レ池。【二】朱門　晉書麴允傳に、南開二朱門一、北望二青樓一。【三】異花兼二四方一　杜子美の詩に、異花開二絕域一。【四】活活　水の盛に流れる聲、詩の衞風に、河水洋洋、北流活活。【五】水光兼レ竹淨　杜子美の詩に、遠水兼レ天淨。【六】蒼鱗　賈島の詩に、青松樹有レ鱗。【七】南浦　江淹の別賦に、送二君南浦一。【八】隱如二城百雉一　後漢書の吳漢傳に、隱若二一敵國一矣。左傳の都城百雉の註に、方丈曰レ堵、三堵曰レ雉。【九】黯黯　陳琳の詩に、黯黯天路陰。【一〇】映レ島孤雲馥　韓退之が詩に、欲レ知二花島處一、水上覓二紅雲一。【一一】溶漾　たゞよふ、杜牧之の詩に、溶溶漾白鷗飛。【一二】雪陣　皮日休の詩に、雪陣千萬戰。蘇轍の詩に、霏微雪陣散、顚倒玉山舞。【一三】衰叔　衰世、叔世をいふ。叔世は末世に同じ、漢書の刑法志に、三辟之興、皆叔世也。【一四】間口　間架稅や戶口錢。【一五】榷　稅を賦課する。漢書武帝紀の初、榷二酒酤一。【一六】籍沒　財產を官に沒收する、三國魏志の王修傳に、太祖籍二沒審配等家財物貨一、以レ萬數。【一七】破二千家一　賈島の詩に、破二卻千家一爲二一池一、不レ栽二桃李一種二薔薇一。【一八】蟣蝨生二刀鞨一　漢書嚴安傳に、介冑生二蟣蝨一、民無レ所二告愬一。【一九】載二美酒一　漢書揚雄傳贊に、家貧嗜レ酒、時有二好事者一、載二酒肴一從遊學。【二〇】頸猶縮　韓退之の送レ窮文に、竦レ肩縮レ頸。東坡の自註に、俗猶呼二皇后園一、蓋茂貞謂二其妻一也。【二一】休沐　史記に、石建爲二郎中令一、每二五日洗沐一歸謁レ親。漢書張安世の傳に、休沐未二嘗出一。

【題義】東坡は休沐（官吏の暇を得て休息すること）を以て城北の李氏園に游んだ。李氏園は、東坡の自註に、李茂貞園也、今爲二王氏所有一とある。李茂貞は本姓は宋、名は文通、唐の僖宗の世、鳳翔節度使となる。昭宗の世、一時叛いた。唐亡び、梁の太祖卽位するに及び、岐に居る。後唐の莊宗、梁を破りて洛に入るや、上表して臣と稱す。紀昀は此詩を不二惟掃一倒茂貞一、乃幷二園宇一、一齊掃倒、一篇累贅文字、忽然結二歸虛空一、眞爲二超妙之筆一と評して居る。

【詩意】休暇を賜はつて、朝に城北の李氏園に游ぶ。首を回して修竹を見、下には古い朱門の破れ家がある。其の戶を叩くと、幽かな響が空谷に答へる。門內には、珍しいものが多く、應接に暇がない。四方の異花は、目を眩くし、色色の野鳥は耳を喧すしくする。（紀昀いふ、竟以二敍記體一行レ之、樸老無レ敵、而波瀾又極二壯闊一云云と。）其の西は、溪水を引き、水聲活活、東に注いで深林に入る。

林が深くて、窗戸も緑である。時に鵠（白鳥）が、獨林中に立つて居る。又、林中百尺の松は、歳久うして蒼い鱗が生じて居る。これは此地で珍らしいばかりでなく、恐くは關中にも類はなからう。小橋を渡つて南浦を過ぎると、道の兩側に喬木が多い。隱（殷と通ず、盛なる貌）として百雉の都城の如く、挺（拔んづる）として千斛の舟のやうである。（唐の李荃の太白陰經に、船の闊狹長短は、皆、米を以て率となす。一人の重は米二石。）日の光は陰陰、秋の氣は黯黯、東の端に方池を爲つて、野雁に家鶩を雜へて居る。紅梨の合抱もあるに驚き、孤雲が島に映りて馥しい。春光水にただよひ、雪陣も風に散らされる。北は長溪に臨み、波の聲が平陸を卷く。北山は臥して見ることが出來、蒼翠が磽禿（石多き瘠せ地）に間つて居る。我來つて周覽し、一體、此處は誰が築いたかと問ふ、云ふ、昔、李將軍が嶮岨を負んで五代の末世に乘じ、人民より貨財を誅求して、口錢や間架稅を取り立てる。（漢律に據ると、民は年七歳より十五に至る、口錢を出さしむ。唐の德宗に至り、屋間架に稅した。之を間架稅といふ。屋の間架大小を視て、課稅するのである。間は梁と梁との間、架は桁と桁との間をいふ。）まだ羹や粥には、さすがに賦課したり、之を專賣したりなどはしない。當時、亂暴にも民の田地を奪ふ。奪はれて業を失ふも、安んぞ敢て哭しようぞ。（李茂貞が田を奪ひ園を開いたのは唐末の事である。）誰が家の美園囿か、籍沒しても、民の損失を贖ふことは出來ない。此亭は民の千家を破つて造つたもので、城の麓に鬱鬱として立つて居る。かかる横暴を恣にした李將軍も竟に如何、蟣蝨は刀鞲（弓衣）に生じたのである。將軍は嘗て美酒を載せ、此に來りて車を駐め、空しく後世の人をして、其の名を聞いただけでも頸を縮めしめる。我（東坡）は今、役は閑であるから、休暇を賜はつて屢〻來た。人生は居止を營むも、竟に何人の爲にする。何日か當に一身を處辨して、永く清景を尋ねたいものである。

【餘論】李茂貞は嘗て、地狹く賦が薄いといふので、令を下して油を榷（專賣の意）せしめ、城門に松薪を內れることを禁じた。其れは炬となして明を取ることが出來るからであつた。一優者が之を誚つて、臣請弁禁二月明一と言つた所、茂貞は笑つて怒らなかつたといふことである。

秦穆公墓

(一)槖泉在二城東一。
墓在二城中一無二百步一。
乃知昔未レ有二此城一。
秦人以レ泉識二公墓一。
昔公生不レ誅二孟明一。
豈有二死之日而忍一
(四)用二其良一。

秦穆公の墓

槖泉城東に在り、
墓は城中に在つて百步なし。
乃ち知る昔未だ此城あらざるを、
秦人は泉を以て公の墓を識る。
昔公生きて孟明を誅せず、
豈死するの日にして其の良を用ゐるに
忍ぶあらんや。

【字解】【一】秦穆公墓　槖泉宮、新年觀の下に在る。【二】槖泉　城內の東南隅に在り、秦の穆公、宮を上に建つ。【三】不レ誅二孟明一　左傳文公元年に見ゆ。【四】用二其良一　左傳文公六年に、秦伯任好卒、以二子車氏之三子奄息・仲行・鍼虎一爲レ殉、皆、秦之良也。【五】齊之二字從二田横一　前漢書に、高帝詔二田横一來、横乃與二其客二人一乘レ傳詣二雒陽一、自剄、高帝爲レ之流涕、拜二其二客一爲二

乃知三子殉公意。　乃ち知る三子の公に殉するの意、
亦如齊之二子從　亦、齊の二子の田横に從ふが如きを。
田横。
古人感一飯。　古人は一飯に感ずるも、
尚能殺其身。　尚ほ能く其身を殺す。
今人不復見此等。　今人復此等を見ず、
乃以所見疑古人。　乃ち見る所を以て古人を疑ふ。
古人不可望。　古人は望むべからず、
今人益可傷。　今人は益ゝ傷むべし。

都尉、以王者禮、葬横、既葬、客二穿其冢旁、皆自到從之。【六】感一飯、尚能殺其身、靈輒の故事、左傳宣公二年に見ゆ。

【題義】東坡は橐泉の遺址を訪ひ、因りて秦の穆公の墓に至り此詩を作る。内容は詩の秦風黄鳥の篇に本づき、之を翻案して東坡一流の史論をなしたものである。黄鳥の篇は、三良（奄息・仲行・鍼虎）を哀しみ、穆公が人を以て死に從はしめたことを刺つたものである。

【詩意】橐泉は城の東南隅に在る。墓は城中に在つて、墓地は十二畝強。昔は此城もなかつた。秦の人は、泉のある處によつて、公の墓處を識る。昔、穆公の世に在る、殺の役に、孟明視等が敗れて歸ると、秦の大夫及び左右の人は、皆、秦伯に言つて曰く、是の敗や、孟明の罪なり、必ず之を殺せと。秦伯（穆公）曰く、是れ孤の罪なり、孤實に貪り以て夫子に禍す。夫子何の罪あらんと、復、政を爲さしむ。穆公既に生時、孟明を誅するに忍びなかつた。豈、死するの日、子車氏の三子（奄息・仲行・鍼虎）を殉せしむる理あらんや。乃ち知る、三子が公に殉死した意は、恰も齊の二子が田横の死に從つたやうなものであることを。古人は恩義を忘れない。一飯の惠にも尚ほ能く其の身を殺した。（晉の趙宣子が首山に田したとき、翳桑で靈輒といふ餓ゑた人に食を與へたことがある。後、晉侯に攻められたとき、侯の士の内に、戟を倒にして禦いでくれたものがある。之を問うと、翳桑の餓人だと答へて退いた。）今人には此等のことは見られない。乃ち其の心を以て古人を疑ふのはそもそも間違つて居る。古人は望まれない。今人はますます傷むべきである。

【餘論】此の詩の本旨を推すに、東坡は秦の穆公の遺命を罪するを欲しないから、三子が自ら恩に感じて死んだものとする。曰く、孟明を殺さなかつた穆公は三子を殉せしめるに忍びない譯である。田横の客が、其の主の死に從つた心事を察すれば、三良の死も亦必ず自發のものであらうと。秦の穆公が、嘗て羣臣と飲み、酒が酣にして、公曰く、生共二此樂一、死共二此哀一と。奄息・仲行・鍼虎は許諾した。公が薨ずると、皆、從つて死んだといふことである。果して然らば、東坡の詩意は之を翻用したものである。

和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書

子由が子瞻の將に終南太平宮の谿堂に如きて書を讀まんとするを聞くに和す

役名則已勤。殉身則已(一)媮。
名に役せらるれば則ち已に勤め、身に殉すれば則ち已に媮。

我誠愚且拙。身名兩無謀。
我は誠に愚にして且つ拙、身名兩ながら謀るなし。

始者學書判(二)。近亦知問囚。
始は書判を學び、近亦問囚を知る。

但知今當爲。敢問向所由。
但今當に爲すべきを知り、敢て向の由る所を問ふ。

士方其未得。惟以(三)不得憂。
士其の未だ得ざるに方りては、惟得ざるを以て憂ふ。

既得又憂失。此心浩難收。
既に得又失ふを憂ふ、此心は浩として收め難し。

譬如倦行客。中路逢清流。
譬へば倦める行客の如し、中路清流に逢へば、

塵埃雖未脫。暫憩得一漱。
塵埃未だ脫せずと雖も、暫く憩ひて一漱を得。

我欲走南澗。春禽始嚶呦。
我南澗に走らんと欲す、春禽始めて嚶呦。

鞅掌(四)久不決。爾來已徂秋。
鞅掌久しく決せず、爾來已に秋に徂く。

橋山(五)日月迫。府縣煩差抽。
橋山日月迫り、府縣差抽を煩はす。

王事誰敢愬。民勞吏宜差。
王事誰か敢て愬へん、民の勞するは吏宜しく差づべし。

中間罹旱暵。欲學喚(六)雨鳩。
中間旱暵に罹り、雨を喚ぶ鳩を學ばんと欲す。

千夫挽一木。十步八九休。
千夫一木を挽き、十步に八九たび休む。

渭水涸無泥。菑堰旋插修。
渭水は涸れて泥なく、菑堰旋插修。

對之食不飽。餘事更遑求。
之に對して食飽かざれば、餘事更に求むるに遑あらんや。

近日秋雨足。公餘試新篘。
近日秋雨足り、公餘新篘を試む。

劬勞(七)幸已過。朽鈍不任鎪(八)。
劬勞幸に已に過ぐ、朽鈍鎪に任へず。

秋風迫吹帽。西阜可縱游。
秋風迫つて帽を吹く、西阜縱游すべし。

聊爲一日樂。慰此百年憂。
聊か一日の樂みを爲し、此の百年の愁へを慰む。

【字解】【一】谿堂讀書　太平宮の道藏の書を讀むをいふ。道藏とは、道家諸書の彙刻をいふ【二】媮　苟且。偸に通ず。【三】書判　唐の世、人を取るに、身・言・書・判の四事を以てす。唐書の選擧志に、凡擇人之法有四、一曰身、言ニ體貌豐偉一、二曰言、言ニ言辭辯正一、三曰書、言ニ楷法遒美一、四曰判、言ニ文理優長一、四事、皆可レ取。【四】以レ不レ得憂　論語、陽貨篇に、未レ得レ之、患レ得レ之、既得レ之、患レ失レ之。【五】鞅掌　詩の小雅北山篇に、王事鞅掌。嵇康の與ニ山巨源一書に、心不レ耐レ煩、而官事鞅掌。【六】橋山　史記に黃帝崩、葬ニ橋山一。今の寧州眞寧縣に在る。【七】日月迫　一本に迫を追に作る。【八】喚レ雨鳩　續博物志に、葬鳩鳴卽小雨。【九】菑堰旋插修　前漢書の溝洫志に、武帝歌曰く、隤林竹兮揵石菑と。揵は水決の口を塞ぐ處に竹を樹て、其の中に草と木とを塡めたもの。石菑は石を立て、土を塡塞する。【一〇】新篘　篘は酒篘（酒を漉す具。）【一一】劬勞　骨折りてつかる、詩、小雅に哀哀父母、生レ我劬勞。【一二】鎪　鋤をいふ、史、河渠書に、擧レ鍤如レ雲、決レ渠爲レ雨。

【題義】此詩は、仁宗の嘉祐八年（皇紀一七二三年、西暦一〇六三年）の九月、東坡が終南太平宮の齋堂に赴き、道家の諸書を讀まうとした時、子由が詩を寄せられたから、之に和したのである。秋風迫吹レ帽の句がある所からいふと、九月の初に作つたものであらう。太平宮は、上清太平宮のことで、太宗の時に出來たものである。上清といふは、道家三清の一である。上清の天は、絕霞の外に在つて、八皇老君が九天の仙を運して上清の宮に處ると、かやうに道家では說いて居る。

【詩意】名に使はれると、骨が折れるし、身に殉へば苟安に流れる。我は愚であり拙であつて、身も名も兩つながら謀らない。始は楷法と文理とを學び、（唐の制に、書判拔萃科あり）近頃は亦、問囚（訊罪を問といふ）を知る。今當に爲すべきを知り、敢て先例の由る所の道を問ふ。（以上四句は、陳公弼在二內簽判一語斷不レ是、宋子才任二內簽判一語熟讀、との評があるから、故に東坡に此の言がある。按ずるに、宋に簽書判官廳公事あり、是を幕職となし、簽判と簡稱す。其の衙署之を簽廳といふ。簽廳は文書を掌る官である。）凡そ士は、其の未だ地位を得ない時分は、たゞ之を得ないことを憂へ、既に得ると、また之を失ふを憂へる。（陳公弼は實に舉劾の事があつたから、憂レ得憂レ失は、泛言ではない。）我が心は水の浩然たるが如くで收め難い。譬へば倦める旅人が途中で淸流に逢ふやうなものである。塵埃は脫れないが、暫く憩ひて一たび漱ぐことを得るのである。（此に至つて、直に得失を憂ふることを以て戲事となす。）我は南澗（谷川）に行かうとする。それは春禽が始めて相和して鳴いた時であつた。併し王事忙しくて久しく決するなく、爾來已に秋となつた。橋山の事も日月迫り、（黃帝は崩じて橋山に葬る。嘉祐八年三月に、仁宗は上仙され、十月に永昭陵に葬る。）秋に方り、府縣は山陵の事で忙はしく、差抽を煩はす。（宋の官制によると、凡授二正官一者、皆屬二虛名一、實不レ任レ事、其內外政務、皆別立二名稱一、以二他官一主レ之、謂二之差遣一。）王事であれば、誰か敢て其の苦を愬へん。併し民をして徒に勞せしめるは、吏たるものの宜しく羞づべきである。既にして旱暵となつたので雨乞をしようとした。（山陵に鞅掌する時、又、雨を禱るを以て磻溪に至る）千夫で一木を挽き、十步に八九たび休む。其の勞苦思ふべし。其の木は決水の口を塞ぐが爲めである。渭水は涸れて泥がなく、堰に挿し入れる木石も、やや長いのを要する。之に對すると食することも十分に出來ない。（木を挽くは、東坡の專職であるから、之に對して食飽かないのである。）此の外の事は、更に求むるに遑がない。近日、秋雨も十分あつて、公事の餘暇に、新酒を釀さうと思ふ。骨折も一段落つき、朽鈍の我は畚鍤の事に任へない。秋風が帽を吹き、西阜は縱遊するによい。聊か一日の樂をなして、此の百年の愁を慰めよう。

將往終南和子由見寄

將レ往二終南一和二子由見寄一

人生百年寄二鬢鬚一。　人生百年鬢鬚に寄す、
富貴何啻(一)葭中莩　富貴は何ぞ啻に葭中の莩のみならん。
惟將二翰墨一留二染濡一。　惟翰墨を將て染濡を留む、

【字解】【一】葭中莩　莩の中にある薄い膜、葭は葦の未だ秀でないもの、莩は葦の莖の中にある白い薄皮。漢書、中山靖王傳に、今羣臣非レ

絶勝醉倒蛾眉扶。
我今廢學如寒竽。
久不吹之澀欲無。
歳云暮矣嗟幾餘。
欲往南溪侶禽魚。
秋風吹雨涼生膚。
夜長耿耿添漏壺。
窮年弄筆衫袖烏
古人有之我願如。
終朝危坐學僧趺。
閉門不出間履鳧。
下視官爵如泥淤。
嗟我何爲久踟躕。
歳月豈肯與汝居。

絶だ勝る醉倒して蛾眉に扶けらるるに。
我今學を廢す寒竽の如し、「一ん」と欲す。
久うして之を吹かざれば澀りて無ら「
歳云に暮れぬ、嗟幾くか餘す、
南溪に往いて禽魚を侶とせんと欲す。
秋風雨を吹いて涼膚に生ず、
夜長くして耿耿として漏壺に添ふ。
窮年筆を弄びて衫袖烏なり、
古人之あり我願ひも如し。
終朝危坐して僧趺を學ぶ、
門を閉ぢて出でず履鳧を問ふ。
官爵を下視することを泥淤の如し、
嗟我何爲れぞ久しく踟躕する。
歳月は豈肯て汝と居らん、

有二葭莩之親、鴻毛之重一。【二】 染濡　李義山の詩に、濡二染大筆一何淋漓。【三】 蛾眉　美人の眉、詩の衛風碩人篇に、螓首蛾眉。【四】 廢學　禮記の學記に、燕辟廢二其學一、燕辟は燕私の俗法をいふ。【五】 如二寒竽一云云　竽は笛の類、古は三十六管、後世は十九管。管の排列は參差として鳥の翼にかたどる。韓非子、内儲說上篇に、齊宣王使二人吹レ竽、必三百人、南郭處士請二爲レ王吹レ竽、宣王說レ之、廩食以二數百人一、宣王死、湣王立、好二一一聽レ之、處士逃。【六】 歳云暮矣　詩の唐風、蟋蟀篇に、蟋蟀在レ堂、歳聿其莫、今我不レ樂、日月其除。【七】 耿耿　心安からざる貌、詩の衛風に耿耿不レ寐。【八】 漏壺　水時計、漏刻ともいふ。古、時を測る器、蓋に孔があつて、箭を挿む、漏箭といふ。箭の幹に四十八の

僕夫起餐秣吾駒。

僕夫は起ちて餐し吾が駒に秣ふ。

み見はる。一晝夜四十刻、一時を四刻とす。【九】 窮年　已の一生、荀子榮辱篇に、人欲二夫餘財蓄積之富一也、然而窮年累世、不レ知レ足。【一〇】 衫袖烏　趙壹非が草書歌に、十日一筆、月數凡疊、領袖如レ皁、脣齒皆黑。【一一】 危坐學二僧趺一　危坐は端坐に同じ、危は高い義で、正しく坐われば高くなる。趺は趺坐、足をくみて坐する。南史劉穆之の傳に、終日斂レ膝危坐。【一二】 履鳧　白居易の詩に、尙書履曳レ鳧。【一三】 泥淤　どろ、白樂天の詩に、人間榮與レ利、擺落如二泥塗一、擺落ば、ばらひ除く。【一四】 踟躕　行いて進まざる貌、詩の邶風に、搔レ首踟躕。【一五】 秣二吾駒一　韓退之が文に、膏二吾車一兮秣二吾馬一。

【題義】 東坡、將に終南に往かんとし、子由の寄せられしに和したものは、磎谿禱レ雨の詩、讀二道藏一の詩等がある。何れも前の谿堂讀書の詩と同趣のものである。紀昀は此詩を評して意不二必新一、而語特遒健、と言つて居る。

【詩意】 人生百年、鬢鬚に寄せて居る。思へば果敢無いもので、富貴は葭の中の莩にも當らない。筆墨を弄して日を消するは、醉倒して婦人に扶けられるよりも、餘程勝つて居る。我今學を廢する、南郭處士の竽の如く、實力がないから、久しく吹かないと、澀りて全く無くなつてしまふであらう。歳はここに暮れた。ああ幾日もない。南溪に往いて禽や魚を伴として樂まうよ。秋風は吹いて涼しい、夜長くして耿耿として寐られない。漏刻に添うて夜の明けるを待つ。一生涯、筆を弄して、衫も袖も烏のやうになる。これは古人にもあるが、我が願も同じである。終朝端坐して僧侶の趺坐を學び、門を閉ぢて出でず、履は鳧を曳く、官爵を視る泥淤の如し。ああ我はなんで久しく踟躕する。歳月は人を

刻あり。（漏刻）他壺より水漏り滴りて入り、水の溜るに隨ひ、箭上りて刻

待たない、豈汝と居らんや。されば、僕夫は起ちて食事し、我が馬に秣かひて出立の用意をする。

讀道藏

嗟余亦何幸。偶此琳宮居。
宮中復何有。戢戢千函書。
盛以丹錦囊。冒以青霞裾。
王喬掌關籥。蚩尤守其廬。
乘閒竊掀攪。涉獵豈暇徐。
至人悟一言。道集由中虛。
心閒反自照。皎皎如芙蕖。
千歲厭世去。此言乃籧篨。
人皆忽其身。治之用土苴。
何暇及天下。幽憂吾未除。

道藏を讀む

嗟余亦何の幸か、偶〻此の琳宮の居。
宮中復何かある、戢戢千函の書。
盛るに丹錦囊を以てし、冒すに青霞裾を以てす。
王喬關籥を掌り、蚩尤其の廬を守る、
閒に乘じて竊に掀攪、涉獵豈徐ろにするに暇あらんや。
至人は一言を悟り、道の集るは中虛に由る。
心閒なれば反つて自ら照す、皎皎として芙蕖の如し。
千歲世を厭ひて去らば、此言は乃ち籧篨。
人は皆其身を忽にす、之を治むるに土苴を用ふ。
何の暇あつて天下に及ばん、幽憂吾未だ除かず。

【字解】【一】道藏　前に出づ、卽ち道家諸書の彙刻である。因にいふ、明に正統と萬曆との二刻がある。共に收める所に古子書が多い。故に明代に刻すと雖も實は宋に根源する。【二】琳宮　寺をいふ、唐の殷堯藩の詩に、落日半樓明、琳宮事事淸。【三】戢戢　聚まる、韓退之が崔立之に贈る詩に、戢戢已多如東筍。【四】丹錦囊　漢武內傳に、帝、西王母に見ゆ。巾器中に一卷の小黃書あり、盛るに紫錦の囊を以てす云云。【五】青霞裾　何讓之が光武の陵に遊んだとき、一翁の南望して吟ずるを見る。讓之、執へんとすれば、躍つて邱中に入る。一狐の跳ね出づるを見、几案の上に、一帖紙に、何以蔽踝霞袂雲袖と書いてあつた。【六】王喬　王子喬は周靈王の太子晉である。好んで笙を吹き、鳳凰鳴を作し、伊洛の間に遊ぶ。後、白鶴に乘じて去る。【七】蚩尤　神の名、史記に黃帝與蚩尤戰於涿鹿之野。【八】乘閒掀攪　前漢書趙充國の傳に、得乘閒之勢。陸龜蒙の詩に、慣曾掀攪大筆多。【九】涉獵　博覽して專精ならざるをいふ、涉獵書記、不能爲醇儒。【一〇】由中虛　莊子の人間世に、惟道集虛。虛者心齋也。【一一】如芙蕖　道家の存想法、當想心如未開蓮花。【一二】千歲厭世　堯の時、華の封人曰く、千歲厭世、去而上僊。【一三】籧篨　粗竹席をいふ、晉書に、皇甫謐自爲葬送之制、氣絕之後、以籧篨裹尸、不用棺槨。【一四】土苴　糞草、莊子の讓王篇に、其土苴以治天下。【一五】幽憂　莊子讓王篇に、堯以天下讓子州支父（姓は子、名は州、字は支父）、子州支父曰、我適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也。

【題義】終南縣にある上淸太平宮には、道家諸書の彙刻がある。其の道藏は、先朝の賜ふ所の書である。東坡が道家の諸書を流覽しての感想である。紀昀此詩を評して、作道家詩、不可有章咒氣、此固未免於章咒と言つた。

【詩意】余は偶然にも此の琳宮に居ることの出來たのは、何たる幸ぞ。琳宮の中には何があるかといへば、戢戢として千函の書がある。（函は文匱）何れも丹錦囊に入れ、青霞裾を覆うてある。仙人王子喬が關籥（關鑰に同じ、くわんぬき、ぢやう。）を掌り、蚩尤が其の廬を守つて居る。（といふのは、道藏中には、蚩尤守禦の狀を畫いたものが多いからである。）閒に乘じて竊に之を擧げ亂して見る、見るべきものが多いから、流覽して徐ろにすることが出來ない。眞人は一言を悟る、卽ち至道は中虛にあ

る。心が間であれば、心を失はないで、自らを照す、其の潔白であることは、蓮花のやうである。千歳世を厭ひて去らば、此の言は乃ち敝れた竹器同様である。人は皆、其の身を忽にして、之を治めるに土苴(肥料にするあくた)を用ゐる。何ぞ天下に及ぶ暇があらうぞ。子州支父の言葉を借りると、我はたまたま幽憂の病がある。方に且つ之を治めるので、未だ天下を治める暇がない。

眞興寺閣禱雨

眞興寺閣に雨を禱る

太守親從千騎禱。
神翁遠借一杯清。
雲陰黯黯將嘘遍。
雨意昏昏欲醞成。
已覺微風吹袂冷。
不堪殘日傍山明。
今年秋熟君知否。
應向江南飽食粳。

太守親ら千騎を從へて禱る、
神翁遠く借す一杯の清きを。
雲陰黯黯將に嘘遍ならんとす、
雨意昏昏醞成せんと欲す。
已に覺ゆ微風の袂を吹いて冷なるを、
殘日の山に傍うて明なるに堪へず。
今年の秋熟君知るや否や、
應に江南に向つて粳を飽食すべし。

【題義】仁宗の嘉祐七年三月十九日、久しく雨ふらず、東坡は太守宋選に從つて眞興寺閣に雨を禱つて作つたのが此詩である。

【詩意】太守宋選が千騎を從へ、内に省みて己を責め、民の爲に福を祈る。太白山神は遠く一杯の清水を借してくれた。(時に往いて湫水を取る、故にいふ)吾は雨を郊外に待つ。百姓奔つて赴くもの數千人。水は未だ至らないが、油雲蔚興、天日慘變、併し雨はまだ下らない。微風は袂を吹いて冷かに、殘日は山に傍うて明かである。今年の秋の收穫は、君知るや否や。應に江南に向つて粳を十分に食べるであらう。

【字解】【一】神翁　太白山の神。【二】嘘遍　雲が吐き出でて一杯になる。【三】醞成　酒を釀す。【四】飽食　飽ぼ腹一杯に食ふ義、孟子滕文公上に、飽食暖衣。【五】粳　秔に同じ、稻の黏らざるもの。

七月二十四日。以久不雨。出禱磻溪。是日宿虢縣。二十五日晩。自虢縣渡渭。宿於僧舍曾閣。閣故曾氏所建也。夜久不寐。見壁間。有前縣令趙薦留名。有懷其人。

七月二十四日、久しく雨ふらざるを以て、出でて磻溪に禱る、是日虢縣に宿す、二十五日晩、虢縣より渭を渡り、僧舍の曾閣に宿す、閣は故曾氏の建つる所なり、夜久うして寐ねられず、壁間を見るに、前の縣令趙薦名を留むるあり、其の人を懷ふあり

龕燈明滅欲三更。

龕燈明滅して三更ならんと欲す、

【字解】【一】禱磻溪　磻溪神

欹枕無人夢自驚。　枕を欹てて人なきも夢自ら驚く。
深谷留風終夜響。　深谷風を留めて終夜響き、
亂山銜月半牀明。　亂山月を銜んで半牀明かなり。
故人漸遠無消息。　故人漸く遠くして消息なく、
古寺空來看姓名。　古寺空しく來つて姓名を看る。
欲向磻溪問姜叟。　磻溪に向つて姜叟に問はんと欲すれば
僕夫屢報斗杓傾。　僕夫屢〻報ず斗杓傾くと。

【題義】七月旱が甚しいので、太白山に禱つたが、驗がない。出でて磻溪に禱る。磻溪求雨の諸詩は、嘉祐八年の作である。

【詩意】寺塔の燈も明滅して、夜も三更ならんとする。枕を欹て人も居らなくても、夢自ら驚く。深谷の風は終夜聞え、亂山の月は半牀に入つて明かである。(寫景が神に入る。)故人と離れて漸く遠く、音信もない。古寺に來つて、空しく趙蕎其人の姓名を看る。磻溪に向つて、姜叟(太公望)の古を問はんとする。僕夫はしばしば斗杓の傾けるのを報告する。(一體、祭禱は必ず黎明にする。又、必ず五更に於てする。故に夜が久しくて寐られない。起つて閒行して始めて前縣令趙蕎の題壁を見て詩を作つた譯である。それでも猶ほ五更には間がある。因つて屢〻僕夫に時を問ふ。山中には漏刻はないい、ただ空を仰ぎ斗杓の在る所を見て驗とするのである。)

【餘論】紀昀は此詩を評して、後四句自不二相貫一、問二姜叟一雖レ切、磻溪却與二禱雨一無レ涉、東坡詩往往有下疎二於律一處上、不レ得二概效一之と言つて居る。然るに王文誥は之を駁して、曉嵐(紀昀)不レ讀二全集一、故有下疏二於律法一之譏上、既欲二評論一、何以不レ讀二全集一也、と言つて居る。

二十六日五更起行至磻溪天未明

二十六日、五更起つて行き磻溪に至る、天未だ明けず

夜入二磻溪一如レ入レ峽。　夜磻溪に入る峽に入るが如し、
照レ山炬火落驚猿。　山を照す炬火驚猿を落す。
山頭孤月耿猶在。　山頭の孤月耿として猶ほ在り、
石上寒波曉更喧。　石上の寒波曉更に喧なり。
至人舊隱白雲合。　至人の舊隱白雲合し、
神物已化遺蹤蹠。　神物已に化して遺蹤蹠たり。

【字解】【一】五更　午前四時、前詩の註に出づ。【二】炬火　松明。史記の田單傳に、牛尾炬火。後漢書の任光傳に、各持二炬火一。【三】至人舊隱　太公の舊跡をいふ。【四】霹靂　急激に鳴る雷、韓愈の文に、雷霆霹靂。【五】天瓢　韓退之の詩に、擧レ瓢酌二天漿一。李靖微なる時、は、卽ち太公望。【一】虢縣　今の陝西寶雞縣虢城。【三】龕燈　寺塔の燈、溫庭筠の詩に、龕燈落葉寺。【四】三更　夜半十二時。更は夜間の時刻のかばりめ、一夜を五更に分つ。初更は、今の午後八時、二更は十時、三更は十二時、四更は午前二時、五更は四時。【五】欹レ枕無レ人夢自驚　煙花錄に、陳後主の詩を載せていふ、午醉醒來晚、無人夢自驚

【七】斗杓　史記の天官書に、攝提者、直二斗杓

安得夢隨霹靂駕。　安んぞ夢に霹靂に隨つて駕し、
馬上傾倒天瓢翻。　馬上傾倒して天瓢翻へるを得む。

龍女、二子俱に出たり、天命じて雨を行らしむ、一行を煩はさんと欲すと、乃ち一小瓶子を出す。

【題義】此詩は嘉祐八年、東坡が鳳翔に在つて作つたもの。七月二十六日、五鼓、馳せて磻谿に赴き、禱レ雨文を宣した。（本集に磻谿禱レ雨の祝文が載つて居る。）其の時に幷せ記したものが此詩である。

【詩意】夜、磻谿に入る、峽中に入つたやうである。山を照す松明の火は、猿を驚倒せしめる。山頭の月は明かに、石上を打つ波は喧し。太公望の舊跡も白雲に鎖され、神物は已に化して、遺蹤が蜿る。（蜿は足の屈する意。）どうか、夢に雷霆の霹靂に駕し、馬上天瓢を傾倒して沛然たらしめたいものである。

【餘論】酉陽雜俎（唐の段成式撰）に、李鄘在二北都介休縣一、百姓送二解牒一、夜止二晉祠宇下一、夜半有レ人叩レ門云、介休王暫借二霹靂車一至二介休一收レ麥、良久數人共持二一物一如レ幢、上綴二旂旛一凡八十葉、有レ光如レ電以授レ之、次日介休大雷雨、損レ麥千餘頃。

嘗て夜、一巨宅に投宿す。老嬭あり、之を延く。中夜、門を叩くこと甚だ急なり。嬭、色を變じて曰く、吾は

是日自二磻溪一將往二陽平一憩二於麻田青峰寺之下一院翠麓亭一

是日磻溪より將に陽平に往かんとし、麻田青峰寺の下院翠麓亭に憩ふ

不レ到峰前寺。空來渭上村。
此亭聊可レ喜。修徑豈辭レ捫。
谷映二朱欄一秀。山含二古木一尊。
路窮驚二石斷一。林缺見二河奔一。
馬困嘶二青草一。僧留薦二晚飧一。
我來秋日午。旱久石牀溫。
安得二雲如蓋一。能令二雨瀉盆一。
共看山下稻。涼葉晚翻翻。

【字解】【一】陽平　九域志に、虢縣有二陽平鎭一。【二】翠麓亭　岐山縣志に、亭在二縣東南一百八十里、青峰禪寺之下一。【三】石牀　南史、宋の武帝紀に、帝素有二熱病一、坐臥常須二冷物一、後有レ人獻二石牀一、寢レ之、極以爲レ佳、乃嘆曰、木牀且貸、而況石耶、卽令レ毀レ之。【四】雲如レ蓋　孔範の白雲抱二幽石一詩に、白雲浮二遠蓋一、飄飄遶レ石飛。董思恭の詠レ雲詩に、帝鄉白雲起、飛蓋上二天衢一。

【題義】是日といふは七月二十六日、磻谿から陽平鎭に往いて、麻田青峰寺の翠麓亭に憩ふ。蜀鑑（宋の郭允蹈撰す）に據ると、褒谷の西北に、古陽平關がある。其の地は、梁州褒城縣の西北にある。翠麓亭に憩うた時の口占である。

【詩意】峰前の寺に到ることが出來ないで、空しく渭水の上の村に來つた。此の翠亭は、風光喜ぶべ

く、長い徑は、捫（さぐる）するに宜しい。谷は朱塗の欄干に映つて秀で、山は古木を含んで尊い。（王文誥曰く、此尊字押得玲瓏剔透、惟久二於山行一者知レ之、若僅以二厚重一論、則失二之淺一矣。）路の窮まる所に斷巖がある。森の缺けて居る所は奔河である。馬も困しく、青草を望んで嘶き、寺僧は留めて晩飧を薦める。我の來たのは、丁度、秋日の午の刻であつた。何分、旱が久しかつたので、石の寢臺も溫かであつた。どうか、天を蓋ふばかりの雲を得て、能く白雨をして盈を瀉ぐやうにあらしめ、共に山下の稻の涼しい葉が夕暮に翻翻たるを看たいものである。

二十七日。自二陽平一至二斜谷一。宿二於南山中蟠龍寺一[一]

二十七日、陽平より斜谷に至り、南山中蟠龍寺に宿す

横レ槎晚渡碧澗口。
騎レ馬夜入二南山谷一。
谷中暗水響瀧瀧。
嶺上疎星明煜煜[三]。
寺藏二巖底一千萬仞。
路轉二山腰一三百曲。

槎を横へ晚に碧澗口を渡り、
馬に騎つて夜南山の谷に入る。
谷中の暗水響瀧瀧、
嶺上の疎星明煜煜。
寺は巖底に藏れて千萬仞、
路は山腰に轉じて三百曲。

【字解】【一】蟠龍寺　鳳翔府志に、蟠龍寺在二郿縣西南三十里一。元和郡縣志に、郿縣亦曰二斜城一、城南當二斜谷一、因爲二斜口一。【二】横レ槎　韋應物の詩に、楡柳飄二枯葉一、風雨倒二横槎一。謝靈運の詩に、銅陵映二碧澗一。【三】煜煜　光がかがやく、梁簡文帝の詠二朝日一詩に、煜煜上二層峰一。

風生饑虎嘯二空林一。
月黑驚麏竄二修竹一。
入レ門突兀見二深殿一。
照レ佛青熒有二殘燭一。
愧無二酒食待二遊人一。
旋斫二杉松一煮二溪蕨一。
板閣獨眠驚二旅枕一。
木魚曉動隨二僧粥一。
起觀萬瓦鬱參差。
目亂千巖散二紅綠一。
門前商賈負二椒荈一。
山後咫尺連二巴蜀一。
何時歸耕江上田。
一夜心逐南飛鵠。

風生じて饑虎空林に嘯き、
月黑うして驚麏修竹に竄る。
門に入つて突兀として深殿を見、
佛を照して青熒殘燭あり。
愧くは酒食の游人を待するなきを、
旋く杉松を斫つて溪蕨を煮む。
板閣獨眠つて旅枕驚き、
木魚曉に動いて僧粥に隨ふ。
起つて觀れば萬瓦鬱として參差、
目亂れて千巖紅綠を散ず。
門前の商賈椒荈を負ひ、
山後は咫尺にして巴蜀に連る。
何れの時か歸耕せん江上の田に、
一夜心は逐ふ南飛の鵠。

【四】突兀　高くぬきんでて立つ、杜子美の詩に、夜深殿突兀、風動金琅璫。【五】青熒　東坡の文に、燈火青熒。【六】板閣　太平寰宇記に、斜谷有二橋閣一二千九百八十九間、板閣二千九百九十二間一。【七】木魚　朱熹の詩に、粥飯何時共二木魚一。一に魚梆ともいふ。【八】萬瓦　虞世南の詩に、萬瓦霄光曙。【九】參差　長短の齊しからざる貌、劉孝綽の詩に、城寺鬱參差。【一〇】椒荈　椒は山椒、荈は晚く取つた茶。

【題義】七月二十七日、陽平鎮より斜口に入り、南山蟠龍寺に宿した時の作である。斜口は、長安志に、褒斜谷長一百七十里、南口曰レ褒、北口曰レ斜、とある。

【詩意】槎を横へて、晩に碧澗口を渡り、それから馬に騎り、南山の谷に入つたのは夜であつた。谷中は暗くて水の色も分らないが、響が瀧瀧（水の音）と聞える。嶺上の疎星もかがやいて居る。寺は千萬仞の巖底に藏れて居り、路は山腰を數へきれない程も轉じて居る。風生じて虎嘯き、月が暗いので麞（鹿の屬）も驚いて修竹に竄れる。殘燭は佛を照して靑熒。（燈火の靑く光る。）寺僧はいふ、愧らくは游人を接待する酒食がない。（寺僧の致詞を述べる）それで、しばらくの間、杉松を燒いて溪蕨（蕨は野菜類）を煮よう。（寺僧の客に供するを敍す）斜谷の板閣に獨眠つて旅枕驚き、木魚曉に動いて粥飯に就く。（以上、日暮より寫して黎明に至る）起つて萬瓦を觀れば鬱として參差。はじめ、寺に來たときは深黑、何も見えなかつた。夜が明けて一切皆見はる。ただ早起したばかりで、目は之が爲に眩す。千巖の綠なるは是れ南山、紅なるは是れ蟠龍寺、目亂れ散ずる是れ曉色である。門前の商賈は、椒莽を負ふ。山の後は咫尺にして巴蜀に連る。歸つて江上の田を耕すは何れの時か、一夜、心は南に飛ぶ鵠を逐うて、懷郷の念に堪へない。

(一)是日至下馬磧。憩於北山僧舍。有閣曰(二)懷賢。南直斜谷。西臨(三)五丈原。諸葛孔明所從出師也。

是の日下馬磧に至り、北山の僧舍に憩ふ、閣あり懷賢といふ、南は斜谷に直り、西は五丈原に臨む、諸葛孔明の從りて師を出ししし所なり

南望斜谷口。三山如犬牙。(四)
西觀五丈原。鬱屈如長蛇。(五)
有懷諸葛公。萬騎出漢巴。(六)
吏士寂如水。蕭蕭聞馬檛。(七)
公才與曹丕。豈止十倍加。
顧瞻三輔間。勢若風捲沙。(八)
一朝長星墜。竟使蜀婦髽。(九)
山僧豈知此。一室老煙霞。(一〇)
往事逐雲散。故山依渭斜。(一一)
客來空弔古。清淚落悲笳。(一二)

【字解】(一)是日　嘉祐八年七月二十七日。（東坡の二十七歲の時。）(二)懷賢閣　孔明を懷ふ意を寄せたもの。(三)五丈原　諸葛孔明が兵を屯した處、元和郡縣志に、五丈原在二郿縣西南二十五里一。(四)如犬牙　漢書文帝紀に、高帝王二子弟一、地犬牙相制。地形が犬の牙の入り交はる如きをいふ。(五)鬱屈　鬱紆といふに同じ、山阪などの曲りくねる貌。(六)漢巴　漢中と巴蜀、卽ち

蜀の國。【七】蕭蕭　讙譁ならざるをいふ、詩に蕭蕭馬鳴。東坡の詩は此意を用ふ。【八】風捲レ沙　李太白の詩に、颯颯風捲レ沙。【九】一朝長星墜　孔明の死をいふ。蜀志に建興十二年八月、亮卒二於軍一、時年五十四、名勝志に、五丈原西有二落星村一。【一〇】蠶婦人の喪中に結ぶ髻、儀禮の士喪禮に、婦人蠶二於室一。【一一】故山依レ渭斜　渭水は武功縣の北を行く。【一二】悲笳　笳は胡人が蘆の葉を吹いて、聲をなすもの、其の聲は甚だ悲しいから悲笳といふ。杜子美の詩に、客淚墮二悲笳一。魏文帝與二吳質一書に、清風夜起、悲笳微吹。

【題義】嘉祐八年七月二十七日、東坡は斜谷から下馬磧に至り、北山の僧舍に憩ふ。懷賢閣上、孔明の古を懷うて作つたのが此詩である。蜀志に、建興十二年、諸葛亮は大衆を悉くし、斜谷より出で、武功の五丈原に據り、魏の司馬仲達と渭南に對壘し、民を分つて屯田し、久駐の基を爲したことが見えて居る。

【詩意】此の懷賢閣から、南方の斜谷口を望むと、三山連接して、犬の牙の入り交はるがやうである。又、西の方を觀ると、これは山に據り、岡に憑り、鬱屈と曲りくねつて長蛇の蟠まれるやうである。（以上の四句は、句を隔てて對せるもの、之を扇對法といふ。）諸葛公が萬騎、蜀の國を出たことを懷ふのである。公の軍律は嚴肅であるから、吏士は寂然として水の如く、軍中はただ馬鞭（櫆は鞭）の蕭蕭たる聲を聞くのみ。（聞二馬櫆一の句は、枚を銜んで疾走し、號令を聞かざる景狀。）蜀志、諸葛亮の傳に、先主が病篤くなつたとき、亮を召し、君が才は曹丕に十倍す、必ず能く國家を安んじ、大事を定めんと。諸葛公が大軍を帥ゐて、三輔（京兆・扶風・馮翊）の間に打ち出た時の勢は、恰も風が沙を卷く如くであつた。然るに一朝、赤くて芒角のある星が東北より西南に流れ、亮の營に投ず、俄にして亮は卒した。（年五十四）遂に蜀の婦人をして麻を以て髮を約せしむ。（蜀人の喪に服するをいふ）一體、婦人が弔するとき髽するは禮である。其の起りをいふと、昔、魯の臧紇が狐駘（山の名）に敗れたとき、國人の喪を逆へるもの、皆髽したといふことである。孔明が卒しただけで、蜀兵が皆死んだのではないが、孔明の死によつて、蜀の敗亡を致さうとするから、蜀の士卒の妻は、皆其の夫の喪に服して髽したのであらう。併し、北山僧舍の山僧等は、孔明が出處進退の卓絶なることを知らないで、ただ坐禪などして、煙霞の裏に老い果ててしまふ。（山僧豈知レ此は、懷賢を翻し出す。知の字は卽ち懷、此の字は卽ち賢。そして、次の句の一室は閣の字を點する）昔の事は、雲煙を逐ひて散じてしまひ、何も遺つたものはないが、ただ故山（東坡は蜀人）卽ち蜀の山は渭水に依つて斜に流れて居る。（これだけは昔と變らないと言つて、孔明の故事を想ひ、幷せて故鄉のことを憶ふ。）客（東坡自らいふ、山僧に對せる辭）卽ち吾は今、此處に來つて、空しく古を弔するも、かかる先賢の舊跡であるから、涙を洒ぐに足る。まして此の悲笳の聲を聞いては其の悲しみはいかばかりであらうぞ。

攄雲篇（一）

攄雲篇

余自二城中一還二道中一。雲氣自二山中一來。如二羣馬奔突一。以レ手掇。開レ籠收二其中一。歸レ家。雲盈籠。開而放レ之。作二攄雲篇一。

【訓讀】余城中より道中へ還る、雲氣山中より來る、羣馬の奔突するが如し、手を以て掇り、籠を開

いて其中に收む、家に歸れば、雲籠に盈つ、開いて之を放ち、攓雲篇を作る。

【字解】【一】攓雲　攓は拔き取ること、莊子の至樂篇に、搴レ蓬而指レ之。搴は攓と同じ。揚子方言に、攓、取也。

物役會有レ時。星言從二高駕一。　物に役せらるる會ず時あり、星みて言に高駕に從ふ。
道逢二南山雲一。欻吸如二電過一。　道に南山の雲に逢ふ、欻吸電の過ぐるが如し。
竟誰使二令之一。袞袞從レ空下。　竟に誰か之を使令する、袞袞として空より下る。
龍移相排摎。鳳舞或頽亞。　龍移りて相排摎し、鳳舞ひて或は頽亞。
散爲二東郊霧一。凍作二枯樹稼一。　散りて東郊の霧となり、凍りて枯樹の稼となる。
或飛入二吾車一。偪仄礙二肘胯一。　或は飛んで吾が車に入り、偪仄として肘胯を礙ぐ。
摶取置二笥中一。提攜返二茅舍一。　摶取して笥中に置き、提攜して茅舍に返る。
開レ緘乃放レ之。掣去仍變化。　緘を開いて乃ち之を放つ、掣去し仍て變化す。
雲兮汝歸レ山。無レ使二達官怕一。　雲よ汝は山に歸れ、達官をして怕れしむるなかれ。

【字解】【一】星言從二高駕一　詩鄘風に、星言夙駕、說二子桑田一。王僧達の詩に、君子聳二高駕一。【二】道逢二南山雲一　禮記に、天降二時雨一、山川出レ雲。【三】欻吸　風雲などの吹き過ぐる貌。謝朓の高松賦に、卷二風飈之欻吸一。【四】排摎　密摎をいふ、韓退之の雪の詩に、崩騰相排摎、龍鳳交橫飛。【五】爲二東郊霧一　後漢書に、河南張楷字公超、能作二五里霧一、時關西人裴優亦能作二三里霧一。【六】樹稼　木介とも、樹稼ともいふ。春秋成公十六年、雨木冰。雨ふりて木に冰りつく。【七】偪仄　偪側といふに同じ、相迫る意、杜子美の詩に偪仄行あり。【八】茅舍　かや葺きの家、蜀志の秦宓傳に、稱レ疾在二茅舍一。【九】開レ緘　謝惠連の詩に、幽緘待二君開一。【一〇】達官　顯達せる官、顯官といふに同じ。北齊書に、此是最大達官。

【題義】此詩は東坡が太守宋選と雨乞ひして、湫水を迎へた時の作である。東坡は百姓數千人と郊外に待ち、因つて眞興寺閣に禱つて城に入る。是に至つて禱が畢り、又、城を出づ。故に自二城中一還二道中一と言つたのである。

【詩意】物に役せられるは、何時でもよいといふ譯にはゆかない、必ず其の時がある。朝早く星を見て、車を駕し、途中で南山の雲に逢ひ、吹き行くことの疾き、電の過ぐるがやうである。誰か之を使令する。袞袞として空より下る。龍が移つて密摎するがやうであり、鳳が舞うて或は頽れ亞ぐやうでもある。やがて、散つて東郊の霧となり、凍つて枯樹の稼となる。(雲氣が樹木に著き、結んで冰となる。)或は吾が車の中へ飛び入り、相迫つて肘や胯を礙げる。手に取りて笥の中に入れて、茅舍に返つた。緘を開いて之を放つ、掣き去ると、仍つて變化する。雲よ汝は山に歸れ、顯官をして怕れしめること勿れ。(それは、唐の諺に、木若稼、達官怕、といふがあるから言つたものである。五行傳に、木介、甲冑兵之象。)

【餘論】謝氏詩源に、更嬴之妻、能作二鎖雲囊一、佩レ之陟二高山有レ雲處一、不二必開レ囊、而自然有二雲氣一入二其中一、歸レ家啓視、皆有二雲氣一、白如レ綿自レ囊而出。

妒佳月

狂雲妒佳月。(一)怒飛千(二)里黑。
佳月了不嗔。曾何汚潔白。
爰有謫仙人。舉酒爲三客。
今夕偶不見。汎瀾念風伯。(五)
毋煩風伯來。彼也易滅沒。(六)
支頤少待之。寒空淨無迹。(七)
粲粲黃金盤。獨照一天碧。(八)
玉繩慘無輝。(九)玉露洗秋色。
浩瀚玻璃琖。(一〇)和光入胸臆。(一一)
使我能永延。約君爲莫逆。(一二)

【字解】【一】怒飛　莊子逍遙遊に、怒而飛、其翼若垂天之雲。【二】千里　鮑照の詩に、三五二八時、千里與君同。【三】爲三客　李太白の詩に、舉杯邀明月、對影成三人。【四】汎瀾　涕を流す貌、念時涕汎瀾。馮衍の顯志賦に、淚汎瀾而雨集。【五】風伯　姓は方、名は道彰。韓非子に、黃帝合鬼神於泰山、風伯進掃雲笈七籤。【六】易滅沒　列子說符篇に、若滅若沒。【七】支頤　莊子漁父篇に、漁父左手據膝、右手持頤以聽。【八】黃金盤　杜子美の詩に、月落如金盤。【九】玉繩　星の名、玉衡の北に在る。【一〇】玉露　李太白の詩に、秋露如白玉。【一一】浩瀚　淮南子俶眞訓篇に、浩浩瀚瀚。【一二】莫逆　莊子大宗師篇に、四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友。

【題義】 首句を摘んで題となす、却て是れ古例である。此詩は上官に合はない所から作つたもので、其の詞が太だ過激であり、又、太だ露骨である。

【詩意】 狂雲が佳月を妒み、怒りて飛べば千里暗黑となる。併し、佳月は終に嗔らない。汝は汝、我は我、汝が黑きを行つても、決して我の潔白を汚すことは出來ない。ここに謫仙人（李白を指す）があつて、月に向ひ酒杯を擧げて三人となる。今夕は偶〻月を見ないので、涕を流して風伯を念ふ。（雲を掃はんが爲めである。）風伯の來るを煩はすことなかれ。彼は滅沒し易い。頤を支へて暫し之を待て。寒空は淨うして迹なく、粲として黃金盤のやうである。獨、碧天を照らし、あはれ、空の星も其の光を失つて池上の玉露は秋色を洗ふ。浩月は玻璃の琖（小さき玉のさかづき）に浮び、和光は胸臆に入る。我をして永延ならしめるものは月であるから、君と約して莫逆の友とならう。

太白詞

岐下頻年大旱。禱於太白山。輒應。故作迎送神辭一篇五章。

【訓讀】 岐下頻年大旱、太白山に禱れば輒ち應ず、故に迎送神辭一篇五章を作る。

【字解】 【一】太白山　郿縣に在る。

雷闐闐。山晝晦。風振野。　雷闐闐、山晝晦く、風野を振ひ、
神將駕。載雲罕。從玉虯。　神將に駕せんとし、雲罕を載せ、玉虯を從ふ。
旱既甚。蹙往救。道阻修兮。　旱既に甚しく、蹙き往いて救ふ、道阻修なり。

【字解】【一】闐闐　雷の聲、楚辭九歌に、雷塡塡分雨冥冥。宋玉の九辯に、屬二雷師之闐闐一。【二】雲罕　雲の旗、司馬相如の上林賦に、載二雲罕一とある。【三】玉虯　楚辭に、駟二玉虯一以乘レ翳。【四】阻修　へだたつて遠い、白居易の詩に、雲雨多分散、關山苦二阻修一。

【題義】嘉祐七年九月、太白山に雨を禱つたのは、去年の九月から雨が降らないので、父老咸いふ、此山には舊湫水がある。試に禱請を加へなば、必ず響應を得むと。既に至るの日、油雲蔚興、化して大雨となつたと言ひ傳ふ。此の太白山迎送神詞は、漢の郊祀諸歌の作に倣つたものである。

【詩意】雷はごろごろと鳴つて、山は晝も晦く、風は野を振ふ。雷神は將に出かけんとして雲の旗を立て玉虯（龍の子の角あるもの）を從へる。旱が甚しいので雷神は急いで往いて救はんとするも、何分、道が阻つて且つ遠い。

旌旂翻。疑有無。日慘變。　旌旂翻り、有無を疑ふ、日慘變、
神在塗。飛赤篆。訴閶闔。　神塗に在り、赤篆を飛ばし、閶闔に訴ふ。

走陰符。行羽檄。萬靈集兮。　陰符を走らし、羽檄を行ふ、萬靈集る。

【字解】【一】閶闔　天上界の最初の門、淮南子の原道訓に、排二閶闔一鑰二天門一。【二】陰符　陰符經といふ兵書、戰國策に、得二太公陰符之謀一。【三】羽檄　鳥羽をつけた廻文、漢書高帝紀に、吾以二羽檄一徵二天下兵一。【四】萬靈　よろづの神、史記自序に、萬靈罔レ不二禋祀一。

【詩意】旌旂（はたの總稱）は翻るが、有るでもなく無いでもない。日は慘しく變はり、雷神は塗に在り、赤い篆書のやうな電光を空に飛ばして、天門に訴ふ。兵書を走らし、急に廻文を行つたので、萬の神が集つた。

風爲レ幄。雲爲レ蓋。滿堂爛。　風を幄となし、雲を蓋となし、滿堂爛たり、
神既至。紛醉飽。錫以雨。　神既に至る、紛として醉飽、錫ふに雨を以てし、
百川溢。施溝渠。歌且舞兮。　百川溢れ、溝渠に施す、歌ひ且つ舞ふ。

【字解】【一】滿堂　楚辭九歌に、滿堂兮美人。

【詩意】風を幄となし、雲を蓋となし、滿堂はきらきらと光る。雷神既に至る、十分酒食に飽き、錫ふに雨を以てす。百川も水溢れて溝渠に入る。かくて歌ひつ舞ひつして喜ぶ。

騎裔裔。車斑斑。鼓簫悲。　騎裔裔、車斑斑、鼓簫悲しく、

神欲還。轟振凱。隱林谷。
執妖厲。歸獻馘。千里肅兮。

【字解】【一】 喬喬　宋玉、神女の賦に、步喬喬兮曜殿堂。【二】 振凱　左傳僖公二十八年に、振旅愷以入於晉。

【詩意】 騎は喬喬(行く貌)、車は斑斑(まだらなる貌)、鼓の音簫の聲も悲しい。雷神が還らうとして勝鬨が轟き、林谷に隱として盛に、妖厲を執へ、歸つて馘(きりたる敵の首)を獻じて、千里も肅然として治まる。

神之來。悵何晚。山重複。
路幽遠。神之去。飄莫追。
德未報。民之思。永萬祀兮。

【字解】【一】 悵　望恨の意、楚辭九辯に、惆悵兮而私自憐。【二】 重複　顏延年の詩に、河山信重複。【三】 幽遠　莊子山木篇に、道幽遠而無人。

【詩意】 神の來る何ぞ晚き、恨めしい。山は重複して路も幽遠である。神の去るは飄として之に追付くことは出來ない。神德未だ報いず、民は之を思うて已まない。土を累ね壇を立て、永く祭祀をなして怠らない。

扶風天和寺

遠望若可愛。朱欄碧瓦溝。
聊爲一駐足。且慰百回頭。
水落見山石。塵高昏市樓。
臨風莫長嘯。遺響浩難收。

【字解】【一】 天和寺　扶風縣志に、天和寺在城南。東坡詩を廳壁に題す。【二】 長嘯　言調を長くしてうそぶく、王維の詩に、獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。【三】 遺響　東坡赤壁の賦に、託遺響於悲風。

【題義】 此詩の石刻は、扶風縣南山の馬援祠中に在る。東坡自ら其後に題して、癸卯九月十六日挈家來遊云云といふ。紀昀曰く、一起眞景以淡語寫出、と。

【詩意】 天和寺は高岡の上に在つて、遠望愛すべきである。(扶風南山に、此詩の首句を取つて遠愛亭といふがある。)朱塗のてすりや青い瓦が城塹と映じて居る。聊か一たび足を駐めて、百たび頭を回すの勞を慰める。(此二句は、其の登陟の易からざるをいふ。)水が退いて山石が見はれ、塵が高いので、市樓も見えない。風に臨んで長く嘯くと、其の遺響は迚も收め難いであらう。

蘇東坡詩集　卷五

古今體詩　四十五首

和子由記園中草木十首

煌煌帝王都。赫赫走羣彥。
嗟汝獨何爲。閉門觀物變。
微物豈足觀。汝獨觀不倦。
牽牛與葵蓼。採摘入詩卷。
吾聞東山傅。置酒攜嬿婉。
富貴未能忘。聲色聊自遣。
汝今又不然。時節看瓜蔓。
懷寶自足珍。藝蘭那計畹。
吾歸於汝處。慎勿嗟歲晚。

和子由が園中の草木を記するに和す　十首

煌煌たり帝王の都、赫赫羣彥を走らす。
嗟汝獨何を爲す、門を閉ぢて物變を觀る。
微物豈觀るに足らんや、汝獨觀て倦まず。
牽牛と葵蓼と、採摘して詩卷に入る。
吾聞く東山の傅、酒を置きて嬿婉を攜ふ。
富貴未だ忘るる能はず、聲色聊か自ら遣る。
汝今又然らず、時節瓜蔓を看る。
寶を懷いて自ら珍とするに足る、蘭を藝る那んぞ畹を計[ら]ん。
吾歸り汝に於て處らん、慎みて歲晚を嗟する勿れ。

【字解】【一】煌煌　光明の貌、古樂府に煌煌京洛篇がある。【二】赫赫　盛明の貌、詩の大雅に、赫赫明明。【三】牽牛　本草に、牽牛生花、作二碧色一結レ實。酉陽雜俎には、之を盆甑草といふ。【四】葵蓼　本草に、蓼有二七種一。【五】東山傅　晉の謝安は東土に棲遲し、情を丘壑に放にすと雖も、遊賞する毎に、必ず妓女を以て從ふ。後に太傅を贈らる、故に東山の傅といふ。【六】嬿婉　美人のさま、詩の邶風新臺篇に、燕婉之求、籧篨不レ鮮。【七】瓜蔓　瓜期の義、時節の推し移つて、物の變ずるをいふ。關騆の九州志に、五月瓜蔓水。【八】懷レ寶　論語の陽貨篇に、懷二其寶一而迷二其邦一。【九】畹　蘭のはたけ、楚辭の註に、十二畝を畹となすと見ゆ。

【題義】此和詩十首は嘉祐八年、鳳翔府に在つて作つたもので、東坡は時に二十八歳、子由は老蘇に侍して京都南園に居つたのである。(南園は京師宜秋門内に在る。)子由の原作は、園中有る所を賦した十首で、其の自註によると、時在二京師一、其詩、一萱草、二竹、三種蘆、四病榴、五葡萄、六叢簪、七果蠃、八牽牛、九柏、十葵、毎章十二句、と。東坡、此の十詩に和したが、必しも原作の園中草木とは一致しない。紀昀いふ、首首寓レ慨而不レ露二怒張一、句句涉レ理而不レ入二迂腐一、音節意境皆逼二眞古人一、亦無二刻畫之迹一と。

【詩意】煌煌たる帝王の都には、赫赫として羣彥(多くの秀れたる人)が活躍して居る。(此二句は京師に人材の盛なるをいふ。)ああ汝(子由を指す)は、今何をして居るか、聞けば園中に閑居して草木を植ゑ、世間へは出ないで、草木の盛衰によつて、物の變化を觀て居らるるとか、其の高尚の趣、知るべきである。草木は微物で、觀るに足らないが、高尚な志を養はんが爲には可い。牽牛や蓼などの草花を採摘して姑く詩卷に入れて娛み居られるのは、まことに喜ばしい。昔、東山の傅(晉の謝安)は、情を丘壑に放にしたが、遊賞する毎に、妓女を從へる。それは未だ富貴を忘れることが出來ないから、聲色(妓樂)を以て聊か心を慰めるのみである。汝(子由)はさうでない。草木を觀て、時運の推移に感じ、胸中には、富貴の念を留めない。(子由を揚げて、謝安を抑ふ。)子由の才器德香は、恰も寶玉を抱き居るが如く、自ら珍重するに足る。故に園中に多くの蘭を植ゑるのは、相當のことである。畹(蘭のはたけ)を計るには及ばない。余も其のうちには、歸つてお前の家に於て同居することにしよう。されば、十分に談笑して樂むことが出來ようから、歳晩のことなど嗟くには足るまい。(歳晩とは、歸隱することの遲きを言つたのであらう。)

荒園無數畝。草木動成レ林。
春陽一以敷。妍醜各自矜。
蒲萄雖滿レ架。困倒不レ能レ任。
可レ憐病石榴。花如レ破二紅襟一。
葵花雖二粲粲一。蔕淺不レ勝レ簪。
叢蓼晚可レ喜。輕紅隨レ秋深。
物生感二時節一。此理等二廢興一。

飄零不自由。盛亦非汝能。　飄零自由ならず、盛も亦汝の能にあらず。

【字解】【一】荒園　東坡の居る鳳翔府官舍の園。【二】蒲萄　蒲陶とも、蒲桃とも書く、漢書西域傳に、漢使采蒲陶目宿種一歸。博物志に、張騫使西域一還、得蒲桃一。【三】困倒　倉に貯へたものを盡く出す、韓退之の書に、倒庾傾囷。【四】石榴　博物志に、張騫使西域一得塗林安石國榴一以歸、故名安石榴一。【五】紅襟　丁仙芝の餘杭詩に、曉幕紅襟燕。【六】飄零　木葉がひるがへり落ちる、轉じて身世の不幸に喩ふ。陸游の詩に、不敢歎飄零一。

【詩意】鳳翔府にある官舍の荒園は數畝もないが、草木は動もすると林をなす。春陽の好時節になると、妍しきも醜いも各〻自ら矜つて居る。（妍醜は、草木の佳惡を人に見たてていふ。故に次に、各自矜と言つたのである。）蒲萄は實つて、架に滿ちても、冬に禁へなく、屈盤して自立が出來ない。（不レ能レ任とは、自立の出來ないことをいふ、子由の蒲萄詩にいふ、蒲桃不レ禁レ冬、屈盤似レ無レ氣、春來乘二盛陽一、覆レ架青綾被、と。）衰へた石榴も、かはいさうで、花は紅襟を破つたやうである。（子由が病石榴の詩に、堂後病石榴、及レ時亦開レ花、身病花不レ齊、火候漸已差。）葵の花は、粲粲として美しいが、（子由が葵の詩に、葵花開已闌、結レ子壓レ枝重、憶初始放レ花、岌岌旌節聳。）蓼は淡紅色の花を開いて、晩秋特に喜ぶべし。（子由の原作には蓼詩なし。蒲萄以下の八句は、園中のものを撮みあぐ。）萬物の生、卽ち草木の榮衰は、人間の事と同じで、皆、造物者の然らしめるものである。して見れば、榮枯盛衰は、汝（草木を指す）の能くすることではない。（此詩は、蒲萄・榴・葵の三首に答へたものである。園中より入手、中間蒲萄・榴・葵蓼、各〻二句、三實一虛、板に落ちない。）

種柏待其成。柏成人已老。
不如種叢簪。春種秋可倒。
陰陽不擇物。美惡隨意造。
柏生何苦艱。似亦費天巧。
天工巧有幾。肯盡爲汝耗。
君看藜與藿。生意常草草。

【字解】【一】柏　常綠喬木の總稱。【二】叢簪　帶竹をいふ、簪は箭、史記、高祖紀に、太公擁レ簪。【三】隨意造　庾信が蕩子賦に、細草橫レ階隨意生。【四】藜與藿　あかざとまめのは、前漢書の蓋寬饒傳に、山有二猛獸一、藜藿爲レ之不レ采。

【詩意】柏を種ゑて其の成長を待つ。柏の生長する時分には、人已に老ゆ。（子由の原作柏の詩に、南園地性惡、雙柏不レ得レ長、柏生嗟幾年、失意自悽愴。）叢簪を種ゑた方が餘程よい。なせといふに、春種ゑて秋は倒すことが出來るからである。（子由の原作簪の詩に、鄰翁笑二我拙一、敎二我種一叢草一、經レ霜斫爲レ簪、不レ讓秋竹好。）大自然は物を擇ばない。美しきも惡きも意に隨つて造る。然るに柏の生ずるは、まことに苦艱であつて、天巧を費すに似て居る。（韓退之が詩に、柏生兩石間、萬歲終不レ大。）天工の巧みは、どれ程か分らないが、盡く汝の爲に耗してしまつた。君看よ、藜と藿との生意が常にいそがはしいことを。（此詩は柏簪の二首に答へたものである。）

萱草雖微花、孤秀能自拔。
亭亭亂葉中、一一芳心插。
牽牛獨何畏、詰曲自芽蘖。
走尋荆與榛、如有夙昔約。
南齋讀書處、亂翠曉如潑。
偏工貯秋雨、歲歲籬落。

【字解】【一】萱草　忘れ草、諼草に同じ、詩の衞風に、焉得諼草。註にいふ諼、忘也、食之、令人忘憂者。【二】孤秀　梁の昭明太子の啓に、儼然孤秀。【三】亭亭　高く聳え立つ、周惇頤が愛蓮の說に、亭亭淨植。【四】潑　そそぐ、畫斷に、以墨潑絹。

【詩意】萱草は微花ではあるが、亂葉の中に亭亭として秀出する。一一芳心が插んで居る。之を君子に譬へる。(子由の萱詩に、萱草朝始開、呀然黃鵠背、仰吸日出光、口中爛如綺、美女生山谷、不解歌與舞、君看野草花、可以解憂悴。)牽牛花は芽蘖(めや、ひこばえ)の時分よりして屈曲し、直に荆榛にとりすがる。其のさまは昔から約束をなせるもののやうである。之は小人に譬へる。(子由の牽牛の詩に、牽牛非佳花、走蔓入荒榛、開花荒榛上、不見細蔓身。)南の書齋、亂翠のあざやかなことは、曉に水をそそいだやうである。又、其の弊をいふと、巧に雨を貯へるから、歲歲垣根を毀される。(小人の家國を敗るに喩ふ。)

蘆筍初似竹、稍開葉如蒲。
方春節抱甲、漸老根生鬚。
不愛當夏綠、愛此及秋枯。
黃葉倒風雨、白花搖江湖。
江湖不可到、移植苦勤劬。
安得雙野鴨、飛來成畫圖。

【字解】【一】似竹　子由の蘆の詩に、蘆生井欄上、蘆騷大如竹。【二】及秋枯　子由の蘆の詩に、莖青甲未解、枯葉已可束。【三】勤劬　劬は勤勞の意。

【詩意】蘆の生長した初は、竹笋の如きであるから、蘆筍といふ。やや開けば、葉は蒲のやうである。春に方りては、其の節に、皮があり、次第に老いては、根に髭が生ずる。蘆は、夏天の綠葉は、愛するに足らない。ただ秋を迎へて、枯れたときの黃葉と白花とは、江湖を粧點して、尤も愛すべきである。仕官の身は、江湖へは到ることが出來ない。そこで、江湖の物、卽ち蘆を勤苦して移し植ゑたのである。(子由の蘆の詩に、移來種堂下、何爾短局促、强移性不遂、灌水惱童僕。)此上の望みといふは、二疋の野鴨が、此の蘆間へ飛び來つて、畫圖の趣を成すやうにありたい。(雙野鴨は、先生兄弟が相聚る意を寄せたものであらう。)

行樂惜芳辰。秋風常苦早。
誰知念離別。喜見秋瓜老。
秋瓜感霜霰。莖葉颯已槁。
宦遊歸無時。身若馬繫皁。
悲鳴念千里。耿耿志空抱。
多憂竟何爲。使汝玄髮縞。

【字解】【一】行樂　樂みをなす、前漢書楊惲の詩に、人生行樂耳、須富貴何時。李白詩に、行樂須及春。【二】芳辰　春の時節、辰は時の意。謝靈運の序に、良辰、美景、賞心、樂事、四者難并。【三】秋瓜　詩の豳風、七月篇に、七月食瓜。【四】繫皁　顏延年が赭白馬の賦に、飛黃服皁。【五】耿耿　小明なり、謝朓の詩に、秋河曙耿耿。心に存する所があつて、忘れることの出來ない貌。

【詩意】人生は行樂のみ、樂をなす須く春の時節に於てすべく、秋風がいつも早く來るので困る。誰か知らん、春の離別を念ひつつも、秋となつて甜瓜の老ゆるを喜ぶを。秋瓜も霜や霰に感じ、莖も葉も颯として已に槁れる。仕宦して外に在つて、何時歸るといふあてもない。此の身は恰も馬が馬閑(馬を繫ぎ置く處)に繫れて居るやうなものである。悲鳴して千里を念ひ、耿耿として空しく志を抱いて居る。(魏武帝の樂府に、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已。)心配した所で、何も役に立たない。汝の黑髮をして白からしめるばかりである。(前の二、三、四、五の四首は、皆、園中の草木に答へたのに、此詩は忽ち瓜期の感に觸れ、宦遊歸無時云云に入り、原作を不問に置く。)

官舍有叢竹。結根問囚廳。
下爲人所徑。土密不容釘。
殷勤戒吏卒。插棘護中庭。
遶砌忽墳裂。走鞭瘦玲瓏。
我常攜枕簟。來此蔭寒青。
日暮不能去。臥聽窗風冷。

【字解】【一】不容釘　晉書の陶侃傳に、以所貯竹頭作釘裝船。【二】殷勤　慇懃と同じ、委曲の貌。【三】砌　階の下の甃。【四】墳裂　左傳僖公四年に、公祭之地、地墳。註にいふ、高起也と。【五】鞭　竹根。【六】玲瓏　一に伶俜に作る。玉篇に、伶俜、行不正也。

【詩意】鳳翔府の官舍には、叢竹がある。竹の根は、門囚廳の邊で結んで居り、其の下は人が往來して小徑が出來た。土が密であつて筍も生じない。(竹頭を以て釘を作つたといふ陶侃の故事により釘は竹萌の義に取る。)懇に吏卒を戒め、棘を插んで、中庭を護る。甃を遶りて筍が忽ち墳ら裂ける。竹根を走らし、瘦せて歩くことも正しくない。我は常に枕や簟を攜へ、此に來つて寒青(寒玉に同じ、竹の異名)に蔭する。日が暮れても去ることが出來ない。臥して窗風の冷かなるを聞く。(手近い所に

目を寄せて詠じたのである。）

芎藭生蜀道。白芷來江南。
芎藭は蜀道に生じ、白芷は江南に來る。
漂流到關輔。猶不失芳甘。
漂流して關輔に到るも、猶ほ芳甘を失はず。
濯濯翠莖滿。愔愔清露涵。
濯濯として翠莖滿ち、愔愔として清露涵す。
及其未花實。可以資筐籃。
其の未だ花實らざるに及んで、以て筐籃を資くべし。
秋節忽已老。苦寒非所堪。
秋節忽ち已に老い、苦寒堪ふる所にあらず。
劚根取其實。對此微物慙。
根を劚りて其實を取り、此の微物に對して慙づ。

【字解】【一】芎藭　女葛と稱する香草。四川省の產を佳とするが故に川芎ともいふ。【二】白芷　よろひ草、水に生ずる一種の香草。本草に白芷生河東川谷。【三】關輔　關中の三輔、京兆、右扶風、左馮翊。【四】濯濯　光潔なる貌、世說に、濯濯如春月柳。【五】愔愔　深くしづかなる貌。傅咸の燭賦に、嘉湛露之愔愔。【六】苦寒　嚴しい寒さ、杜甫の詩に、蠻夷長老怨苦寒。

【詩意】芎藭は蜀中に生ずる、故に川芎ともいふ。白芷は河東に生じ、江南に來る。漂流して三輔に到るも、猶ほ芳しい甘味を失はない。濯濯として青い莖が滿ち、愔愔として淸い露が涵して居る。まだ花が實らないうちは、以て筐籃に入れることが出來る。（芎藭、名は蘼蕪、以て菜とすることが出來る。正葉、名は蒿麻、以て浴湯とすることが出來る。これ所謂資筐籃ものである。）秋の季節となつては、忽ち已に老い、嚴しい寒さに堪へられない。根を劚りて其の實を取る。此の微物にして慙ぢる所がある。

自我來關輔。南山得再遊。
我關輔に來りしより、南山に再遊することを得たり。
山中亦何有。草木媚深幽。
山中亦何かある、草木深幽に媚ぶ。
菖蒲人不識。生此亂石溝。
菖蒲人識らざるも、此の亂石溝に生ず。
山高霜雪苦。苗葉不得抽。
山高うして雪霜に苦められ、苗葉抽くことを得ず。
下有千歲根。蹙縮如蟠虬。
下に千歲の根あり、蹙縮して蟠虬の如し。
長爲鬼神守。德薄安敢偸。
長も鬼神の爲に守らる、德薄ければ安んぞ敢て偸まん。

【字解】【一】菖蒲　襄宇記に、咸平（宋、眞宗の年號）中、姚成市といふもの、常に菖蒲を澗側に採る。一丈夫に遇ふ。市に謂つて曰く、此の菖蒲は、安期生の餌する所、以て老を忘るべしと、忽ち見えず。【二】有千歲根　神仙傳に、茅君丹砂二千歲乃結成、上帝常使鬼神毒蛇守焉。【三】鬼神守　物類相感志に、趙隱之が母傳氏、曾て山澗中に於て、菖蒲の花、大さ車輪の如く、傍に神人の守護するあるを見る云云とある。【四】德薄安敢偸　抱朴子の仙藥篇に、凡庸道士、心不專精、行穢德薄、亦終不能得也。

【詩意】我は關中の三輔（長安城中をいふ、前詩の註にあり。）に來つて、南山に再遊が出來た。山中には何がある、草木が茂つて深幽である。仙人安期生の餌とする菖蒲は、人は識らないが、此の亂石溝に生じて居る、山高くして霜や雪に苦められ、苗葉を抽くことが出來ない。下に千歲の根があり、蹙縮して蟠つた虬のやうである。いつも鬼神の爲に守られる。德が薄ければ、善根を種ゑないか

ら、誰も菖蒲を偸むこともなからう。(法華經に、薄德之人、不レ種二善根一。)

野菊生二秋澗一。芳心空自知。
無二人驚一歲晚。惟有二暗蛩悲一。
花開澗水上。花落澗水湄。
菊衰蛩亦蟄。與レ汝歲相期。
楚客方多レ感。秋風咏二江蘺一。
落英不滿レ掬。何以慰二朝饑一。

野菊秋澗に生じ、芳心空しく自ら知る。
人の歲晚に驚くなく、惟暗蛩の悲しむあり。
花開く澗水の上、花落つ澗水の湄。
菊衰へ蛩亦蟄す、汝と歲に相期す。
楚客方に感多く、秋風江蘺を咏ず。
落英掬するに滿たず、何を以て朝饑を慰めむ。

【字解】【一】芳心　芳志に同じ、呂溫山櫻詩に、幽處竟誰見、芳心空自知。【二】湄　みづぎは、詩の秦風に、在二水之湄一。【三】蛩　こほろぎ、爾雅、釋蟲に、蟋蟀蛬、註にいふ、今促織也と。【四】江蘺　香草の名、香草は江中に生ず、故に江蘺といふ。本草綱目に、蘼蕪、一名江離。

【詩意】野菊は澗に生じて、誰にも知られない。其の芳心は、空しく自ら知るのみである。世と遠かつた隱者であるから、別に歲晚にも驚かないが、ただ暗蛩(蛩は蟋蟀)の悲しむあるのみ。花は澗水の上に開き、花は澗水の湄に落ちる。菊衰へ蛩亦蟄する。(蟄は隱れる)汝と毎年相會ふことを約束する。楚の詩人は感慨が多いので、秋風が吹いて、江蘺(楚辭、離騷に、扈二江離與二辟芷一兮。)を詠ずる。

又、楚辭に、夕餐二秋菊之落英一とあるが、落英は掬するに滿たないから、何を以て朝饑を慰めることが出來ようぞ。

紀レ夢　夢を紀す

我歸レ自二南山一。山翠猶在レ目。
心隨二白雲一去。夢繞山之麓。
汝從二何方一來。笑齒粲如レ玉。
探レ懷出二新詩一。秀語奪二山綠一。
覺來已茫昧。但記說二秋菊一。
有レ如採レ樵人。入レ洞聽二琴筑一。
歸來寫二遺聲一。猶勝二人間曲一。

我南山より歸れば、山翠猶ほ目に在り。
心は白雲に隨つて去り、夢は繞る山の麓。
汝何れの方より來る、笑齒粲として玉の如し。
懷を探つて新詩を出す、秀語山綠を奪ふ。
覺め來つて已に茫昧、但記す秋菊を說くを。
樵を採る人の、洞に入つて琴筑を聽き、
歸り來つて遺聲を寫すに、猶ほ人間の曲に勝れるが如きことあり。

【字解】【一】山翠　庾肩吾が詩に、山翠下添レ流。【二】粲如レ玉　粲は白齒を出して盛に笑ふ。穀梁、昭公四年に、軍人粲然皆笑。【三】茫昧　ぼんやりとして知り難い。昧は暗、陶潛の詩に、天道幽且遠、鬼神茫昧然。

【題義】東坡の自註によるに、八月十一日夜、宿二府學一、方和二此詩一、夢與レ弟游二南山一、出二詩數十首一、夢中甚愛レ之、及レ覺但記二一句一云、蟋蟀悲秋二菊一とある。(時に陳公弼は、東坡に命じて、府學の敎授を

兼ねしむ。故に夜、府學に宿すと言つたのである。）此詩は、子由十首に和するの總結である。

【詩意】我は南山の遊から歸つたが、山翠は猶ほ目を離れない。心は白雲に隨つて去り、夢は山の麓を繞つて居る。一體、汝（子由を指す。）は何れの方面から來つた。汝の笑ふ齒は、粲然として玉のやうである。懷を探つて新詩を示さる。秀逸の語は山綠を奪ふ程であつたが、覺め來つて已に茫昧、ただ蟋蟀悲二秋菊一の一句を記するのみ。それは恰も樵を採る人が山洞に入つて琴や、筑（箏に似た樂器）を聽き、歸り來つて遺聲を寫すに、猶ほ人間の曲に勝るがやうなものである。

次二韻子由種レ菜久旱不生

子由が菜を種ゑて久しく旱して生ぜずといふに次韻す

新春階下筍芽生。　新春階下筍芽生ず、
廚裏霜虀倒二舊罌一。　廚裏霜虀舊罌を倒す。
時繞二麥田一求二野薺一。　時に麥田を繞りて野薺を求め、
强爲僧舍煮二山羹一。　强ひて僧舍を爲りて山羹を煮る。
園無二雨潤一何須レ歎。　園に雨潤なきも何ぞ歎くを須ゐん、
身與時違合二退耕一。　身時と違ふ合に退耕すべし。

【字解】【一】野薺　なづな、詩、邶風に、誰謂二荼苦一、其甘如レ薺。【二】合二退耕一　史記、吳世家に、子胥退而耕二于野一。【三】年華　年光といふに同じ、皮日休の詩に、居レ茲老復老、不レ解歎二年華一。庾信が杖賦に、年華未レ暮。【四】秋色兩三莖　子由の詩に、家居閒暇厭二長日一、欲レ看二年華一上二菜莖一。

欲レ看二年華一自有處。　年華を看んと欲す自ら處あり、
鬢間秋色兩三莖。　鬢間の秋色兩三莖。

【題義】子由が種レ菜詩に、久種二春蔬一旱不レ生。園中汲レ水亂二瓶罌一とあるが、園中は南園である。此詩は、英宗の治平元年（皇紀一七二四年、西曆一〇六四年）正月の作で、東坡が二十九歲の時である。

【詩意】新春は、生意が盛で、階下に筍の芽が生じ、廚の裏の鹽づけの菜も、舊い瓶を倒して新しくなる。折折、麥畑を繞つて野薺を求め、僧舍を造つて羹を煮る。園に雨が降らなくても、心配するには及ばない。朝夕の食事に不自由はない。それで時と合はなければ、退いて耕すがよい。（子由の詩に、强有二人功一趨二節令一、悵レ無二甘雨一困二耘耕一とあるから、之に答へたのである。）年光の過ぎ行くを知らうと欲せば、鬢間に秋色兩三莖のあるを看られよ。

大老寺竹間閣子

殘花帶レ葉暗。新筍出レ林香。　殘花葉を帶びて暗く、新筍林を出でて香し。
但見竹陰綠。不レ知汧水黃。　但見る竹陰綠に、知らず汧水の黃なるを。
樹高傾二隴鳥一。池浚落二河魴一。　樹高うして隴鳥を傾け、池浚うして河魴を落す。

栽レ種良辛苦。孤僧瘦欲レ尫。(五)　種を栽う良に辛苦、孤僧瘦せて尫せんと欲す。

【字解】【一】大老寺　鳳翔志に、竹閣在二城東北五里一。【二】汧水　水經註に、汧水、出二陝西隴縣西北汧山南麓一、東南流合二北河一、卽古龍魚川。【三】樹高云云　詩、小雅、小弁に、莫二高匪レ山、莫二浚匪レ泉。【四】河魴　詩の陳風、衡門に、豈其食レ魚、必河之魴。【五】尫　傴僂をいふ、禮記の註に、瘠病之人也。

【題義】唐の僖宗の光啓中、李茂貞が建てた竹閣は、後に大老寺となつた。此詩も前詩と同じく英宗の治平元年三月、大老寺に題したのである。紀昀いふ、太不レ成レ語、恐非二眞本一、編レ詩者、搜輯以二炫博一、轉爲二古人之累一と。然るに王文誥は考二其詩境一、信出二公手一、氣息皆是、と言つて居る。

【詩意】殘花は葉を帶びて暗く、筍は新しく出來た。竹の陰が綠となつて、汧水の黃なるが分らない。(汧水は縣の西二十里に在り、汧陽縣の西から、又、南流して寶雞に入る。)樹が高いので、隴の烏を傾け、池が深いので、河の魴(折敷魚)を落す。種を栽ゑるのは、まことに骨が折れる。孤僧は瘦せて傴僂とならうとする。

(一)周公廟。廟在二岐山西北七八里一。廟後百許步。有レ泉依レ山。湧洌異常。國史所謂潤德泉。世亂則竭者也

周公廟、廟は岐山の西北七八里に在り、廟後百許步、泉あり、山に依る、湧洌異常、國史に所謂潤德泉、世亂るれば竭くるものなり

吾今那復夢(二)周公。
尙喜秋來過二故宮一。
翠鳳舊依山硉兀。(三)
清泉長與レ世窮通。
至レ今游客傷二離黍一。(四)
故國諸生咏二雨濛一。(五)
牛酒不レ來烏鳥散。
白楊無數暮號(六)レ風

【字解】【一】周公廟　名勝志に、鳳山之麓有二周公廟一云云。廟の後に泉あつて湧き出づ。相傳ふ、時平なれば則ち流れ、時亂るれば則ち竭くと。【二】夢二周公一　論語述而篇に吾不二復夢見一周公一。【三】硉兀　石崖の穩かでない貌。蘇轍の詩に、着崖硉兀起成レ柱、亂石散列如二驚麞一。【四】離黍　詩の王風黍離に、彼黍離離、彼稷之苗。離離は、穗の垂れる貌。【五】雨濛　詩、豳風、東山の詩に、我來レ自レ東、零雨其濛。【六】號レ風　文選、古詩に、白楊多二悲風一、蕭蕭愁二殺人一。

【題義】華山より以西の名山は七つ。其の四を岐山といふ。卽ち今の岐山縣に在る。東坡の此の岐山に游んだのは、治平元年の七月で、周公廟に潤德泉を觀て、此の詩を作つたのである。

【詩意】昔、孔夫子は夢に周公を見ずと言つたが、吾は何ぞ復、周公を夢みようぞ。併し、周公の故宮を過ぎて之を拜するを喜ぶ。翠鳳は、相變らず山の硉兀に依り、清泉は長く世と窮通す。(時平なれ

ば、清泉流れ、時亂るれば、清泉枯れるをいふ。）今に至るまで、游客は離離と黍穗の垂れるさまを傷む。（國が滅びて、宗廟宮室の墟、空しく畑となつたのを歎く。）又、故國の諸生も、零雨其濛の詩を咏ずる。（此詩は、周公東征三年、歸つて歸士を勞したとき、大夫が之を美めたものである。）牛酒來らず、烏鳥も散じて、白楊は無數、暮の風に號んで居る。

戲作賈梁道詩

戲に賈梁道の詩を作る

王凌謂賈充曰。汝非賈梁道之子耶。乃欲以國與人。由是觀之。梁道之忠於魏也久矣。司馬景王既執凌歸。過梁道廟。凌大呼曰。我亦大魏之忠臣也。及司馬景王病。見凌與梁道守而殺之。二人者。可謂忠義之至精貫於神明矣。然梁道之靈。獨不能已其子充之姦。至使首發成濟之事。此又理之不曉者也。故予戲作詩云。

【訓讀】王凌賈充に謂つて曰く、汝は賈梁道の子に非ずや、乃ち國を以て人に與へんと欲すと。是に由りて之を觀れば、梁道の魏に忠なるや久し。司馬景王既に凌を執へて歸り、梁道の廟を過る、凌大に呼んで曰く、我亦大魏の忠臣なりと。司馬景王病むに及び、凌と梁道とが守りて之を殺すを見る。二人は忠義の至精神明を貫くと謂ふべし。然れども梁道の靈、獨其の子充の姦を已むること能はず、首として成濟の事を發せしむるに至る。此れ又理の曉るべからざるものなり。故に予戲に詩を作るといふ。

【字解】【一】賈梁道　賈逵字は梁道、三國魏の人。初、郡吏となり、後、茂才に擧げらる。曹操、馬超を征せしとき、召し見て事を謀り、大に之を悅ぶ。文帝の時、豫州刺史となる。【二】王凌　字は彥雲、文帝の時、揚豫州刺史となる。甚だ軍民の歡心を得。司馬懿の不臣を惡み、且つ齊王は天位に任へざるを以て廢立を謀らんと欲す。事泄る。懿、兵を將ゐて之を討す。勢窮り、藥を飲んで死す。【三】賈充　字は公閭、文帝の時、廷尉を歷、武帝禪を受け、佐命の功あり。專ら諂媚を以て容を取る。【四】司馬景王　司馬師、字は子元、懿の長子。【五】成濟　太子舍人と爲り、司馬昭に黨す。昭、政を專にす。魏主髦、衆を率ゐて昭を攻む。濟前んで魏主髦を刺し、刃、背に出づ。昭乃ち罪を濟に歸し、捕へて之を殺す。

嵇紹似康爲有子。
郗超叛鑒是無孫。
如今更恨賈梁道。
不殺公閭殺子元。

嵇紹は康に似て子ありとなす、
郗超鑒に叛く是れ孫なし。
如今更に恨む賈梁道、
公閭を殺さずして子元を殺す。

【字解】【一】嵇紹　嵇康の子、晉、惠帝の時、侍中となる。時に成都王穎反し、官軍敗績す。侍衛、皆潰ゆ。紹、身を以て捍衛し、遂に害に遇ひ、其の血、帝の衣に濺ぐ。【二】郗超　字は嘉賓、愔の長子。父、錢を積むこと數千萬、超、一日に散じて、悉く親故に與ふ。超將に死なんとす、箱を門生に授けて曰く、父もし哀悼せば、此を呈すべしと。愔、果して超を思ひて疾を成す。門生箱を呈す。皆、桓溫と往來せる密計なり。愔、怒つて曰く、小子死すること晚しと、遂に哭せず。【三】鑒　字は道徽、經籍を博覽し、躬ら隴上に耕して吟詠倦まず。位、司空に至り、侍中を加へらる。【四】子元　晉の世宗景皇帝は、姓は司馬、名は師、字は子元、宣帝の長子。

【題義】紀昀いふ、此必有爲而作、非咏古也と。

【詩意】嵇紹は父、嵇康に似て立派な人物である。郗超は、祖父鑒に叛く、是れ鑒に孫がないと謂つても宜しい。今は更に恨むのは賈梁道は其の子の賈充（字は公閭）を殺さないで、司馬景王を殺したことを。（梁道の靈は、其子賈充の姦を已めることが出來ないために、成濟の司馬昭に黨して魏主髦を害せしめるやうになつたことをいふ。）

南溪之南竹林中。新構一茆堂。予以其所處最爲深邃。故名之曰避世堂

南溪の南竹林中、新に一茆堂を構ふ、予其の處る所最も深邃なるを以て、故に之を名けて避世堂といふ

猶恨溪堂淺。更穿修竹林。
猶ほ恨む溪堂淺きを、更に穿つ修竹林。

高人不畏虎。避世已無心。
高人虎を畏れず、世を避けて已に心なし。

隱几頹如病。忘言兀似瘖。
几に隱り頽として病めるが如し、言を忘れ兀として瘖に似たり。

茆茨追上古。冠蓋謝當今。
茆茨上古を追ひ、冠蓋當今を謝す。

曉夢猿呼覺。秋懷鳥伴吟。
曉夢猿呼び覺し、秋懷鳥伴ひ吟ず。

暫來聊解帶。屢去欲攜衾。
暫く來りて聊か帶を解く、屢〻去つて衾を攜へんと欲す。

湖上行人絕。階前暮雪深。
湖上行人絕え、階前暮雪深し。

應逢綠毛叟。扣戶夜抽簪。
應に綠毛叟の、戶を扣いて夜簪を抽くに逢ふべし。

【字解】【一】深邃　土地が奥深い。劉克莊が詩に、江亭俯虛曠、穴室窮深邃。【二】避世堂　名勝志に、避世堂在盩厔縣東南二十五里。（盩厔縣は、陝西省平安府に在る。）【三】高人不畏虎　高人、高士と同じ。駱賓王の詩に、高人儻有訪、興盡詎須回。晉書に、郭文少うして山水を愛す。餘杭大辟山中窮谷無人の地に入る。木を樹に倚せ、苦もて其の上を覆うて居る。猛獸入るも患害なし。【四】隱几頹如病　莊子齊物論に、南郭子綦、隱几而坐、仰天而噓、嗒焉似喪其耦。【五】茆茨　史記に李斯曰、堯茆茨不翦。【六】冠蓋　仕宦の服乘をいふ、班固賦に、冠蓋如雲、七相五公。【七】解帶　沈休文の詩に、解帶臨清風。【八】綠毛叟　唐宣宗の大中年間、禪師あり、南岳に居る。忽ち一物綠毛厚體の人を見るといふ。皮日休の詩に、劉根昔成道、茲塢四百年、毳被其體、號爲綠毛仙。【九】抽簪　王勃の詩に、隨興欲抽簪。

【題義】竹林中、新に茆堂を構へて、其の深邃を愛し、避世堂と名けた。此詩は仁宗の嘉祐八年十二月の作である。

【詩意】溪堂がまだ淺いので、更に修竹林を穿つた。それは、高士は、もと虎を畏れないし、世を避けて、已に心がないからである。高人は几に凭り、頽として（衰頽の意）病めるがやうであり、言を忘れ兀として（動かない貌）瘖（啞）のやうである。其の住居も、上古の茅茨であつて、仕宦の服乘などには少しも目を付けない。曉の夢は猿に破られ、秋懷は鳥と共に吟ずる。暫く來つて寛ぐ。湖上には行人も絕え、階前には暮雪が積る。應に綠毛仙人の戶を扣いて、夜、簪を抽くに逢ふことであらう。

重遊終南。子由以詩見寄次韻

重ねて終南に遊ぶ、子由詩を以て寄せらる、次韻

去年新柳報春回。
今日殘花覆綠苔。
溪上有堂還獨宿。
誰人無事肯重來。
古琴彈罷風吹座。
山閣醒時月照杯。
嬾不作詩君錯料。
舊逋應許過時陪。

去年新柳春の回るを報ず、
今日殘花綠苔を覆ふ。
溪上堂あり還獨宿す、
誰人か無事肯て重ね來る。
古琴彈じ罷んで風座を吹き、
山閣醒むるとき月杯を照す。
嬾くして詩を作らず君錯料す、
舊逋應に許すべし時を過ぎて陪せん。

【題義】子由の寄せられた詩にいふ、定邀二道士一彈二鳴鹿一、誰與溪堂共二酒杯一、應下有二新詩一還寄上我、與君和取當二游陪一と。

【詩意】去年來たときは、柳が芽を吹いて、春になつたことを知らせたが、今日は殘花が綠苔を覆うて居る。溪上に堂がある、また獨りで此堂に宿す。誰人か無事肯て重ねて來る。古い琴は彈き罷んで風が座に入り、(鳴鹿を彈ず) 山閣(南溪堂)で、酒が醒めるとき、月が杯を照らす。子由は應下有二新詩一還寄上我といへるも、我は嬾くして詩を作らない。君は全く料り錯る。舊い負債は何卒許されよ、他日陪償(賠償)致しませう。

【字解】【一】溪上有レ堂　南溪の上に溪堂がある。【二】錯料　料り錯る、岑參の詩に、錯料一生事。誠齋の詩に、錯料一帆超二十程一。【三】陪　償還の意、今は賠に作る。

自清平鎭遊二樓觀一。五郡・大秦・延生・僊遊。往返四日。得二十一詩一。寄二舍弟子由一。同作

清平鎭より樓觀・五郡・大秦・延生・僊遊に遊び、往返四日、十一詩を得、舍弟子由に寄せて同じく作らしむ

樓觀

鳥噪猿呼晝閉門。
寂寥誰識古皇尊。
青牛久已辭轅軛。
白鶴時來訪子孫。
山近朔風吹積雪。
天寒落日淡孤村。

樓觀

鳥噪ぎ猿呼び晝門を閉づ、
寂寥誰か識らん古皇の尊きを。
青牛久しく已に轅軛を辭し、
白鶴時に來つて子孫を訪ふ。
山近くして朔風積雪を吹き、
天寒うして落日孤村淡し。

【字解】【一】清平鎭　宋史に盩厔縣清平鎭を載す。徽宗大觀元年(皇紀一七六七年、西暦一一〇七年)升して軍となし、復、終南縣を置く。【二】樓觀　本、尹喜の居、草樓がある。後人、道宮を創立し、名づけて樓觀といふ。今、終南の陰の盩厔縣に在る。【三】寂寥　物さびしい、寂寞に同じ。楚辭に、辭嗷嗷以寂寥

道人應レ怪遊人衆。　道人應に怪むべし遊人衆くして、
汲二盡階前井水一渾。　階前の井水を汲み盡して渾らしめしを。

鳥有レ鳥丁令威、去レ家千年今來歸、城郭如レ故人民非、何不レ學レ仙塚纍纍。【五】吹二積雪一　古樂府に、朔風吹二積雪一。【六】井水渾　殆。【四】白鶴時來云云　搜神後記に、丁令威、鶴に化して遼東に歸り、華表柱に集る。言つて曰く、有レ杜子美の詩に、淘レ米少汲レ水、汲多井水渾。

【題義】英宗の治平元年、正月十九日、東坡、清平鎭より盩厔に至り、二十日、商洛の令、章惇來り謁し、同じく樓觀・五郡・大秦寺・延生觀に遊び、仙游潭に至る。樓觀より玉女洞に至る九首、別に二首あり、合せて十一首となる。

【詩意】關令尹喜の草樓は、鳥が噪ぎ、猿が呼ぶので、晝も門を閉ぢて居る。物寂しくて、此處が道君のおはす仙居とも思はれない。昔、老子は青牛薄板車に乘つて關を過ぎたといふが、其の青牛は、久しく已に轅軛を辭したのである。(轅はながえ、軛は車の轅の端の横木、馬の首を扼するもの。)又、丁令威が化したといふ白鶴は、時時來つて、子孫を訪れる。山が近うして、北風が積雪を吹き、天寒うして落日が孤村に淡い。樓觀の道人は、遊人が多くて階前の井水を汲み盡して渾らしたことを怪しむであらう。

五郡

古觀正依二林麓斷一。　古觀正に林麓の斷ゆるに依り、
居民來就二水泉甘一。　居民來つて水泉の甘きに就く。
亂溪赴レ渭爭趨レ北。　亂溪渭に赴いて爭うて北に趨き、
飛鳥迎レ山不二復南一。　飛鳥山を迎へて復南せず。
羽客衣冠朝二上象一。　羽客衣冠上象に朝し、
野人香火祝二春蠶一。　野人香火春蠶を祝す。
汝師豈解レ言二符命一。　汝が師豈符命を言ふを解せん、
山鬼何知託二老聃一。　山鬼何ぞ知らん老聃に託するを。

【詩意】林麓の斷えた處に、古い道觀がある。居民は來つて水泉の甘きに就く。亂溪の水は、渭水に入り、爭うて北に流れ、飛ぶ鳥は、山を迎へて、復、南しない。(雁北に向ふの意。)羽客は、衣冠して天帝(上象は上天をいふ。)に朝し、野人は、香火(香をたく火)して春蠶を祝する。汝が師に、符命のことは解らないし、山鬼も老聃に託することを存じない。(東坡の自註に、觀有二明皇碑一、言夢老子告以二享レ國長久之意一。)

盩厔縣有二五郡城一。舊說に、兄弟五人此に竝び居る。後、道觀となつたといふ。【二】香火　北齊書、陸法和の傳に、有二香火因緣一。【三】符命　天が祥瑞を降して人君に與へ、天命を受けし符とする。唐、李肇の翰林志に、帝王之興、必有二符命一。

【字解】【一】五郡　名勝志に、

授經臺

劍舞有神通草聖。
海上無事化琴工。
此臺一覽秦川小。
不待傳經意已空。

【詩意】授經臺は、鳳翔城の南に在る。尹喜が老子に見え、五千言の道德經を授かり、退いて此に居つたと傳へて居る。昔、張旭は草書を善くし、自ら言ふ、公孫氏の舞劍を見て、筆法の神を得と。海山事なく琴工を化すとは、昔、伯牙は、琴を成連先生に學んだが、三年にして成らなかつた。成連いふ、吾が師方子春は、今東海中に在つて、能く人情を移すと、乃ち伯牙と俱に往いて蓬萊山に至つて留まり宿す。曰く、吾將に師を迎へんとすと、船に棹して去つたまゝ、旬日返らない。伯牙延望するも人無く、ただ海水洶洞（相連なる貌）、崩坼の聲、山林窅冥、羣鳥悲號を聞き、愴然として歎じて曰く、先生將に我情を移さんとすと、乃ち琴を援つて歌ひ、遂に天下の妙技となつたといふことである。此臺で一覽すると、衆山の小なるを見るから、道德經を傳へるを待たないで、意已に空しい。（劍舞を觀て、草聖の神に通じ、海山に在つて、彈琴の妙を得。相傳は文字の外に在るをいふ。）

劍舞神あり草聖に通ず、
海山事なく琴工を化す。
此の臺一覽秦川小、
經を傳ふるを待たずして意已に空し。

【字解】【一】授經臺　名勝志に、授經臺在二鳳翔城南一。東坡の自註に、乃南山一峰耳、非二復有一築處一。【二】草聖　杜子美の詩に、張旭三杯草聖傳。【三】一覽秦川小　杜子美の詩に、一覽衆山小。地理志に、陸川陝之平川盡處、過レ此而東則雍之秦川也。

大秦寺

晃蕩平川盡。坡陁翠麓横。
忽逢孤塔迥。獨向亂山明。
信足幽尋遠。臨風却立驚。
原田浩如海。滾滾盡東傾。

【字解】【一】大秦寺　法苑珠林に、終南山有二大秦嶺竹林寺一。【二】晃蕩　光の定まらない貌、蘇軾の詩に、朦朧含二高峯一、晃蕩射二峭壁一。【三】陂陁　平かならざる貌、司馬相如の賦に、登二陂陁之長坂一兮。【四】幽尋遠　李太白の詩に、幽尋無二前期一、乘レ興不レ覺レ遠。【五】却立驚　史記商相如傳に、卻立倚レ柱。【六】原田　左傳僖公二十八年に、原田每每。名勝志に、周原在二岐山縣東四十里一、東西横亘、肥美寬平。【七】滾滾　杜子美の詩に、不盡長江滾滾來。

【詩意】目も遙かに平川の流が盡き、斜に傾いて翠の麓が横はつて居る。忽ち孤塔迥に、亂山に向つて明かであるのに逢ふ。足に信せて遠く尋ね入つたが、風に臨んで却立して驚く。原田（周原は岐山の南に在る。）は浩として海の如く、滾滾として盡く東に傾いて居る。

晃蕩として平川盡き、坡陁として翠麓横はる。
忽ち逢ふ孤塔迥に、獨亂山に向つて明かなり。
足に信せて幽尋遠く、風に臨んで却立して驚く。
原田浩として海の如く、滾滾として盡く東に傾く。

僊游潭

翠壁下無路。何年雷雨穿。
光搖巖上寺。深到影中天。

翠壁の下路なし、何れの年か雷雨穿つ。
光は搖く巖上の寺、深く到る影中の天。

我欲燃犀看。龍應抱寶眠。　我犀を燃して看んと欲す、龍應に寶を抱いて眠るべし。
誰能孤石上。危坐試僧禪。　誰か能く孤石の上、危坐して僧禪を試みん。

【字解】【一】翠壁　江總の賦に、聳翠壁以臨危。【二】燃犀　晉書溫嶠傳に、旋武昌、至牛渚磯、水深不可測、世云、其下多怪物、嶠遂燃犀角而照之、須臾、見水族爇火、奇形異狀。【三】龍應抱寶眠　裴硎傳奇に、周邯有奴、善入水、名曰水精、相州八角井、夜常有光如虹、邯命水精入井、良久出曰、有一黃龍極大、抱數顆明珠、熟寐。

【題義】僊游潭五首、又、潭・南寺・北寺・馬融石室・玉女洞に分つ。潭の下、絕壁萬仞に臨み、木を横へて渡となす。（東坡の自註に、潭水深不可測、上以一木爲橋云云。）東坡は橋を渡らないで、南寺に至る。復、北寺に游び、馬融石室、玉女洞に至る。

【詩意】翠壁の下には、別に路もなかつたが、何れの年か、雷雨が穿つて、人が通れるやうになつた。巖上の寺に光が搖いて居るので、之に向つて深く到つた。昔、溫嶠は犀角を燃し、水を照らして種種怪物の姿をあらはしたといふが、犀を燃して看れば、黃龍が明珠を抱いて眠つて居るを見るであらう。誰か能く孤石の上に危坐して僧禪を試みるであらう。（禪定すれば、深きに臨んでも懼れない。）

南寺

東去愁攀石。西來怯渡橋。　東に去つて石を攀づるを愁へ、西に來つて橋を渡るを怯る。
碧潭如見試。白塔苦相招。　碧潭試らるる如く、白塔苦に相招く。

野饋慚微薄。村沽慰寂寥。　野饋微薄を慚ぢ、村沽寂寥を慰む。
路窮斤斧絕。松桂得干霄。　路窮して斤斧絕え、松桂霄を干すを得。

【字解】【一】野饋　饋は食物をおくる。【二】村沽　村酒に同じ。【三】斤斧　斧斤といふに同じ、淮南子に、草木未落、斤斧不得入山林。【四】干霄　唐書、劉迺傳に、干霄蔽日亘樹也。

【詩意】東に去つて石に攀づるを愁へ、西に來つて橋を渡るを怯る。それで南寺に塔があり、之を望むに愛すべきも、終に到ることが出來ない。章惇と同じく僊游潭に至つたから、野饋村酒で其の寂寥を慰藉する。路が險阻であつて、斧斤が入らないから、松や桂が十分に成長して霄を干して居る。

北寺

唐初傳有此。亂後不留碑。　唐の初傳へて此あり、亂後碑を留めず。
畏虎關門早。無村得米遲。　虎を畏れて門を關づる早く、村なくして米を得ること遲し。
山泉自入甕。野桂不勝炊。　山泉自ら甕に入り、野桂炊ぐに勝へず。
信美那能久。應先學忍饑。　信に美なるも那ぞ能く久しからん、應に先づ饑を忍ぶを學ぶべし。

【字解】【一】得米遲　杜子美の詩に、小市常爭米、孤城早閉門。【二】野桂不勝炊　戰國策に、楚國之食、貴於玉、薪貴於桂。【三】信美那能久　王粲の登樓賦に、雖信美而非吾土兮、曾何足以少留。

【詩意】唐の初は、北寺があつたが、亂後には其の碑まで遺らない。虎を畏れて早く里門を關ぢる。村がないので米を得ることが容易でない。山泉が自然に甕の中に入り、野桂は炊ぎきれないほど多くある。美いけれども、永く續きはしないから、先づ饑を忍ぶことを學ぶ方がよいであらう。

馬融石室

未レ應二將軍聘一。初從二季直一游。
絳紗生不レ識。蒼石尚能留。
豈害レ依二梁冀一。何須困二李侯一。
吾詩愼勿レ刻。猿鶴爲レ君羞。

【字解】【一】馬融　鳳翔志に、馬融、扶風人、今縣東南二十里有二絳帳村一。【二】季直　摯恂の字、摯恂は南山に隱る。融は之に從つて學ぶ。【三】蒼石尚能留　魏志明帝紀に、大柳谷口、夜激波湧溢、曉而有二蒼石一立二水中一、白石畫レ之爲二馬牛鳥八卦玉缺之象一、皆隆起、其文曰、大討レ曹云云、帝惡レ之使二鑿去一、以二蒼石一窒レ之、宿昔而白石滿焉、至二晉初一其文愈明云云。【四】困二李侯一　梁冀誣二李固一、馬融爲レ冀章草、吳祐謂レ融曰、李公之罪成二於卿手一云云。【五】猿鶴爲レ君羞　北山移文に、蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚。

【詩意】大將軍鄧隲は、馬融の名を聞いて、召して舍人としたが、馬融は其の命に應じなかつた。馬融は初、南山の摯恂に從つて學び、博く經籍に通ず。嘗て高堂に坐し、絳紗を帳前に施し、前は生徒に授け、後は女樂を列したといふことである。諸生常に千を以て數へ、次を以て相傳へ、其室に入るものが鮮かつたと傳へて居る。馬融は梁冀の爲に李固を罪する上奏を草したといふので非難されて居る。昔、魏の明帝の時、水中の蒼石、尚能く曹を討ずるの文を留めたから、梁冀に依るもよいであらうが、何ぞ李固を困めるのであるか。吾が詩は、愼んで刻する勿れ、猿も鶴も君の爲に羞ぢるのである。

玉女洞

洞裏吹レ簫子。終年守二獨幽一。
石泉爲二曉鏡一。山月當二簾鉤一。
歲晚杉楓盡。人歸霧雨愁。
送迎應二鄙陋一。誰繼楚臣謳。

【字解】【一】爲二曉鏡一　潘岳の懷舊賦に、俯鏡二泉流一。【二】山月當二簾鉤一　杜子美の月詩に、塵匣元開レ鏡、風簾自上レ鉤。

【詩意】洞中で簫を吹く女子は、一年中、獨幽を守つて居る。曉に起きて石泉を鏡とし、山月を簾鉤（すだれかけ）に當てる。歲晚れて杉も楓も衰へ、人歸つて霧も雨も愁へる。神を送迎するの辭、まさに鄙陋なるべし。誰か楚臣の謳に繼ぐものぞ。（紀昀いふ、結二句、自負と。）

【餘論】沅湘の間では、其の俗、鬼を信じ、歌舞を作して諸神を樂ましめる。屈原が放逐されて、沅

湘に至るや、其の辭の鄙陋なるを見て、爲に九歌の曲を作つた。屈原外傳に、原棲二玉笥山一、作二九歌一、至二山鬼篇成一、四山忽啾啾、若二啼嘯一、聲聞二十里外一、草木莫レ不二萎死一。

愛二玉女洞中水一。既致二兩瓶一。恐後復取而爲使者見紿。因破レ竹爲レ契。使寺僧藏二其一一。以爲往來之信一。戲謂之調水符一

玉女洞中の水を愛し、既に兩瓶を致す。後復取りて使者の爲に紿むかれんことを恐れ、因りて竹を破りて契となし、寺僧をして其の一を藏めしめ、以て往來の信となし、戲れに之を調水符といふ

欺謾久成レ俗。關市有二契繻一。誰知南山下。取レ水亦置レ符。古人辨二淄澠一。皎若二鶴與鳧一。吾今既謝レ此。但視符有無。常恐汲レ水人。智出二符之餘一。多レ防竟無レ及。棄置爲長吁。

欺謾久しく俗を成し、關市に契繻あり。誰か知らん南山の下、水を取るに亦符を置かんとは。古人淄澠を辨ず、皎として鶴と鳧との若し。吾今既に此を謝し、但符の有無を視る。常に恐る水を汲む人の、智符の餘に出でんことを。防多きも竟に及ぶことなからん、棄置して爲に長吁す。

【字解】【一】調水符　調は徵發の意。【二】欺謾　あざむき侮る、漢書、宣帝紀に、上二計簿一、具レ文而已、務爲二欺謾一以避二其課一。【三】關市　關所と市場、孟子、公孫丑篇に、關市譏而不レ征。【四】契繻　漢書の註に、繻、帛邊也、舊關出入、皆以レ傳、傳遣、因裂二繒頭一、合以爲二符信一。傳は驛馬。【五】辨二淄澠一　列子、說符篇に、孔子曰、淄澠之合、易牙嘗而知レ之。易牙は能く二水の味を知る。【六】鶴與レ鳧　莊子の駢拇篇に、鳧脛雖レ短、續レ之則憂、鶴脛雖レ長、斷レ之則悲。

【題義】東坡は僊遊潭の中興寺に留題し、自註にいふ、中興寺有二玉女洞一、洞中有二飛泉一焉甚甘と。洞中の水を愛して此詩が出來たのである。紀昀いふ、運レ意頗深、而措レ語苦淺、と。

【詩意】欺謾することが世の習ひとなつて、關所でも市場でも契繻が必要となつた。南山の下で水を取るにも、符を置く。昔、齊の易牙は、能く淄水と澠水との味を知つた、桓公は之を信じなかつたが、之を試した所、果して驗があつた。各〻特質がある。鳧の脛、短しと雖も、之を續がば、憂へなん。鶴の脛、長しと雖も、之を斷たば、悲しみなん。我、今、此をすてて、ただ符の有無を視る。水を汲む人の智が符の外に出でんことを恐れる。防いでも效がない。之を棄置して長吁する。

自僊游回。至二黑水一。見二居民姚氏山亭一。高絕可レ愛。復憩二其上一

僊游より回り、黑水に至り、居民姚氏の山亭を見る、高絕愛すべし、復、其の上に憩ふ

山鴉曉辭谷。似報遊人起。
出門猶屢顧。慘若去吾里。
道途險且迂。繼此復能幾。
溪邊有危構。歸駕聊復杞。
愛此山中人。縹緲如仙子。
平生慕獨往。官爵同一屣。
胡爲此溪邊。眷眷若有俟。
國恩久未報。念此慙且泚。
臨風浩悲叱。萬世同一軌。
何年謝簪紱。丹砂留迅晷。

山鴉曉に谷を辭す、遊人の起くるを報ずるに似たり。
門を出でて猶ほ屢〻顧みる、慘として吾里を去るが若し。
道途險にして且つ迂、此に繼いで復能く幾ぞ。
溪邊危構あり、歸駕聊か復杞む。
此の山中の人を愛す、縹緲仙子の如し。
平生獨往を慕ふ、官爵同一屣。
胡爲れぞ此溪の邊、眷眷俟つあるが若し。
國恩久しく未だ報いず、此を念へば慙ぢ且つ泚。
風に臨み浩として悲叱、萬世同一軌。
何れの年か簪紱を謝し、丹砂迅晷を留めん。

【字解】【一】黑水　谷の名。【二】鴉　鴉と同じ、廣雅に、純黑反哺者、謂二之烏一、小而腹下白、不二反哺一者、謂二之鴉一。【三】杞　車の下に在つて輪を止むる木、易に繫二於金杞一。【四】縹緲　はるかにひろい、杜子美の詩に、築居仙縹緲、杜牧の詩に、神仙高縹緲。【五】獨往　杜子美の詩に、野人時獨往。【六】溪邊　韓退之の瀧吏詩に、胡爲此水邊、神色久憾慌。【七】國恩久未報云云　韓退之の瀧吏詩に、叩頭謝吏言、始慙今更羞、歷官二十餘、國恩竟未酬。【八】悲叱　郭璞の詩に、撫心獨悲叱。【九】簪紱　冠をとめるかうがひと、官印の紐、李羣玉の詩に、白衣謝二簪紱一。

【題義】僊游潭から回つて黑水谷に至り、居民姚氏の山亭を見、高絶愛すべきであつたから、其の上に憩ひて詩を作り、又、文同（字は與可）と岐下に遇うて遂に交を訂んだ。

【詩意】山鴉の曉に鳴くのは、遊人の起きたのを報らせるに似てゐる。門を出てからも、猶ほ屢〻後を顧みる。我が里を去ることを慘むからである。道は險しく迂回して居る。これから、復、よく幾何ぞ。溪邊に高い構があるから、聊か車を留める。此山中の人は縹緲として仙人のやうである。平生、獨、往くことを好む。官爵を視ること屣のやうである。それで、此の溪の邊、特に心が引かれてならない。我は國恩久しく未だ報いないので、慙愧の至りである。風に臨み、心を撫でて悲叱する。何れの世も同じことである。何れの日にか官爵を棄てて、仙遊の樂を得たいものである。

南溪有二會景亭一。處二衆亭之間一。無二所見一。甚不二稱其名一。予欲二遷之少西一。臨二斷岸一西向。可二以遠望一。而力未二暇一。特爲二製名曰一。招隱。仍爲二詩一。以告二來者一。庶幾遷之。

南溪に會景亭あり、衆亭の間に處る、見る所なく、甚だ其の名に稱はず、予之を少しく西に遷さんと欲す、斷岸に臨んで西向、以て遠望すべし、而して力未だ暇あらず、特に爲に名を製して招隱といふ、仍つて詩を爲り以て來者

に告ぐ、庶幾くは之を遷さん

飛簷臨古道。高榜勸遊人。
未即令公隱。聊須濯路塵。
茆茨分聚落。煙火傍城闉。
林缺湖光漏。窗明野意新。
居民惟白帽。過客漫朱輪。
山好留歸屐。風廻落醉巾。
他年誰改築。舊製不須因。
再到吾雖老。猶堪作坐賓。

【字解】【一】招隱　隱者を招尋する意。【二】聚落　落は村里、綱目集覽に、人所聚居、故謂之村落・屯落・聚落。【三】煙火　人煙といふに同じ、飯を炊ぐ煙。史記、律書に、鳴雞吠狗、煙火萬里、可謂和樂乎。【四】城闉　城の門。魏書、崔光傳に、近在城闉。鮑照の詩に、驅駕越城闉。【五】白帽　隱者の服、杜子美の詩に、嘗念著白帽、朵微青雲端。【六】朱輪　漢の制、高貴の人は、馬車の輪を赤塗にする。漢、楊惲傳に、乘朱輪者十人。【七】留歸屐　南史に、謝靈運常に木屐を著け、山に上るときは則ち其の前齒を去り、山を下るときは、其の後齒を去る。【八】坐賓　劉禹錫の詩に、憶昔湯餅日、余爲坐上賓。

【題義】南溪に游んで口占したのである。會景亭の名は、其の實に稱はないから、東坡は之を斷岸の上に遷し、招隱亭と更名しようとした。力未だ暇がないので、詩を爲つて、其の事を記した。

【詩意】高い簷が古道に臨み、高い榜が遊人を勸める。全くの隱棲（かくれすむ）ではなくて、浮世の紅塵を濯ふのである。茅茨の家は、ここかしこに村里をなし、飯を炊ぐ煙は、城門に傍うて居る。森の缺け目に湖面が見え、窓が明るく、野趣が新である。ここに住つて居る人は、白紗帽で、裙（下裳）を反して項を覆うて居る。過客は朱塗の車、山の眺めがよくて歸屐を留め、風が來つて、醉巾を吹き落す。他日、誰が此の亭を改築するであらう。必しも舊製に由るを須ひない。吾は老いたけれども、再び到るときは、坐上の賓となるであらう。

凌虛臺

才高多感激。道直無往還。
如かず此臺上。酒を擧げて青山を邀へんには。
青山は遠しといふと雖も、亦公の顏を識るに似たり。
崩騰して幽賞に赴き、披豁して天慳を露はす。
落日翠壁を銜み、暮雲煙鬟を點ず。
浩歌清興發し、放意末禮刪る。
是時歲云に暮れ、微雪袍に洒いで斑なり。

凌虛臺

才高くして感激多く、道直くして往還なし。
如かず此臺上、酒を擧げて青山を邀へんには。
青山は遠しといふと雖も、亦公の顏を識るに似たり。
崩騰して幽賞に赴き、披豁して天慳を露はす。
落日翠壁を銜み、暮雲煙鬟を點ず。
浩歌清興發し、放意末禮刪る。
是時歲云に暮れ、微雪袍に洒いで斑なり。

吏退跡如掃。賓來勇躋攀。
臺前飛雁過。臺上雕弓彎。
聯翩向空墜。一笑驚塵寰。

【字解】【一】凌虛臺　鳳翔廨の後園に在る。廨は官舎。【二】舉酒　何遜の詩に　躊躇慚舉酒。【三】幽賞　靜に風景を賞玩する、李白の春夜宴桃李園序に、幽賞未已、高談轉清。【四】披豁　晉書の陸抗傳に、披豁聖懷。【五】天慳　朱子の詩に、洪源瀉天慳。【六】落日銜翠壁　李太白の烏棲曲詩に、青山猶銜半邊日。【七】煙鬟　髮の黑く美しい形容、韓退之の詩に、攏玉紆煙鬟。【八】放意　列子楊朱篇に、不逐世故、放意所好。【九】跡如掃　杜子美の詩に、山林迹如掃。【一〇】躋攀　登りよぢる、杜甫の詩に、一丘藏曲折、緩步有躋攀。【一一】聯翩　陸機の文賦に、浮藻聯翩、若翰鳥纓繳而墜層雲之峻。

【題義】凌虛臺は、陳希亮が鳳翔に知となつた時に建てた臺である。英宗の治平元年十月、陳希亮が此臺に招集し、相與に南山を望み、酒を酌み、雁を射、樂を爲して詩を作る。此の詩は、其の時の作である。

【詩意】鳳翔の守、陳公弼は清勁寡欲、才高くして、感激が多く、道直くして、人と往來が少い。故に此の凌虛臺で酒を擧げて青山を相手とする。青山は遠いが、亦、公（陳公弼をいふ）の顏を知つて居るやうである。山の崩騰する狀は、幽賞に價し、天の慳める景色をもさらけ出す。夕日は翠の壁に映じ、暮雲は煙の鬟（總髻）をあらはす。淸興に乘じて、浩歌が起り、思のままに寬いで末禮を廢する。歲はここに暮れる。（東坡の詩中、九月十月となると、常に歲暮と稱する）微雪は袍（綿入）に洒いで斑となる。役人も退散して、跡掃ふがやうである。然るに珍客が訪はれて、攀ぢ登らるる。臺の前には飛雁過ぎ、臺の上では雕弓（ゑり飾つた弓）を彎く。聯を聯ねて、空に向つて墜ち、一笑塵寰を驚かすやうである。（韓退之の雉帶箭の詩の意を取つて、句を變じたものである。雉帶箭の詩に衝人決起百餘尺、紅翎白鏃隨傾斜、將軍仰笑軍吏賀、五色離披馬前墮、とある。）

竹鼷

野人獻竹鼷。腰腹大如盎。
自言道旁得。采不費罝網。
鵾夷讓圓滑。混沌慙瘦爽。
兩牙雖有餘。四足僅能髣。
逢人自驚蹶。悶若兒脫襁。
念此微陋質。刀几安足枉。
就禽太倉卒。羞愧不能饗。
南山有孤熊。擇獸行舐掌。

【字解】【一】竹鼷　竹の根ぐひ鼠。食物本草に鼠食竹根、居土穴中、大如兎、人多食之、味如鴨。竹を食ふ、故に竹鼷といい

ふ。【二】腰腹大　韓退之の詩に、饑腹空大何能爲。【三】鴟夷　酒を盛る革囊、揚雄の酒箴に、鴟夷滑稽腹如二大壺一。滑稽は圓轉縱捨無窮の狀。【四】混沌　神異經に、崑崙西有レ獸焉、其狀如レ犬、長毛四足似レ熊、名爲二混沌一。【五】驚蹶　陸龜蒙の詩に、忽愁自驚蹶。【六】脫レ襁　易林に脫二於襁褓一、襁褓は小兒を負ふ衣。【七】就レ食太倉卒　宋書武帝紀に、保頸就レ擒。漢書、王嘉の傳に、臨レ事倉卒。【八】擇レ獸行舐レ掌　韓退之の詩に、擇二肉於熊羆一、肯視二兎與レ狸。庾信の詩に、熊飢自舐レ掌。埤雅に、熊冬蟄不レ能レ食、飢則自舐二其掌一、故其美在レ掌。

【題義】野人が竹鼠（竹根を食ふ鼠）を獻じたので、此詩を作つた。紀昀いふ、寓レ意而不二甚露一、由二於措語和平一と。

【詩意】野人の送つた竹鼠は、腰も腹も大きくて、盎（盆）のやうである。道ばたで捕へたもので、罝網の力を借りたのではない。鴟夷は革囊の酒器であるが、其の鴟夷も、圓滑は竹鼠に及ばない。肥えて居る混沌獸も、竹鼠に對しては、瘦爽を感じるであらう。そして兩牙は餘あるも、四足は僅によく髣髴して居る。人を見ると、驚き蹶く。悶することは、兒の襁（むつき）を脫するやうである。此の微陋の質に對して、刀儿を加へるには足らない。擒に就いたが、倉卒の際で饗することが出來ない。南山に孤熊がある。獸を擇んで、熊を取り其の掌を舐る。美味言ふべからざるものがある。（紀昀いふ、有下安問二孤狸一之慨上と。）

渼陂魚

渼陂の魚

霜筠細破爲二雙掩一。
中有二長魚如一臥劍一。
紫荇穿レ腮氣慘悽。
紅鱗照レ座光磨閃。
攜來雖遠鬣尚動。
烹不レ待レ熟指先染。
坐客相看爲二解顏一。
香粳飽送如レ塡レ塹。
早歲嘗爲二荆渚客一。
黃魚屢食沙頭店。
濱江易レ採不二復珍一。
盈尺輒棄無二乃僭一。
自二從西征一復何有。
欲レ致二南烹一嗟二久欠一。
游儵瑣細空自腥。

【字解】【一】渼陂　元和郡縣志に、渼陂在二鄠縣西五里一、周圍十四里。陂は魚を產す、甚だ美、因て之を名く。【二】雙掩　掩は揜と同じ、曲禮に、大夫不レ揜羣。掩は襲取の義、今、用ひて魚具の名とする。【三】如二臥劍一　孟浩然の詩に、遊魚擁レ劍來。西溪叢話に、何遜の詩を引いていふ、躍魚如二擁劍一と。【四】慘悽　杜子美の詩に、適レ越空顚躓、遊レ梁竟慘悽。【五】紅鱗　白樂天の詩に、膾縷落二紅鱗一。【六】指先染　指を入れて味を試みる、左傳宣公四年に、子公怒、染二指於鼎一、嘗レ之而出。子公は公子宋。【七】解顏　喜び笑ふ、列子の黃帝篇に、五年之後、夫子始一解顏而笑。【八】香粳　香ひよき米、唐書の地理志に、蘇州吳郡、貢二大小香秔一、粳は秔の俗字。【九】黃魚屢食　杜子美の詩に、頓頓食二黃魚一。【一〇】沙頭店　荆南府に屬す。【一一】嗟二久欠一　韓退之の南食の詩に、我來禦二魑魅一、自宜レ

亂骨縱横動遭砭。　亂骨縱横動もすれば砭に遭ふ。
故人遠饋何以報。　故人の遠饋何を以て報いん、
客俎久空驚忽瞻。　客俎久しく空しく忽ち瞻るに驚く。
東道無辭信使頻。　東道辭なく信使頻なり、
西鄰幸有庖虀醨。　西鄰幸に庖虀醨あり。

醨は、説文に、醨を酸に作る。酢漿のこと。

【題義】東坡の自註に陂在鄠縣にありと。魚は鄠縣の令が饋つたものである。（當時有司の力でなければ、生物を遠きに饋ることは出來ない。）杜子美の詩にも、渼陂行といふがある。陂中の魚美なるより名を得たのである。渼陂の魚を詠ずる所、居然杜詩の意がある。紀昀いふ、窄韻巧押、神鋒駿利、東坡本色、と。

【詩意】竹を細に劈いて二つの筌（漁具）を爲る。中に劍を擁する如き長魚がある。紫の荇で腮（顋の俗字、魚のあぎと）を穿つて慘悽（かなしみ痛む）の狀である。赤い鱗が際立ちて光り閃めく。遠くから攜へ來れるも鬣（魚肢）が尙ほ動いて居る。之を烹て、まだ熟しないうちに味はつて見る。坐客も相見て喜び笑つた。恰も香よきうるしねを十分に送り來つて塹めた時のやうであつた。昔、若い時分に、荆楚に旅行したことがある。（東坡が制科に應じた時、子由と父に侍し、舟行楚に適く。）

味南烹。【二】東道　主人となりて來客の世話をする。左傳、僖公三十年、以爲東道主、行李之往來、共其乏困。【三】信使　使者をいふ、文選、司馬相如の諭巴蜀檄に、故遣信使、曉諭百姓。【四】庖虀醨　庖は炊事場、虀は鹽づけの菜、沙頭店でも、度度黃魚に舌鼓を打つた。濱江では採り易いから、珍しいともしない。尺に盈つれば、則ち棄てる、極端ではなからうか。西征より以來、復、何もない。南方の黃魚を烹ようと欲しても、久しく不足である。鯈魚は腥いし、亂骨が縱横、ともすると、砭（石鍼）で刺される思をする。故人の遠く心からの饋は、何を以て報いよう。客の俎は久しく何もない時に忽ちこの渼陂の魚で瞻る。來客の世話する主人、辭なきも、使者は頻に至る。西鄰には幸ひ庖廚に、鹽づけもあり酢もあるから、立派な料理が出來る。渼陂の美を味はうではないか。

十二月十四日夜微雪。明日早往南溪。小酌至晚

十二月十四日夜微雪、明日早く南溪に往き、小酌晚に至る

南溪得雪眞無價。　南溪雪を得て眞に價なし、
走馬來看及未消。　馬を走らして來り看て未だ消せざる[一に及ぶ。]
獨自披榛尋履迹。　獨自ら榛を披て履迹を尋ね、
最先犯曉過朱橋。　最も先づ曉を犯して朱橋を過ぐ。
誰憐屋破眠無處。　誰か憐まん屋破れて眠るに處なきを、
坐覺村饑語不囂。　坐に覺ゆ村饑るゝて語囂しからざるを。

【字解】【一】走馬來看　韓退之の詩に、大明宮中給事歸、走馬來看立不正。【二】獨　一本に得に作る。【三】披榛　雜木をひらく、晉の趙景眞が嵇茂齊に與ふる書に、涉澤求蹊、披榛覓路。【四】履迹　東郭先生雪中履迹の故事を用ふ。【五】村饑語不囂　杜牧之の詩に、

惟有暮鴉知客意。　惟暮鴉の客意を知るあつて、
驚飛千片落寒條。　驚飛すれば千片寒條より落つ。

【題義】此詩を甲辰十二月（英宗の治平元年）の作とするものが多いが、王文誥は、公以甲辰十二月十七八間、離岐下、必不以十五日往南谿、小酌至晚也、況甲辰九月、公未嘗至南谿、何由十二月錄其九月所題竹上之詩乎、此乃八年所作云云と。論じて居る。八年は嘉祐八年癸卯で、東坡が二十八歲の時である。

【詩意】南溪に雪が降つて珍しいから、馬を走らして未だ消えないうちに來り看る。雜木を披いて人跡を覓め、眞先に曉を犯して朱塗橋を過ぎる。屋が雪に破られて眠る處もない憐れな人もあり、村が飢ゑて、人語も聞えない。ただ暮の烏が客あるを知り、驚いて飛ぶと、澤山の雪片が寒い枝から亂れ散る。（杜子美の茅屋爲秋風所破歌に、牀牀屋漏無乾處、兩脚如麻未斷絕、安得廣厦千萬間、大庇天下寒士俱懽顏、風雨不動安如山、嗚呼何時眼前突兀見此屋、吾廬觸破受凍死亦足。）

澤闊鳥來遲、村饑人語早。

九月中。曾題二小詩於南溪竹上。既而忘之。昨日再遊。見而錄之

九月中、曾て二小詩を南溪の竹上に題す、既にして之を忘る、昨日再び遊び、見て之を錄す

湖上蕭蕭疎雨過。　湖上蕭蕭疎雨過ぐ、
山頭靄靄暮雲橫。　山頭靄靄暮雲橫はる。
陂塘水落荷將盡。　陂塘水落ち荷將に盡きんとす、
城市人歸虎欲行。　城市人歸り虎行かんと欲す。
誰謂江湖居。　誰か謂ふ江湖の居にして、
而爲虎豹宅。　虎豹の宅となると。
焚山豈不能。　山を焚く豈能はざらんや、
愛此千竿碧。　此の千竿の碧を愛す。

【題義】前詩南溪に往いて小酌した時、去る九月に題した竹上二詩をも幷せ錄して歸つた。

【詩意】湖上を物寂しく疎雨が過ぎ、山頭には暮雲が靄靄として橫はる。陂塘は水が退け、荷も將に盡きんとする。城市は日暮れて人去り、虎は行かうして居る。」誰かいふ人間の居が、虎や豹の宅となると、（東坡は、前に終南よりして西す。縣尉、甲卒を以て相送るといへば、南溪の一路には信に虎があつたらしい。）山を焚くのは、別に難しいことではないが、此の千竿の綠竹を愛するから、斷行が出來ない。（紀昀いふ、投鼠忌器之意。）

【字解】【一】蕭蕭　ものさびしい、史記刺客傳に、風蕭蕭兮易水寒。【二】靄靄　雲の盛なる貌、韓退之の詩に、靄靄春空雲。【三】江湖　世間の意、陶潛の詩に、江湖多賤貧。

司竹監燒葦園。因召都巡檢柴貽勗左藏。以其徒會獵園下。

司竹監葦園を燒く、因つて都巡檢柴貽勗左藏を召し、其の徒を以て園下に會獵す

官園刈葦留枯槎。
深冬放火如紅霞。
枯槎燒盡有根在。
春雨一洗皆萌芽。
黃狐老兎最狡捷。
賣侮百獸常矜誇。
年年此厄竟不悟。
但愛蒙密爭來家。
風廻燄卷毛尾熱。
欲出已被蒼鷹遮。

官園葦を刈りて枯槎を留む、
深冬火を放ちて紅霞の如し。
枯槎燒き盡くして根のあるあり、
春雨一洗皆萌芽す。
黃狐老兎最も狡捷、
百獸を賣り侮りて常に矜誇す。
年年此の厄竟に悟らず、
但蒙密を愛して爭ひ來り家す。
風廻り燄卷いて毛尾熱す、
出でんと欲して已に蒼鷹に遮らる。

【字解】【一】司竹監　元和郡縣志に、司竹園、周圍百里、置監丞一掌レ之。唐六典に、司竹監掌下植二養園竹一之事上、副監爲二之貳一、凡宮掖及百官所レ須簾籠筐篚之屬、命二工人一擇二其材幹一以供レ之。【二】都巡檢　宋史職官志に、諸縣巡檢司、有二沿邊溪洞都巡檢一。【三】左藏　臨安志に、左藏、掌下受二四方財賦之入一、以待中邦國之經費上。【四】愛二蒙密一云云　蒙密は茂りてこまかなること、庾信が句に、撥二蒙密一兮見レ鵰。韓退之が宴喜亭記に、猿狖所レ家、魚龍所レ宮。【五】蒼鷹　鷹の一種、羽毛蒼白色な

野人來言此最樂。
徒手曉出歸滿車。
巡邊將軍在近邑。
呼來颯颯從矛叉。
戍兵久閒可小試。
戰鼓雖凍猶堪撾。
雄心欲搏南澗虎。
陣勢頗學常山蛇。
霜乾火烈聲爆野。
飛走無路號且呀。
迎人截來砉逢箭。
避犬逸去窮投罝。
擊鮮走馬殊未厭。
但恐落日催棲鴉。

野人來り言ふ此れ最も樂し、
徒手曉に出で歸るとき車に滿つと。
巡邊の將軍近邑に在り、
呼び來りて颯颯矛叉を從ふ。
戍兵久しく閒なり小試すべし、
戰鼓凍ると雖も猶撾つに堪へたり。
雄心搏たんと欲す南澗の虎、
陣勢頗る學ぶ常山の蛇。
霜乾き火烈しく聲野に爆す、
飛走路なく號し且つ呀す。
人を迎へ截り來つて砉として箭に逢ふ、
犬を避け逸し去つて窮して罝に投ず。
鮮を擊ち馬を走らし殊に未だ厭かず、
但恐る落日棲鴉を催すを。

帶ぶ、戰國策に、蒼鷹擊二子殿上一。【六】颯颯　風のそよそよと吹く貌、楚辭九歌に、風颯颯兮木蕭蕭。【七】可二小試一　史記、孫武傳に、吳王闔閭曰、可二以小試勒レ兵乎。【八】常山蛇　杜牧之の詩に、常山蛇陣勢縱橫。【九】呀　口を張る、獨孤及の射レ虎圖の詩に、饑虎呀呀立當レ路。【一〇】砉逢レ箭　砉は皮と骨と相離れる聲、莊子、養生主に、砉然嚮然、奏レ刀騞然。【一一】弊レ旗　弊は仆す義、周官、大司馬に、羣吏弊レ旗。【一二】分レ麚　爾雅に、鹿、牡麚牝麀、其子麟と見ゆ。【一三】飲啖　漢書の霍光傳に、與二從官一飲啖。【一四】古所レ咤　司馬相如の子虛賦に、畋罷、子虛過咤二烏有先生一言、僕對二齊王一曰、楚有二七澤一、嘗見二其一一、名曰二雲夢一、方九百里。又、秋田二乎青邱一、彷二徨乎海外一、呑下若二雲夢一者八

(一一)弊旗仆鼓坐數獲。
鞍挂雉兎肩分麞。(一二)
主人置酒聚狂客。
紛紛醉語晩更譁。
燎毛燔肉不暇割。
飲啖直欲追羲媧。(一三)
青邱雲夢古所(一四)吒。
與此何啻百倍加。
苦遭諫疏說夷羿。(一五)
又被詞客(一六)嘲淫奢。
豈如閒官走山邑。
放曠不與趨朝衙。(一七)(一八)
農工已畢歲云暮。
車騎雖少賓殊嘉。

旗を弊し鼓を仆し坐して獲を數ふ、鞍に雉兎を挂け肩に麞を分つ。主人酒を置き狂客を聚め、紛紛たる醉語晩に更に譁し。毛を燎き肉を燔き割くに暇あらず、飲啖直ちに羲媧を追はんと欲す。青邱雲夢は古の吒する所、此と何ぞ啻に百倍加はるのみならん。苦に諫疏夷羿を說くに遭ひ、又詞客に淫奢を嘲らる。豈如かんや閒官山邑に走り、放曠朝衙に趨るに與らざるに。農工已に畢り歲云に暮れ、車騎少しと雖も賓殊に嘉なり。

九、於二其曾中一、曾不二蔕芥一。【一五】諫疏說二夷羿一　左傳、襄公四年に、魏絳曰、於二虞人之箴一曰、在二帝夷羿一、冒二于原獸一云云、於レ是晉侯好レ田、故魏絳及レ之。又、前漢司馬相如傳に、嘗て上に從ひて長楊に至りて獵す。因りて疏を上りて諫む。【一六】詞客　一本に賦客に作る。司馬相如、揚子雲を指す。司馬相如の子虛賦に、烏有先生曰、足下不レ稱二楚王之德厚一、而盛推二雲夢一、以爲二高奢一、言二淫樂一而顯二侈靡一、竊爲二足下一不レ取也。揚雄傳に、上將下大誇二胡人一、以上レ多二禽獸一、雄從至二射熊館一、還上二長楊賦一、以諷諫。【一七】放曠　うち開いて廣い。晉書、桓石秀の傳に、性放曠、常七二釣林澤一。【一八】朝衙　朝早く朝廷に出勤する、白居易の詩に、城上鼕鼕鼓、朝衙復晩衙。【一九】獵獵　風の吹くこと、文選、鮑照の

酒酣上馬去不告。
獵獵霜風吹帽斜。(一九)

酒酣にして馬に上り去つて告げず、獵獵たる霜風帽を吹きて斜なり。

【題義】英宗の治平元年十一月、東坡が盩厔縣(陝西平安府、宋の時、鄠、盩厔一監、鳳翔に在り。)に赴いた時、たまたま司竹園の監が葦園を燒いた。(盩厔縣の南界、芒水の曲に竹林が多い。)因りて都巡檢柴貽勗左藏を召して、其の徒を以ゐて園下に會獵し、麞を炮り、兎を燔き、豪飲して歸り詩を作る。

【詩意】芒竹圃は、盩厔縣に在る。其の圃の葦を燒くは、官司の年例である。葦を刈り、枯槎を燒くも、槎の蘖は、春雨に逢うて萌芽する。黃狐や老兎は最も狡猾敏捷で、百獸を騙しては、自ら誇つて居る。而も年年此の厄あることを悟らない。ただ茂つて密なる處を愛して、爭ひ來つて隱れ家を造る。風廻り、焰卷いて、毛も尾も熱くなり、出ようと思つても、已に蒼鷹に遮られる。野人來り言ふ、これ最も樂し、曉に出たときは徒手でも、歸るとき、獲物は車に滿つと。巡邊の將軍は近邑に在つて戍兵を呼び集めると、颯颯として矛叉(刺股)を從へる。戍兵は久しく閒で、武事に習はないから、少しく試みるべく、戰鼓は凍つても、猶ほ撾つに堪へる。雄心が勃勃として起り南澗の虎を搏たうとする。狩場に於ける陣勢は、常山の蛇を學ぶ。(常山の蛇といふは、其の首を擊てば尾應じ、其の尾を擊てば首應じ、其の中を擊てば、首尾俱に應ずるのである。)霜乾き、火烈しく、聲が野に裂け破れる。飛び走るに路なく、號び且つ呀する(口を張る)人を迎へ截り來つて、砉然として箭に中るもあれば、獵犬を避け、逸し去つて、進退谷まつて罝に罹るもある。鮮(新しい肉)を擊ち、馬を走らして厭く

詩に、鱗鱗夕雲起、獵獵晩風過。

ことを知らない。ただ恐る、落日栖鴉の鳴くを催すを、旗を弊し鼓を仆して今日の獲物を數へる。鞍に雉や兎を挂け、肩には麞を分ける。主人は酒宴を開いて狂客を聚め、紛紛たる醉語は、晩となつて、更に八釜しい。毛を燎き肉を燔き、之を割くに暇がない。飲み啖ふこと、直に伏羲氏女媧氏の古代に返らうとする。（禮記に、昔者、先王未レ有二火化一、食二鳥獸之食一、茹レ毛飲レ血。）子虛の賦にある青邱の話や、雲夢大澤の話は、古人が世に咤つた所である。其の大いことは、之よりも百倍加はるばかりではない。而も當時は懇に諫疏を上つて曰く、帝夷羿が簒立するに及び、原野にすむ獸類をのみ冒り取らうとして、其國の大事を打ち忘れ、只管、田獵の事のみを考へたから、其の終りを好くしなかつたと。魏絳は、虞人の箴を引いて、晉侯を諫めたのである。又司馬相如や揚子雲等の詞客にも淫奢を嘲けられる。して見ると、閒官となつて山邑に走り、放曠、林澤に弋釣し、朝早く出勤するやうな面倒なことには與らない方がよい。農事工事も、已に畢つて、歳ここに暮れ、車騎は少いが、賓客は殊に嘉である。酒酣にして馬に騎つて去る。獵獵たる霜風は、帽を吹いて斜である。（北史に、獨孤信嘗因レ獵、日暮馳レ馬入レ城、其帽微側、詰旦吏民有二戴レ帽者一、咸慕レ信而側レ帽焉。）

和二子由木山引水二首一　子由が木山に水を引くに和す　二首

蜀江久不レ見二滄浪一。　蜀江久しく滄浪を見ず、
江上枯槎遠可レ將。　江上の枯槎遠く將ゆべし。

【字解】【一】木山　木假山。老泉の木假山記に詳なり。【二】滄浪　漢水のことであるが、ここは水色をいふ。陸機の詩に、垂影滄浪泉。【三】三犢載　犢は牛子、歐陽修の菱溪石の詩に、愛レ之遠徙向二幽谷一、曳以二三犢一載二兩輪一。【四】汪汪　後漢書の黄憲傳に、叔度汪汪若二千頃之陂一。

去レ國尚能三犢載。
汲レ泉何愛一夫忙。
崎嶇好事人應レ笑。
冷淡爲歡意自長。
遙想納涼清夜永。
窗前微月照二汪汪一。

【題義】子由の木山引レ水詩に、引レ水穿レ牆接二竹梢一、谷藏二峰底一大容レ瓢、將レ流旋滴廬山瀑、已盡還來海上潮、亂點落レ池驚睡覺、半山含レ潤沃二心焦一、瓦盆一斛何勝レ滿、溢去猶能浸二菊苗一、其の二にいふ、簷下枯槎拂二荻梢一、山川迤邐費二公瓢一、幽泉細細流二巖鼻一、盆水瀰瀰漲二海潮一、但愛堅如二湖上石一、誰憐收自二竈中一焦、蒼崖寒溜須二佳蔭一、尚少冬青石繭苗。此詩に和したのである。

【詩意】蜀江も久しく滄浪の水色を見ないから、江上の枯れた槎は遠く行るべきである。國を去るも尚ほ能く三犢に載することが出來る。泉を汲むには、一夫を勞すれば事足る。我の崎嶇（山のけはしきより轉じて人の困難の狀をいふ。）物好きには、人まさに笑ふことであらう。併し、世味に冷淡でも、心は自ら長閑である。遙にそなたの方を思ふに、納涼清夜の永くして、窗前の微月は汪汪（水の廣く深いことより轉じて度量の廣きに喩ふ。）の心を照らすことであらう。

千年古木臥無梢。浪捲沙翻去似瓢。幾度過秋生蘚暈。至今流潤應江潮。
泫然疑有蛟龍吐。斷處人言霹靂焦。材大古來無適用。不須鬱鬱慕山苗。

千年の古木臥して梢なく、浪沙を捲いて翻し去つて瓢に似たり。幾度か秋を過ぎて蘚暈を生じ、今に至るまで流潤江潮に應ず。泫然として蛟龍吐くあるかと疑ふ、斷つ處人は言ふ霹靂焦すと。材大にして古來適用なし、須ひず鬱鬱として山苗を慕ふを。

【詩意】千年の古木は、臥して梢もなく、浪は沙を捲いて、翻し去つて瓢の形を成す。幾度か秋を過ぎて、木の上に蘚の暈を生じ、今日に至るまでも、江潮に潤されて居る。(江に潮が來ると、枯木が相潤ふ。恰も相應ずるがやうである。)泫然として(涙の流れる貌)蛟龍が吐いたのかと疑はれる。古木の斷つた處は、霹靂の焦したものだと人は言ふ。古來、材大なれば用を爲し難いと、(杜子美の詩に、志士幽人莫二怨嗟一。古來材大難レ爲レ用。)鬱鬱として山上の苗を慕ふにも及ぶまい。(左太沖の詠史に、鬱鬱澗底松。離離山上苗。以二彼徑寸莖一。蔭二此百尺條一。)

【字解】【一】霹靂焦　唐柳宗元の霹靂琴贊序に、始枯桐生二石上一、說者言、蛟龍伏二其竅一、一夕暴震火レ之、焚至レ且乃已、其餘硿然倒二臥道上一、超道人取以爲二三琴一。【二】適用　晉書職官志に、或隨レ時適用。

和二子由苦寒見寄

人生不レ滿百。一別費二三年一。三年吾有レ幾。棄擲理無レ還。長恐別離中。摧二我鬢與顏一。念昔喜二著書一。別來不レ成篇。細思平時樂。乃爲二憂所レ緣。吾從二天下士一。莫レ如二與レ子歡一。羨子久不レ出。讀レ書蝨生氈。丈夫重二出處一。不レ退要レ當レ前。西羌解二仇隙一。猛士憂二塞壖一。廟謨雖レ不レ戰。虜意久欺レ天。山西良家子。錦緣貂裘鮮。千金買二戰馬一。百寶粧二刀鐶一。何時逐レ汝去。與レ虜試周旋。

子由が苦寒に寄せらるるに和す

人生百に滿たず、一別三年を費す。三年吾幾かある、棄擲して理還るなし。長く恐る別離の中、我が鬢と顏とを摧くを。念ふ昔著書を喜む、別來篇を成さず。細思平時の樂み、乃ち憂の緣る所となる。吾天下の士を從ふるは、子と歡するに如くはなし。羨む子久しく出でず、書を讀んで蝨氈に生ず。丈夫出處を重んず、退かずして當に前むべきを要す。西羌仇隙を解し、猛士塞壖を憂ふ。廟謨戰はずと雖も、虜意久しく天を欺く。山西良家の子、錦緣貂裘鮮し。千金戰馬を買ひ、百寶刀鐶を粧ふ。何れの時か汝を逐うて去らしめ、虜と試みに周旋せん。

【字解】【一】苦寒　杜甫の詩に、蠻夷長老怨二苦寒一。【二】人生不レ滿レ百　文選古詩に、生年不レ滿レ百、常懷二千歲憂一。【三】從二天下士一　史記魯仲連の傳に、新垣衍起再拜・謝曰、始以二先王一爲二庸人一、吾乃今日知二先生爲二天下之士一也。【四】西羌解二仇隙一　前漢書、趙充國傳に、元康三年、先零與二諸羌種亮二百餘人一解レ仇交レ質盟詛、仇言ある毎に、往來相報いたものを、仇を解いて質を交へるものは、自ら相親結し、漢に入りて寇をなさんとするのである。【五】憂二塞墮一　塞墮は塞垣、墮は牆外の短き垣、漢書、申屠嘉傳に、太上皇廟壝垣。註にいふ、宮外垣餘地也と。壝は墮と同じ。【六】廟謨　杜子美の詩に、廟謀蓄二長策一。後漢光武紀贊に、明明廟謨。【七】山西良家子　前漢趙充國傳に、以二六郡良家子、善二騎射一。又、贊にいふ、山西出レ將。【八】千金買二戰馬一云云　杜子美の詩に、千金裝二馬鞭一、百金裝二刀頭一。【九】與レ虜周旋　左傳、僖公二十三年に、重耳曰、左執二鞭弭一、右屬二櫜鞬一、以レ君周旋。晉書に、令二將士周旋一。

【題義】此詩は嚴しい寒さの時、子由が寄せられた詩に和したもので、治平元年十一月の作である。紀昀いふ、此不レ得レ志之憤詞、不二必實有二此想一也と。

【詩意】人生は百に滿たない。貴い光陰を一別三年も費した。(東坡は嘉祐六年十一月、鳳翔の任に赴き、治平元年に至る。正に三年である。)三年といへば永いが、吾に幾もなかつた。棄擲したものは、悔みても還る道理はない。いつも恐れるのは、別れて居る間に、我が鬢と顏とが摧け衰へることである。昔は著書を喜んだ我も、別れて後は、一篇も出來ない。細思して文を成すは平生の樂であつたが、今は却て憂の緣となる。天下の士を從へるは、人の欲する所であらうが、吾は子と共に歡する方がよい。子が久しく門を出でないで、朝夕書物に親しみ、蝨の氈に生ずるを覺えない境遇は、まことに羨しい。丈夫は出處進退を重んずる。退かないで、當に前むべきである。西羌は今や仇隙を解いて團結を固うした。漢に入つて寇を爲す準備ではあるまいか。言ふまでもなく、朝廷の議は、戰を欲しないが、虜の意は、いつも朝廷を欺いて、平和を破る。(夏人大擧して邊を犯す。王素に詔して之を治めしむ。素至るに及び、夏人卽日解け去る。)昔から山西は將を出すと言ひ傳へ、風俗武勇を尙び、良家の子も錦緣貂裘(てんの皮で作つた裘)のものが少い。千金で戰馬を買ひ、百金で刀頭を裝ふ。何れの時か、汝を逐うて行かしめ、虜と戰を交へたいものである。

寄題興州晁太守新開古東池

興州晁太守新に古東池を開くに寄せ題す

百畝清池傍レ郭斜。
居人行樂路人誇。
自言官長如二靈運一。
能使二江山似二永嘉一。
縱飲座中遺二白帢一。
幽尋盡處見二桃花一。
不レ堪二山鳥號二歸去一。
長遣二王孫苦憶家一。

【字解】【一】興州　漢中府、興安州。【二】晁太守　名は仲約。【三】行樂　樂みをなす、楊惲の詩に、人生行樂耳、須二富貴一何時。李白の詩に、行樂須レ及レ春。【四】似二永嘉一　太平寰宇記に、永嘉有二南亭、北亭、白岸亭、楠溪、石帆、石室、謝公池、謝公巖諸名勝一、靈運皆有レ詩。【五】白帢　帽をいふ、魏初、白帢の製あり、猶ほ白接䍦、白綸巾の如し。白帢は晉書、五行志に、白

接離は山簡傳に、白綸巾は謝萬傳に見ゆ。【六】見桃花　陶淵明記に、晉武陵人、捕魚爲業、緣溪行、逢桃花林。【七】號歸去　子規啼いていふ、不如歸去。【八】王孫　楚辭に、王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋。

【題義】此詩は治平元年十二月の作である。文與可の東池晴碧亭に題する詩に、鄭谷題詩處、荒涼不復知、使君來問日、景物欲歸時とある。新に古東池を開いたので、特に詩を寄せ題したのである。

【詩意】百畝の清池は、城郭に傍うて斜になつて居る。ここに住つて居る人は、ただ行樂に其の日を送り、路行く人も、觀光を誇つて居る。皆いふ官長は昔の謝靈運のやうであるから、能く江山をして永嘉郡の如からしめると。（宋書に、謝靈運爲永嘉太守、郡有名山水、素所愛好、既不得去、遂肆意遊遨、所至輒爲詩詠以致其意。）永嘉郡には名勝が多い。酒を十分に飲んで、座中に白恰を遺れ、幽尋して盡くる處に桃花林を見る。山鳥の不如歸去と鳴くを聞くに堪へない。遊んで歸らない王孫をして苦に家鄉を思はしめる。

華陰寄子由

三年無日不思歸。
夢裏還家旋覺非。
臘酒送寒催去國。
東風吹雪滿征衣。

華陰子由に寄す

三年日として歸るを思はざるなし、
夢裏家に還つて旋非を覺ゆ。
臘酒寒を送りて去國を催し、
東風雪を吹いて征衣に滿つ。

【字解】【一】華陰　元和郡縣志に、華州華陰縣、漢屬弘農郡。【二】臘酒　岑參詩に、臘酒飲未盡。【三】三峰　名山記に、華岳有三峰、直上數千仞、其廣而峰峻、有如削成。【四】四扇行看云云　韓退之の詩に、荆山已去華山來、日出潼關四扇開。

【五】里堠　堠は土を封じて臺を爲り、以て里を記す。韓退之が路傍堠の詩に、堆堆路傍堠、一雙復一隻。【六】消磨　歐陽修、豐樂亭記に、剗削消磨。【七】驂騑　駟馬の兩旁に在るもの、蔡邕の文に、車服照路、驂騑如舞。

三峰已過天浮翠。
四扇行看日照扉。
里堠消磨不禁盡。
速攜家餉勞驂騑。

三峰已に過ぐ天の浮翠、
四扇行くゆく看る日照の扉。
里堠消磨盡くるを禁せず、
速かに家餉を攜へて驂騑を勞す。

【題義】治平元年十二月、東坡が華陰縣に至つた時、子由に寄せた詩である。太華山は縣の南八里に在る。詩中に三峰とあるは、太華の三峰である。

【詩意】家を離れて三年、一日として歸るを思はないことはない。夢の中に、家に還つたが、暫くして其の然らざるに氣付いた。臘酒（十二月祭日に用ふ）を飲んで寒を送るも、去國の念を催し來る。既にして春風は雪を吹いて旅衣に滿つるも、太華の三峰は、已に天の浮翠である。四方がだんだん日に照らされる。一里塚を消して無くし、速に家餉を攜へて出發しよう。

和董傳留別

麤繒大布裹生涯。
腹有詩書氣自華。

董傳の留別に和す

麤繒大布生涯を裹み、
腹に詩書あり氣自ら華なり。

【字解】【一】董傳　字は至和、洛陽の人。詩名あり。嘗て鳳翔に在りて、東坡と相從ふ。【二】麤繒大布　繒は帛の總名、古は帛といひ、

厭伴老儒烹瓠葉。　老儒に伴ひて瓠葉を烹ることを厭ふ、
強隨舉子踏槐花。　強ひて舉子に隨つて槐花を踏む。
囊空不辦尋春馬。　囊空しうして春を尋ぬる馬を辦せず、
眼亂行看擇壻車。　眼亂れて行くゆく看む壻を擇ぶ車。
得意猶堪誇世俗。　意を得て猶ほ世俗に誇るに堪へたり、
詔黃新濕字如鴉。　詔黃新に濕うて字鴉の如し。

に曲江亭に於てです。其の日、公卿家縱觀し、鈿車珠鞅櫛比して至る。【六】詔黃　唐制、詔書は黃麻紙、黃藤紙を用ふ。

【題義】此詩も治平元年十二月の作、東坡が鳳翔を罷めて朝に還る時、董傳の寄せた詩に和したのである。紀昀いふ、句句老健。又曰く、結二句乃期許之詞、言外有炎涼之感、非有所不足於董傳也と。

【詩意】人は清貧を尚ぶ、麤帛大布で生涯を裹めるも、腹に詩書を蓄へれば、氣自ら華かである。老儒に伴つて瓠葉を烹るを厭ひ、(後漢書に、劉昆敎授弟子、恆五百餘人、每春秋饗射、常備列典儀、以素木瓠葉爲俎豆。)強ひて舉子(試驗に應ずる人)と槐花を蹈む。(長安の舉子、六月より後、落第者は京に出ない。之を過夏といふ。多くは靜坊廟院を借りて新文章を作る。之を夏課といふ。時に語して曰く、槐花黃、舉子忙と。)財囊も空しくなつて春を尋ねる馬を辦じられない。眼亂れて行くゆく看る壻を擇ぶの車を。(王文誥いふ、董傳未娶、故有此句。)意を得ては猶ほ世俗に誇るに堪へる。其れは黃麻紙を用ひた詔書が新に濕うて字は鴉のやうである。(盧仝の詩に、閒來案上翻墨汁、塗抹詩書如老鴉。)

漢代は緡といふ。陶潛の詩に、大布麤絺以應陽。【三】腹有詩書　韓退之の詩に、由腹有詩書。【四】烹瓠葉　詩小雅に、幡幡瓠葉采之烹之。幡幡は、ひるがへる貌。【五】舉子　官吏の登用試驗に應ずる人。【六】尋春馬　孟郊及第の詩に、春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花。【七】擇壻車　唐進士の開宴は、常

西蜀楊耆。二十年前。見之甚貧。今見之亦貧。所異於昔者。蒼顏華髮耳。女無美惡。富者妍。士無賢不肖。貧者鄙。使其逢時遇合。豈減當世之士哉。頃宿扶風驛舍。聞泣者甚怨。問之。乃昔富而今貧者。乃作一詩。今以贈楊君

西蜀の楊耆二十年前、之を見るに甚だ貧し、今之を見る亦貧し、昔に異る所の者は、蒼顏華髮のみ、女は美惡となく富めるものは妍、士は賢不肖となく貧きものは鄙、其をして時に逢ひ遇合せしめば、豈當世の士に減せんや、頃扶風驛舍に宿す、泣く者を聞くに甚だ怨む、之を問へば乃ち昔富みて今貧しきもの、乃ち一詩を作る、今以て楊君に贈る

孤村微雨送秋涼。　孤村微雨秋涼を送り、

【字解】【一】楊耆　(耆一に馨に

逆旅愁人怨夜長。
不寐相看惟櫪馬。
悲歌互答有寒螿。
天寒滯穗猶横畝。
歳晩空機尚倚牆。
勸爾一杯聊復睡。
人間貧富海茫茫。

逆旅の愁人夜の長きを怨む。
寐ねずして相看るは惟櫪馬、
悲歌互に答ふるは寒螿あり。
天寒うして滯穗猶畝に横はり、
歳晩れて空機尚牆に倚る。
爾に一杯を勸めて聊か復睡らしむ、
人間の貧富は海茫茫。

【題義】西蜀の楊耆、來り謁したが、貧甚しく、同情に堪へなかつたから、曩に扶風驛で貧に苦んで居たものを詠じた詩を楊君に與へた。卽ち雨の夜、扶風驛の逆旅で歌ふものの聲が悲しいので、之を問へば、昔は富みて今貧しくなつたものである。東坡は悽然として之に酒を飲ませ一詩を作つた。今日寒雨が止まない。忽ち其の事を憶ひ、且つ楊君の棲遲は逆旅の貧者と異らないことを念つて其の詩を出して贈つたのである。

【詩意】扶風の一驛、微雨と共に秋涼を送り、客舍の愁人は寐られないで、夜の長きを怨む。厩の馬と相看、秋の蟲と悲歌を交へて居る。天が寒うして、取り漏らした穗が、まだ田畝に横はつて居る。歳が晩れて、空の機織道具も壁に倚りかかつて居る。爾に一杯の酒を勸めて睡らしめる。(昔、晉の孝武帝の末年に、長星(慧星をいふ)が見はれた。帝は心に甚だ之を惡み、華林園で酒を擧げ、之を祝して、長星勸二汝一杯酒一、自レ古何有二萬歳天子一耶、と言つたことがある。)人間の貧富は測られない。恰も海の茫茫たるやうなものである。

夜直二祕閣一呈二王敏甫一

夜祕閣に直して王敏甫に呈す

蓬瀛宮闕隔二埃氛一。
帝樂天香似許聞。
瓦弄寒暉鴛臥月。
樓生晴靄鳳盤雲。
共誰交レ臂論二今古一。
只有閒心對二此君一。

蓬瀛宮闕埃氛を隔つ、
帝天香を樂みて似に聞かしむ。
瓦は寒暉を弄して鴛月に臥し、
樓は晴靄を生じて鳳雲に盤る。
誰と共に臂を交へて今古を論せん、
只閒心此君に對するあり。

【字解】【一】祕閣　崇文院中に在る。毎夜校理、校勘一人を輪して直宿せしむ。宋の時の祕閣の秩は、三館(昭文・集賢・史館)に視へて、較卑かつた。【二】蓬瀛　蓬萊と瀛洲。拾遺記に、歴二蓬瀛一而超二碧海一。之に方丈を合せて三神山といふ。【三】埃氛　宋史、王素傳に、埃氛翳レ

作る)應試の秀才であつたが、學未だ成らず、行囊已に竭きたもの。【二】蒼顏華髮　年老いて衰へたものの顏と髮、歐陽修、醉翁亭記に蒼顏白髮。晉、傅玄の詩に、十五入二君門一、一別終華髮。【三】遇合　時に合ひて用ひられる、史記佞幸傳に、力田不レ若レ逸レ年、善仕不レ若二遇合一。【四】扶風驛舍　一本に長安驛舍に作る。【五】微雨　一本に漸雨に作る。【六】送二秋涼一　送の字、一本に逐に作る。【七】逆旅　客舍をいふ、左傳、僖公二年逆旅の疏に、逆、迎也、旅、客也、迎二止賓客一之處也と見ゆ。【八】櫪馬　杜子美の守レ歳詩に、盍響喧二櫪馬一。【九】寒螿　方言の註に、寒蜩螿也と。【一〇】滯穗　とり漏らした穗、詩、小雅に、彼有二遺秉一、此有二滯穗一。【一一】空機　柳子厚の詩に、機杼空倚レ壁。【一二】勸二爾一杯一　孫皓の爾汝歌に、昔與レ女爲レ鄰、今與レ汝爲レ臣、上二汝一杯酒一、令二汝壽萬春一。

(八)大隱本來無境界。
(九)北山猿鶴漫移文。

大隱は本來境界なし、
北山の猿鶴漫に移文。

【題義】英宗の治平二年、東坡は鳳翔から召還されて祕閣に入り、次で史館に直することとなつた。史館に直して作つた詩である。(東坡は是時、史館を以て祕閣を兼ねて居つた。)

【詩意】神仙の宮闕は、絶えて塵ほこりの氣がない。帝は天香を愛されて、遙かに聞かしめらる。瓦の冬の日光に浴して居るは、鴛の月に臥したやうであり、樓上に晴靄の生ずるは、鳳鳥の雲に盤るやうである。誰と臂を交へて今古を論じよう。(九州春秋に、韓遂、樊稠交レ臂相加、共語良久。)只閒な心の此君(酒を指す)に對するあるのみ。大隱は山にあらずして市にある。本來境界はない。して見ると、かの北山移文にある夜鶴怨み、曉猿驚くの況は、草堂のみに限らない。此處にも寂寥はある。(鍾山は、都の北に在るから、北山といひ、所在に移し示す書であるから移文といふ。)

謝蘇自之惠酒

蘇自之酒を惠まるるを謝す

高士例須レ憐(一)麴蘖。

高士例須らく麴蘖を憐れむべし、

【字解】【一】麴蘖　かうぢ(酒を釀す酒母)轉じて酒のことに用ふ、韓退之の文に、何麴蘖之託、而昏冥

空。王融の淨行頌に、矯レ步寫二埃氛一。【四】天香　すぐれてよい香、李郢の詩に、馬隨二仙仗一識二天香一。【五】鳳盤レ雲　鮑照の詩に、鳳樓十二重。【七】此君　晉の王子猷の語を用ふ。白樂天の效陶詩に、乃知陰與レ晴、安可レ無二此君一。【八】大隱　白樂天の詩に、大隱在二朝市一。【九】北山猿鶴云云　孔稚圭の北山移文に、蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚。

此語常聞二退之說一。
我今有レ說殆不レ然。
麴蘖未二必高士憐一。
醉者墜レ車莊生言。
全レ酒未レ若全二於天一。
達人本是不二虧缺一。
何暇更求二全處全一。
景山沈迷(四)阮籍傲。
畢卓盜竊(六)劉伶顚。
貪狂嗜怪無レ足レ取。
世俗喜レ異矜二其賢一。
杜陵詩客尤可レ笑。
羅列八子(八)參二羣仙一。
流涎露レ頂置不レ說。

此語は常て退之が說に聞く。
我今說あり殆んど然らず、
麴蘖未だ必ずしも高士に憐まれず。
醉ふもの車より墜つ莊生いふ、
酒を全うするは未だ若かず天を全うするに。
達人は本是れ虧缺せず、
何の暇あつて更に全處の全きを求めん。
景山は沈迷し阮籍は傲る、
畢卓は盜竊し劉伶は顚ず。
貪狂嗜怪取るに足るなし、
世俗異を喜み其の賢に矜る。
杜陵の詩客尤も笑ふべし、
羅列の八子羣仙に參す。
流涎頂を露し置いて說かず、

之逃邪。【四】達人　道理に通達せる人、嵇康の文に、柳下惠・東方朔、達人也。賈誼の鵩鳥賦に、達人大觀兮、物亡レ不レ可。【三】景山　魏志に、徐邈字景山、魏亡びて晉に歸す。太傅謝安之を擧げて中書舍人に補す。【四】阮籍　晉書阮籍傳に、傲然獨得、任レ性不羈、嗜レ酒能嘯。【五】畢卓盜竊　晉書に、畢卓、字茂世、太興末爲二吏部郎一、常飲レ酒廢レ職、比舍郎釀熟、卓因醉夜至二其甕間一、盜二飲之一、爲二掌レ酒者一所レ縛。【六】劉伶　字伯倫、阮籍・嵇康と相遇ひ、欣然として神解す。常に鹿車に乘り、一壺酒を攜へ、人をして鍤を荷うて之に隨はしめ、謂つて曰く、死便埋レ我と。【七】杜陵詩客　杜甫をいふ。長安杜陵の東南十餘里、又一陵あり、少陵といふ。陵西に杜甫の舊宅がある。【八】羅列八子　飲

爲問底處能逃禪。
我今不飲非不飲。
心月皎皎常孤圓。
有時客至亦爲酌。
琴雖未去聊忘絃。
吾宗先生有深意。
百里雙罌遠將寄。
且言不飲固亦高。
舉世皆同吾獨異。
不如同異兩俱冥。
得鹿亡羊等嬉戲。
決須飲此勿復辭。
何用區區較醒醉。

爲に問ふ底の處にか能く禪を逃る。
我今飲まず飲まざるにあらず、
心月皎皎常に孤圓。
時あつて客至る亦爲に酌む、
琴未だ去らずと雖も聊か絃を忘る。
吾宗先生深意あり、
百里雙罌遠く將に寄せんとす。
且つ言ふ飲まざるも固より亦高し、
舉世皆同じきも吾獨異なる。
如かず同異兩ながら俱に冥きに、
鹿を得て羊を亡ふ嬉戲に等し。〔かれ、
決して須く此を飲むべく復辭するな〕
何を用て區區として醒醉を較せん。

【題義】此詩は治平二年二月、鳳翔から朝に還り、史館に直する時の作である。紀昀いふ、旋轉自如、

中の八仙、卽ち賀知章・汝陽王璡・李適之・崔宗之・蘇晉・李白・張旭・焦遂。羅列は、古雞鳴曲に、羅列自成行とある。【九】心月、孤圓　傳燈錄に、心月孤圓、光呑萬象。【一〇】雙罌　晉書、孔嚴傳に、餉吾兩罌酒。【一一】得鹿失羊　列子の周穆王篇に、鄭人有薪於野者、遇駭鹿、御而擊之、斃之、恐人見之也、遽而藏諸隍中、覆之以蕉、不勝其喜、俄而遺其所藏之處、遂以爲夢焉、順塗而詠其事、傍人有聞者、用其言而取之、既歸告其室人曰、向薪者、夢得鹿而不知其處、吾今得之、彼直眞夢者矣。列子の說符に、楊子之鄰人亡羊云云。【一二】嬉戲　史記に孔子爲兒嬉戲。【一三】醒醉　楚辭に、衆人皆醉我獨醒。

止如二口語一、而不レ落二淺易一、格力高也。然此種殊不レ易レ學、無二其格力一、而以二頹唐一出レ之、風斯下矣、と。

【詩意】高尙の士は、須らく酒を憐むべきであつて、韓退之が詩に、高士例須レ憐二麴糵一とあるは、吾等が耳に熟して居る。然るに今更に說がある。それは酒は必ずしも高士に憐まれないといふことである。莊子の達生篇に、夫醉者之墜レ車、雖レ疾不レ死、骨節與レ人同、而犯レ害與レ人異、其神全也とある。又、彼得二全於酒一、而猶若レ是、而況得二全於天一乎とある。醉つたものは、車から墜ちても、醒めて居る人よりも怪我は少い。其の神が全いからである。そして、酒を全うするは天を全うするに及ばない。達人は本來、虧缺(かける)した所がないから、更に全きを求める必要がない。徐邈は志高くして行が潔くあつた。併し尙書郎となつたとき禁酒の規があつたにも拘らず、邈は私に飲んで沈醉に至つた。阮籍は傲然として獨得、酒を嗜みて能く嘯く。畢卓は甕間に盜飲して酒を掌るものの爲に捕縛された。劉伯倫は酒杯を嗜んで形骸を遺る。酒を嗜み狂態をなすは、固より取るに足らない。然るに世俗は異を喜んで其の賢に矜る。特に杜陵の詩客(杜子美)は飲中八仙歌を作つて醉客を羣仙に比したのは、最も笑ふべきである。道に麴車に逢うて口涎を流したことも、帽を脫し頂を露はしたことも之を置いて問はない。(飲中八仙歌に道逢二麴車一口流レ涎、脫レ帽露レ頂王公前とある。)八仙歌の中に、蘇晉長齋繡佛前、醉中往往愛二逃禪一とあるが、何れの處に能く禪を逃るるか問うて見たい。我は今、酒を飲まない。飲まないのではない。心の中が皎皎として常に孤圓である。時あつて客が來ると、亦爲に